43-72
다5K80
973
J1.965/ㅅㅍ

校註徒然草

佐々木信綱

つれ〴〵なるまゝに、日くらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物ぐるほしけれ。

つれ〴〵なるは徒然にさびしき意なり
そこはかとなくはさてどもなくの意なり
物狂ほしけれとは此草紙をかけるよしの序なり

(二)いでや此世に生れて、願はしかるべき事こそ多かめれ。みかどの御位ゝいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまゝ更なり。たゞ人も、舎人などたまはるきはゝ、ゆゝしと見ゆ。其子うまごまでゝ、はふれにたれど、猶なまめかし。それより下つかたゝ、程につけつゝ、時にあひ、ときめき、みづからゝいみじと思ふら

竹の園生は漢文帝の子梁孝王竹園にすまはれし故事によりて親王をいへり
人間の種ならぬは天照大神の御末にてなくとの臣民と異なるを云ふ
一の人は摂政関白を云
舎人は大臣大将大中納言参議中少将などに朝廷より賜はる召つかひ人をいふ

木のはしは木のきれはしにて何のやくにもたいぬ者のたとへなり枕草子に思はん子を法師になしたらんこそいと心苦しけれさるは頼もしき業をたゝ木のはしのやうに思ひたちんこそいとはしけれとあり

増賀ひじりは橘恒平の子にて一條院の頃の人多武峯に住めり

名聞は人に名の聞ゆるやうにするをいふ

人はかたちありさまの云々これより品によらず人々の上のたしなみ願ふべき事をいへり

品かたちこそ云々これより前にいふ所の品のねがひ形ありさまのねがひ等よりも唯文才のねがひこそ肝心なれといふ意をいへり

賢きより賢きにもは論語學而篇に賢賢易色とあり

ざえは才學なり

めど、いとくちをし。法師ばかりうらやましからぬものハあらじ。人にハ木のはしのやうに思はるゝよと、清少納言が書けるも、實にさる事ぞかし。いきほひまうにのゝしりたるにつけて、いみじとは見にず。増賀ひじりのいひけんやうに、名聞ぐるしく、佛の御教にたがふらんとぞれぼゆる。ひたぶるの世捨人ハ、なかく〳〵あらまほしきかたもありなん。人ハかたちありさまの勝れたらんこそ、あらまほしかるべけれ。ものうちいひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、詞多からぬこそ、飽かずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心れとりせらるゝ本性見にんこそ口惜かるべけれ。品かたちこそ、生れつきたらめ。心ハなどか賢きより賢きにも、「うつさばうつらざらん。かたち心ざまよき人も、ざえなく成ぬれば、ゐなくだり、顔にくさげなる人にも

ありたき事はハ學び習ふべき事にてこれよりは學問藝能をいへりをかしくは可賞に面白きをいふ

いたましうする物からハ痛むさまをして辭しながらも人のわりなく強ふる時はさすがに下戸ならぬがよしとなり

いにしへの云々此段は人主たる人に儉約の道をすゝむる意なり

衣冠より云々遺誡に始自衣冠及于馬車隨有用之勿求美麗不量己力好美物則必招嗜欲之誘とあり

九條殿は九條右大臣師輔公なり

離熊院の云々順德天皇の著し給へる禁秘抄に天位著御物以疎爲美とあるをいふ

立まじりて、かけずけれさるゝこそ、ほいなきわざなれ。ありたき事ハ、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、又有職に公事のかた、人のかゞみならんこそいみじかるべけれ。手など拙なからずはしりかき、聲をかしくて拍子とり、いたましうする物から、下戸ならぬこそ、をのこハよけれ。

(二)いにしへのひじりの御代のまつりごとをも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるゝをも知らず。よろづに清らをつくして、いみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて思ふ所なく見ゆれ。衣冠より馬車に至るまで、あるに隨ひて用ひよ、美麗をもとむる事なかれとぞ、九條殿の遺誡にも侍る。順德院の、禁中の事ども書かせ給へるにも、れほやけのたてまつり物ハ、れろそかなるをもてよしとすとこそ侍れ。

萬にいみしくとも云々
此段後成卿の歌に戀せずは人は心もなからまし物の哀はこれよりそ知るとある歌の意なり
こを色をすゝむる文などゃうにあしく心得る事なかれ
さうぐしくは物寂しく事たらぬ意なり
あふさきるさはこなたよければかなたわろく一かたに定めがたき意なり
たやすからず云々女に輕しめ侮られすまめやかなる人と慕ひ思はれんこそその意なり
心にくしはおくゆかしの意なり
ふつゝかに云々は心定まらず何のあてどもなしに出家したるにはあらずしての意也
顯基ハ大納言後賢卿の子也後一條天皇前に給ひし時大原にて出家す撰集抄云朝につかへし

(三)よろづにいみじくとも、色好まざらんをのこは、いとさうぐしく、玉の盃の底なき心地ぞすべき。露霜にぬほたれて、所さだめずまどひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひみだれ、さるハ獨寢がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとて、ひたすらにたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

(四)後の世の事心に恣れず、佛の道うとからぬ、こゝろにくし。

(五)不幸に、うれへにぬづめる人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにハあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つ事もなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。顯基の中納言のいひけん、配所の月、罪なくて見ん事、さもおぼえぬべし。

そのかみより明暮あはれ罪くなして配所の月を見ばやと涙を流し給ふ云々
前中書王醍醐天皇の皇子中務卿兼明親王を云
九條太政大臣藤原伊通公なり御子二人おはせしをさきだて給へりし事經世續に見ゆ
花園左大臣輔仁親王の子源有仁公也具平親王の御孫のさせる人なきを見て御子のなかりしを却て喜び給へりし事又經世續に見ゆ
染殿のおとゞ太政大臣藤原良房公なり
世繼の翁の物語は大鏡をいふ
聖德太子云々太子傳に委し
あだし野鳥部山共に名所にはあらず唯葬所火葬場をさしていへるなり
かげろふは蜻蛉の一種

(六)我身のやんごとなからんにも、まして數ならざらんにも、子といふものなくてありなん。前中書王、九條太政大臣、花園の左大臣、皆ぞうたえん事を願ひたまへり。染殿のおとゞも、子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれたまへるハ、わろき事なりとぞ、世繼の翁の物語にハいへる。聖德太子の御墓を、かねてつかせたまひける時も、こゝをきれ、かしこをたて、子孫あらせじと思ふなりと侍りけるとかや。

(七)あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立さらでのみ、住はつるならひならば、いかに物のあはれもなからん。世ハさだめなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきハなし。かげろふの夕べをまち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくぐと一年を暮らすほどだにも、こよなうのどけし

にてさはめて小さき虫をいふ淮南子に蜉蝣朝生夕死而蕣其樂とあり夏の蟬莊子に云蟪蛄不知春秋註云蟪蛄寒蟬也春生夏死夏生秋死不見四時全とあり

命長ければ云々莊子に多男子則多畏富則多事壽則多辱是三者非所以養德也とあり

ゆふべの日に云々白氏文集に朝露貪名利夕陽愛子孫とあり朝露は壯時にたとへ夕陽は老後にたとへたるなり

えならぬは一とほりならず何ともいひがたくよきをいふ

久米の仙人元亨釋書に久米仙者和州上郡人也入深山學仙法食松葉服藥忽一旦騰空飛過故里會婦人以足踏洗衣其脛甚白忽生染心即時墜落とあり

や。あかず惜しと思はゞ、千歳を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。住み果てぬ世に、見にくきすがたを待ち得て、何にかハせん。命長ければ耻おほし。長くとも四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。その程過ぎぬれば、かたちをはづる心もなく、人に出交らはん事を思ひ、夕べの日に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪ぼる心のみ深く、物のあはれも知らずなり行くなんあさましき。

(八)世の人の心惑はす事、色欲にハまさかず、人の心ハおろかなるものかな。にほひなどは假の物なるに、まばらく衣裳にたき物すと知りながら、にならぬにほひにハ、かならず心ときめきするものなり。久米の仙人の、物洗ふ女の、脛の白きを見て、通を失ひけんハ、まことに手足肌などの、清らに肥えあぶらづき

うちあるさまうちは助辭にて唯あからさまに居る樣との意なり

打とけたるいもねずはゆるくとは疑もやらぬをいふ

六塵眼耳鼻舌身意の六根をけがしくもらする色聲香味觸法の六つをいふ

大象も云々大威德陀羅尼經に一切女人爲不除欲乃至以女人髮爲作繩維香象能繫況丈夫耶とあり

女のはけるあしだ古語なるべし出所知りがたし野鞋には今も狩人のするわざなりといへり

たらんハ、外の色ならねば、さもあらんかし。

(九)女ハ髮のめでたからんこそ、人の目だつべかめれ。人のほど心ばへなどは、物言ひたるけはひにこそ、物でしにも知らるれ。事に觸れてうちあるさまにも、人の心をまどはし、すべて女のうちとけたるいもねず、身を惜しとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬ業にも、よく堪へ忍ぶは、只色を思ふが故なり。まことに愛着の道、其根ふかく源とほし。六塵の樂欲多しといへども、みな厭離しつべし。その中に、たゞかのまどひの、一つやめがたきのみぞ、老たるも、若きも、智あるも、愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる。されば女の髮すぢをよれる綱にハ、大象もよく繫がれ、女のはけるあしだにて作れる笛にハ、秋の鹿かならずよるとぞ、いひ傳へ侍る。みづからいましめて、恐るべく、つ

つしむべきハ、この惑なり。

(十)家居のつきゞしくあらまほしきこそ、假のやどりとハ思へど、興あるものなれ。よき人ぢのどやかに住なしたる所ハ、さし入たる月の色も、一際あはれまさりて、木だち物ふりて、わざとならぬ庭の草も、心きらゝかならねど、水のたよりをかしく、うちある調度あるさまに、すのこすいがいのたよりをかしく、うちある調度も、昔おぼえてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。多くのたくみの、心をつくしてみがきたて、からのやまとの、珍らしくえならぬ調度どもならべ置き、前栽の草木まで、心のまゝならずつくりなせるハ、見る目も苦しくいとわびし。さてもやハ長らへ住むべき。又時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るより思はるゝ。大方は家居にこそ、事ざまハおしはからるれ。後德

假のやどりは莊子に吾生殊逆旅耳ともありて此世ハたゞしの旅居なりといふ意なり

すのこは簀子にて今の樣側なり

すいがいは透垣なり

調度は手道具をいふ

心のまゝならずは折り挑めなどしてこちたくつくりなせるをいふ

さてもやは云々さやうに匠どもの心をつくさせて作らせたりとも常住すべきものにはあらずとの意なり

大寺の大臣の寢殿に、鳶ゐさせじとて、繩をはられたりけるを、西行が見て、鳶の居たらんハ、何かは苦しかるべき、この殿の御心、さばかりにこそとて、其後ハまゐらざりけると聞き侍るに、綾の小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、彼ためし思ひ出られ侍りしに、まことや、烏のむれゐて、池の蛙をとりければ、御覽じ悲しませたまひてなんと、人の語りしこそ、さてハいみじくこそとおぼえしか。德大寺にも、いかなる故か侍りけん。

(十一)神無月の頃。栗栖野といふ所を過ぎて。ある山里に尋ね入る事侍りしに、はるかなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木葉に埋もるゝ懸樋の雫ならでは、つゆ音なふものなし。閼伽棚に、菊紅葉など折り散したる、さすがに住む

後德大寺の大臣は左大臣藤原實定公也

寢殿は常に住み給ふ殿をいふ

西行は藤原秀郷九代の孫佐藤兵衛憲清出家して四位と號し後西行と改す後鳥羽院の北面也

綾の小路の宮は白川天皇の皇子性慧法親王なり

德大寺にも云々されは德大寺殿に繩を張りて鳶をよせざりしも何か理由のありし事ならんも知れねは一偏に勝りいふべきにはあらずとなり

栗栖野は山城醍醐の邊なり

侍りしにこはありしにといふべき所なり此冊子上に奉りたる書ならねば敬語を用ふべきにあらず上にも二つ三つ見えたり皆これにひとしく誤なり

閼伽棚あかは水の梵語なり佛に水を供へ又草

木の花などを折添て巻る爲に用ふる棚をいふ

枝もたわゝに云々枝も撓みあわるほどに實のなりたるをいふ

同じ心ならん人と此段友に心友而友の二つの品あることをいひていとゝ〳〵むつかしよゝ考ふべし

あるまじければの下世のつねの友のわかちをいひあげつらはんになどの意を省略せるものなり

つゆ違はざらん云々は我にこびへつらふ而友をいへるなり

さやは思ふは君にあかいへど我はさやうには思はずともど〳〵意也

さるからさがはとある故にかゝりとことわりいふ意也

人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、哀に見る程に、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、すこしことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。

(十二)同じ心ならん人と、まめやかに物語して、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなく言ひ慰まんこそ、嬉しかるべきに、さる人あるまじければ。つゆ違はざらんと對ひ居たらんは、獨ある心地やせん。互に言はんほどの事をば、げにと聞くかひある物から、いさゝか違ふ所もあらん人こそ、我はさやうに思ふなど、爭ひにくみ、さるからさぞとも打語らはゞ、つれ〴〵なぐさまめと思へど、げにはすこしかこつ方も。われとひとしからざらん人は、大方のよしなし事いはんほどこそあらめ。まめやか

かこつはかこつけ言よりうつりて腹立ち怨み思ふ意にいへり

大方の云々普通の益もなき事を語らふほどは徒然をも慰むべけれどといふ意にて弱道心友と語らふが樂しき事をいへるなり

文選は梁武帝の子昭明太子の選なり

白氏文集は唐の白樂天の集なり

老子は老子經二巻あり

南華篇は莊子をいふ唐玄宗の時莊子を封して南華眞人といひしかばかかいへり

和歌こそ猶は上の文選文集よりもまさりて其上にをかしとの意なり

一ふしをかし〳〵云々新奇におもしろ〳〵頗意にかなへてよみたるはあれどの意なり

糸による云々古今集羇旅部に貫之糸による物ならなくに別路の心細の心の友にゝ、はるかに隔たる所の、ありぬべきぞわびしきや。

(十三)獨ともしびのもとに、文をひろげて、見ぬ世の人を友とすることこそ、こよなう慰むわざなれ。文ゝ文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子のことば、南華の篇、この國の博士どもの書ける物も、いにしへのゝ、あゝれなる事多かり。

(十四)和歌こそ猶をかしき物なれ。あやしのまづ山賤のまわざも、言ひ出ればおもしろく、恐ろしきねのしゝも、ふすねの床といへゝ、やさしくなりぬ。この頃の歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、詞の外に、哀に景色おぼゆるゝなし。貫之が、糸による物ならなくにといへるゝ、古今集の中の歌屑とかや、いひ傳へたれど、今の世の人の、よみぬべきことがらとゝ見にず。其世の歌にゝ、姿

くもおもほゆるかなとある歌なり

物といなしには源氏物語總角の巻に物とはなしにと貫之が此世ながらの別をだに心細きすちに引かけゝんとあり

殘る松さへ云々新古今集冬部に落葉祝部成仲冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峰にさびしきとあり

衆議判は和歌所にて判者を定めず歌人寄合て相議し判定するを云

家長は右馬助源家長後鳥羽院建仁元年和歌所の開闔たりしよし拾芥抄に見ゆ

歌枕は名所枕詞の兩意あれどこゝは枕詞をいへるなるべし

梁塵秘抄は後白河院御作とあり

郢曲文選に有歌於郢中者とありて郢は楚國の都なりこれより節をつけて謠ふものをさかいへり

いづくにもあれ云々此段羇旅の中にて人のたしなみ心もちひをかきたり

目さむるは氣のつゝ意なり

さやうの所云々萬事心を用ひざれば旅は離義に逢ふ事あればなり

なまめかしゝ風流の意にてしなやかに優美なるをいふ

笛は横笛をいふ琵琶は四絃和琴は六絃にてあづまごとともあづまとばかりもいふこの二器は一器にてきゝくもをかしければつねにきゝたしといへるなり

心のにごりは煩惱心をいふ

人は云々明心寶鑑に蘇武曰賢人多財損其心愚人多財益其過老子曰多財失其真守多學惑於所聞とあり

詞このたぐひのみ多し。この歌にかぎりて、かく言ひ立てられたるも知りがたし。源氏物語にハ、物とハなしにとぞかける。新古今にハ、殘る松さへ嶺にさびしき、といへる歌をぞいふなるは、誠にすこしくだけたる姿にもや見ゆらん。されどこの歌も、衆議判の時、よろしきよしさたありて、後にも、殊更に感じ仰せ下されけるよし、家長が日記にハかけり。歌の道のみ、いにしへにかはらぬなどいふ事あれど、いさや。今もよみあへる、同じ詞、歌枕も、昔の人のよめるは、更に同じ物にあらず。やすくすなほにして、姿も清げに、哀も深く見ゆ。梁塵秘抄の郢曲の詞こそ、又哀なる事ハ多かめれ。昔の人ハいかにいひ捨たる言ぐさも、皆いみじく聞ゆるにや。

(十五)いづくにもあれ、さばし旅だちたるこそ、めさむる心地すれ。其わたりこゝかしこ見ありき、ねなかびたる所、山里などは、いと目なれぬ事のみぞ多かる。都へたより求めて文やる。その事かの事、便宜に恐るるなど、いひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。もてる調度まで、よきハよく、能ある人、かたちよき人も、常よりハをかしとこそ見ゆれ。寺社などに、忍びてこもりたるもをかし。

(十六)神樂こそ、なまめかしくおもしろけれ。おほかた物のねにハ、笛、篳篥、常に聞きたきハ、琵琶、和琴。

(十七)山寺にかき籠りて、佛につかうまつるこそ、つれ〴〵もなく、心のにごりも清まる心地すれ。

(十八)人ハおのれをつゞまやかにして、奢を去りぞけ、たからを持たず、世を貪ほらざらんぞ、いみじかるべき。昔より、賢き

許由高士傳に許由隱箕山以手捧水飲之人遺一瓢得以受飲之掛於樹上風吹歷々作聲尚以爲煩遂去之とあり
なりひさご和名抄に瓢奈利比佐古斟水器也とあり因云瓢をひやうたんと心得るは誤なり瓢はひさご鎭は竹のくみ籠なり

孫晨蒙求に孫子字元公家貧織席爲業明詩書爲京兆功曹冬月無被有蓐一束暮臥朝收とあり
これらの人は云々許由孫晨の如き人は狂人の如く思ひて書物には更にもいはず語り傳ふる事だに我國の人へせざるべしとの意なり
物の良は云々萬葉集一の卷なる額田王の長歌又拾遺集雜下にある所に春秋いづれがまさると問はせ給ひけるにはみて奉りける貫之春は

人の富めるハ稀なり。もろこしに許由といひつる人ハ、更に身に隨がへるたくはへもなくて、水をも、手して擎げて飲みけるを見て、なりひさごといふ物を、人の得させたりければ、ある時、木の枝に懸けたりけれバ、風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて捨てつ。又手に結びてぞ、水も飲みける。いかばかり心のうち涼しかりけん。孫晨ハ冬月に衾なくて、藁一束ありける を、夕べにハこれに臥し、朝にハ收めけり。もろこしの人ハ、是をいみじと思へばこそ、志るしとゞめて、世にも傳へけめ。これらの人ハ、語りも傳ふべからず。

(十九)折ふしの移りかはるこそ、物毎にあはれなれ。物の哀ハ、秋こそまされ と、人毎にいふめれど、それもさるものにて、今一きは、心もうきたつものハ、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども、ことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萠に出る頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう〳〵けしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつゞきて、あわたゞしうちり過ぎぬ。青葉に成り行くまで、よろづに唯心をのみぞなやます。花橘ハ名にこそ負へれ。猶梅の匂にぞ、いにしへの事も、立かへりこひしう思ひ出らるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすてがたきこと多し。灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに、茂り行くほどこそ、世の哀も、人の戀しさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月菖蒲ふくころ、さ苗とる頃、水鷄の叩くなど、心細からぬかハ。六月の頃、あやしき家に、夕顏の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓又をかし。棚機祭るこそ なまめかしけれ。やう

たゝ花のひとへにさくばかり物のあはれは秋がまさるなどいへるによりてかけり

花橘は云々古今集夏部に五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香そする
梅の匂にがは新古今集春上に家隆梅が香に昔をとへば春の月答へぬ影が袖にうつれる
灌佛四月八日に行はるゝ佛事也
祭は四月中の酉の日に行はるゝ加茂祭をいふ
灌佛祭の事は江次第公事根源等にくはし
人の仰せられし誰ともわきがたし
六月祓六月晦日河原に出て身を祓へ清むるわざにて禁中にても下ざ

まにてもするなりこも公事根源などにくはし夜寒になるほど云々源氏夕顔の巻に白妙の衣うつ砧の音も幽にこなたかなた聞わたされ空とぶ雁の聲とりあつめて忍び難き事多かりなどある詞にてかけりことふりにたれどは言ひ古るしてめづらしげもなけれどとの意也

をさ〳〵俗にアンマリタイテイなどいふ意なり

すさまじき物にしては枕の草子にすさまじき物をはすの月夜とあり御佛名十二月十九日より廿一日まで禁中にて行はる、佛事にて三世の佛名を唱ふる事なり荷前の使議の終に十陵八墓に勅使を遣し幣帛を奉らしむるをいふ春のいそぎは春を迎ふる用意支度の意なり追儺十二月晦日に行はる、鬼やらひをいふ四方拜正月元日に四方の山陵を天皇の拜ませ給ふ御式をいふ佛名荷前追儺四方拜等くはしくは江次第公事根源等につきて見るべし魂祭るわざ拾遺集に魂祭る年の終に成にけり今日にや又もあはんとすらんとありて十二月つもごりに行ひしを今は絶えにたり

かくて明行く空のけしき云々玉葉集に貫之今日に明て昨日に似ぬは皆人の心に春のたちにけらしなこれらの意を思ふべし

ほだしは羈絆の意にて

〳〵夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、わさ田かりほすなど、とりあつめたる事は、秋のみぞおほかる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕の草子などにことふりにたれど、同じ事、又今更に、いはじとにもあらず。おぼしき事いはぬハ、腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべき物なれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵おとるまじけれ。汀の草に、紅葉のちりとゞまりて、霜いと白うおけるあした、遣水より、烟のたつこそをかしけれ。年の暮はてゝ、人毎にいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじき物にして、見る人もなき月の、寒けくすめる、廿日あまりの空こそ、心ぼそき物なれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやんごとなき。公事ども忌げく、春のいそぎに取重ねて、もよほしおこなはるゝさまぞいみじきや。追儺より、四方拜につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜、いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門叩き、走りありきて、何事にかあらん、ことゞしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。なき人の來る夜とて、魂まつるわざハ、此頃都にハなきを、あづまの方にハ、猶する事にてありしこそ哀なりしか。かくて明行く空のけしき、昨日にかはりたりとハ見えねど、引かへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、又あはれなれ。

（二十）何がしとかやいひし世捨人の、此世のほだしもたらぬ身

俗にいふヂヤマモノ也
空のなごり雪月花折々の空のけしきのうつりゆくなごりにて世はすてつる物から空の景色には猶心とまるよしなり

風のみこそ云々新古今集秋上に西行おしなべて物を思はぬ人にさへ心をつくる秋の初風
水のけしきこそ論語に水哉々々往者如斯不捨晝夜とあり
沅湘日夕云々三体詩に湘南即時戮忠倫。盧橘花開楓葉衰。出門何處望京師。沅湘日夜東流去不爲愁人住少時とあり
嵇康云々文選嵇康興山澤書に游山澤穫魚鳥心甚樂之一行爲吏此事便廢とあり竹林の七賢の一人なり
何事も云々此段は古風を著ひて萬の器財より

に、たゞ空のなごりのみぞ惜きといひしこそ、誠にさも覺ゆべけれ。

(廿一)よろづの事ハ、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、月ばかり、おもしろき物ハあらじといひしに、又一人、露こそ哀なれと、爭ひしこそをかしけれ。折にふれば、何かハあはれならざらん。月花ハ更なり。風のみこそ、人に心ハつくめれ。岩に碎けて、清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。沅湘日夜東に流れ去り、愁人の爲にとゞまること少時もせずといへる詩を、見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も、山澤にあそびて魚鳥をみれば、心たのしぶといへり。人遠く水草きよき所に、さまよひありきたるばかり、心なぐさむ事ハあらじ。

(廿二)何事もふるき世のみぞ慕はしき。今やうハ、無下にいやしくこそなり行くめれ。かの木の道のたくみのつくれる、うつくしきうつはものも、古代の姿こそ、をかしと見ゆれ。文の詞などぞ、昔の反古どもハいみじき。たゞいふことばも、くちをしうこそなりもて行くなれ。いにしへハ、車もたげよ、火かゝげよとこそいひしを、今やうの人ハ、もてあげよ、かきあげよといふ。主殿寮の人數だてといふべきを、たちあかしもろくせよといひ、最勝講の御聽聞所なるをば、御こうのろとこそいふを、こうろといふ。口をしとぞ、ふるき人ハ仰せられし。

(廿三)衰へたる末の世といへど、なほ九重の神さびたるありさまこそ、世づかずめでたき物なれ。露臺、朝餉、何殿、何門などハ、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にも有ぬべき、小蔀、小板敷、高遣戸なども、めでたくこそ聞ゆれ。陣に夜のまうけせよと

文選言語にいたるまで皆昔にかはり昔より劣れるよしをいへり
今やうは當世風の意也
主殿寮は殿上の洒掃の事を掌るつかさなり
人數だて節會御神樂などに主上別殿に渡御し給ふに殿上人脂燭を執り主殿寮二人炬火を執りて供奉す是を人數だてといふ
たちあかし和名抄に炬火をよみて松明の類なり
最勝講五月に禁中にて行はる、佛事なり

世づかず世俗を離れての意にて源氏などの用ひざまとは異なり
朝餉は天子の朝の御膳を朝餉と云てそを供する間をいふ清涼殿の内の南にあり

陣簡會の時諸卿の列坐する所にて清涼殿の前紫宸殿の西に當りて陣座といふあり

よるのおとゞは天子の御寢所なり

内侍所賢所ともいひて神鏡を安置せさせ給ふ所なり

東大寺太政大臣は後鳥大寺左大臣實定公の孫にして藤原實基公をいへるなり

齋宮天子位に即かせ給へは内親王を伊勢大神宮に遣し侍らしめ給ふを云ふ左衛門の陣に忌竹を立てこもらせ其八月より翌年八月まで又野宮にうつりてこもりおはしまして伊勢に下向し給ふなり

野宮は嵯峨の有栖川にあり

中子染紙延喜式齋宮忌詞の條に佛稱中子經稱染紙塔稱阿良々木寺稱瓦葺僧稱衆長云々と有

いふこそいみじけれ。よるのおとゞのをば、かいともしとうよなどいふ。又めでたし。上卿の、陣にて事行(ことおこな)へるさまゝ更なり。諸司の下人どもの、ものたりがほに、なれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこに、眠り居たるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音ハ、めでたく優なる物なりとぞ、徳大寺の太政大臣ハ仰せられける。

(廿四)齋宮の野宮におはしますありさまこそ、やさしくおもしろきことの限とはおぼえしか。經、佛など忌みて、中子(なかご)、染紙などいふなるもをかし。すべて神の社こそ、すてがたくなまめかしき物なれ。物ふりたる社の、けしきもたゞならぬに、玉垣もわたして、さか木に木綿(ゆふ)かけたるなど、いみじからぬかハ。殊にをかしきハ、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原

伊勢賀茂云々名ある神社どもを擧げいへるなり

飛鳥川の淵瀬古今集雜に世中は何か常なる飛鳥川昨日の淵が今日はせになるとあり

野らたゞ野にてらいそへていへる辭なり

京極殿法成寺京極殿は道長公俗にての御殿法成寺は入道して住給ひし寺なり

御堂殿は太政大臣藤原道長公世に御堂關白と稱して最權勢をきはめし人なり

庄園は私領をいへどこゝハ多くの田地を寺領に附られしをいへり

正和の比正和は花園院の年號なり

無量壽院法成寺にあり阿彌陀を安置せる堂なり此院造られし事世編

野、松尾、梅宮、

(廿五)飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば、時うつり事去り、樂しびかなしび行かひて、花やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなり、變(かは)らぬすみかハ、人あらたまりぬ。桃李物いはねば、誰と共にか昔を語らん。まして見ぬいにしへの、やんごとなかりけん跡のみぞ、いとはかなき。京極殿、法成寺など見もこそ、心ざしとゞまり、事變じにけるさまハあはれなれ。御堂殿の造りみがゝせ給ひて、庄園多く寄せられ、我御ぞうのみ、みかどの御うしろみ、世のかためにて、行末までと思しれきし時、いかならん世にも、かばかりあせはてんとハおぼしてんや。大門、金堂など、近くまでありしかど、正和の比、南門ハ燒けぬ。金堂ハ、其後たふれふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし。無量

の物語に委しく見えたり
行成大納言日本三蹟の一人なり
兼行大和守藤原兼行也法華堂法華三昧おこなふ堂なりこも法成寺にありしなり

見ざらん世までは死して後の世の事までとの意なり

風も吹きあへず云々古今集に櫻花さくちりぬともおもはえず人の心か風もふきあへぬ又色見えで移ろふものは世中の人の心の花にか有けるなどあり
白き糸の云々淮南子に楊子見逵路而哭之爲其可以南可以北墨子見練糸而泣之爲其可以黄可以黑とありて高誘が註に惘其本同而末異と見えたり風雅集に昔たれ人の心を白糸の染れば染まる色になしけんともよめり
昔見し權大納言藤原公實の歌なり
御國讓の節會天皇御讓位の御式をいふ北山抄江次第等にくはし
劒璽内侍所寶劒璽鏡神鏡の三種の神器をいふ
新院花園天皇を申す
殿守の伴のみやつこは主殿寮の下司にて禁庭を掃除する者をいふ
諒闇天子崩御して新帝御喪に籠り給ふほどを云さて天子の喪は以月易日とて十二日なるをこゝは一年をさしていへり
倚廬御忌中の御假屋をいふ
布の帽額今ある西洋風の窓かけの類なり常は絹なれと諒闇なれば布

壽院ばかりぞ、其かたとて殘りたる。丈六の佛九躰、いと尊とくて並びおはします。行成大納言の額、兼行がかける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども、いまだ侍るめり。是も又いつまでかあらん。かばかりの名殘だになき所々へ、おのづから石ずゑばかりのこりたるもあれど、さだかに知れる人もなし。されば、よろづに、見ざらん世までを、思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。

(廿六)風も吹きあへず、移ろふ人の心の花に馴れにし年月を思へば、あはれと聞きし言の葉ごとに、忘れぬ物から、我世の外になり行くならひこそ、なき人の別よりも、まさりて悲しきものなれ。されば白き糸の染まん事をかなしび、道のちまたの分れん事を、なげく人も有りけんかし。堀川院の百首の歌の中に、

昔見し妹が垣根は荒にけりつばなまじりのすみれのみして、

さびしき景色、さる事侍りけん。

(廿七)御國讓の節會行はれて、劒璽、内侍所、渡し奉らるゝ程こそ、限なう心ぼそけれ。新院のわりなさせ給ひての春、よませたまひけるとかや。

殿守の伴のみやつこよそにしてはらはぬ庭に花ぞちりしく

今の世の事まけきにまぎれて、院には參る人もなきぞさびしけなる。かゝる折にぞ、人の心もあらはれぬべき。

(廿八)諒闇の年ばかり、哀なる事へあらじ。倚廬の御所の樣など、板敷をさげ、蘆の御簾を懸けて、布の帽額荒々しく、御調度ども粗に、皆人の裝束、太刀、平緒まで、異樣なるぞゆゝしき。

(廿九)靜に思へば、よろづに過ぎにし方の戀しさのみぞ、せん

のをかくるなり
皆人の云々裝束は鈍色太刀は黒漆平緒は無文鈍色または香色などを用ふ飾抄にくはし
具足品々の道具を一具にそなへたるをいふ
この頃ある人現在世に生きてある人をいふ
中陰四十九日の間をいふ佛祖統紀に人死七七然後免中陰之趣とあり
山里などにうつろひて亡者のため親族たちと共に山寺などにゆきて住むさまなり此頃のならはしなりしなるべし
物にも似ぬはたとへんかたもなき意なり
はての日は四十九日の終の日をいふ
行きあかれぬは行き別るゝの意にて山里より各立かへりて其すみかくに歸るさま也

かたなき。人ちづまりてのち、長き夜のすさびに、何となき具足とりちらしたゝめ、殘しれかじと思ふほうぐなど、やりすつる中に、なき人の、手ならひ、繪かきすさびたる、見出たるこそ、たゞそのの折の心地すれ。此頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけんと思ふに、あはれなるぞかし。手馴れしぐそくなども、心もなくて、かはらず久しき、いと悲し。

(三十)人のなきあとばかり、悲しきことなし。中陰の程、山里などにうつろひて、便(たより)あしく狹き所に、あまたあひ居て、後のわざどもいとなみあへる、心あわたゞし。日數の早くすぐる程ぞ、物にも似ぬ。はての日にいとなさけなう、たがひにいふこともなく、我かしこげに、物ひきちらしたゝめ、ちりぐに行きあがれぬ。もとのすみかに歸りてぞ、更に悲しき事に多かるべき。さかぐ

跡の爲に忌むは五菜日に強逸すれば其跡五人死すなどやうの事をいふなるべし
去る者は云々文選に古詩云去者日已疎來者日已親註云去者謂死也來者謂生也とあり
その際ばかり云々死にたる當時程は其人を思はぬ故にやとの意也
卒都婆釋氏要覽に又梵云蘇偷婆此云塔婆云窣堵婆此云墳とあり
思ひ出て云々かの忌日ばかりにても猶思ひ出て戀忍ぶ人のある間とそとぶらひまうづる事もあれどその人も亦世になき人となればいよくはかなくなりゆくとなり
千歲をまたで云々文選に古詩云出郭門直視但見丘與墳古墓犂爲田松柏摧爲薪とあり

の事に、あなかしこ、跡のため忌むなることぞ、などいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心に、猶うたておぼゆれ。年月經ても、つゆ忘るゝにもあらねど、去る者に日々に疎しといへるごとなれば、さこそいへど、その際(きは)ばかりに覺えぬにや、よしなしごといひて、うちも笑ひぬ。からに、けうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり、まうでつゝ見れば、程なく、卒都婆(そとば)も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕べの嵐、夜の月のみぞ、言とふよすがなりける。思ひいでゝ忍ぶ人あらん程こそあらめ。そも又ほどなく失せて、聞き傳ふるばかりの末々に、哀とやは思ふ。さるに跡とふわざも絶ぬれば、いづれの人と、名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、心あらん人に、あはれと見るべきを、はてに嵐に咽(むせ)びし松も、千歲をまたで薪にくだかれ、古き

其かたへその古墳の跡形なり

成ぬるぞ悲しきは此段のはじめのなき跡ばかり悲しきへなしに遙に照照せるなり

人のがりは人のもとへなり

ひが〳〵しからんは無風流にいひがひなき意なり

さそはれ奈りては兼好が貴人に誘はれてと也

思し出る所は途中にて其貴人或家に立寄べき所を思ひ出られしなり

塚へ鋤(すき)れて田と成りぬ。其かたぢに、なくなりぬるぞ悲しき。

(卅一)雪のおもしろう降りたりしあした、人のがり、いふべき事ありて、文をやるとて、雪の事、何ともいはざりし返事(かへりごと)に、此雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひが〳〵しからん人の仰せらるゝ事、聞き入るべきかは、かへすがへすも、口惜しき御心なりと、いひたりしてそをかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりの事も、忘れがたし。

(卅二)九月廿日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明るまで、月見ありく事侍りしに、思し出る所ありて、あないせさせて入り給ひぬ。荒たる庭の露繁きに、わざとならぬ匂、志めやかに打かをりて、忍びたるけはひ、いと物哀なり。よきほどにて出で給ひぬれど、猶事ざまの優に覺えて、物のかくれより、志ばし見居

やがて云々かへる客をおくり出してすぐに内に駈込みなば見おとりもせんを月見るけはひにてながめたるは誠にゆかしかりしをそれも見る人のありと思ひてゐかかまへたるにはあらずと也

聞き侍りしは上にとぞとありしが脱たるか又は侍りきとありけんを誤れるなるべし

有職の人は故實を知れる人をいふ

玄輝門院伏見天皇の母后なり

櫛形俗に火燈口とてなべての家にもつける如きものなるへし

えふの入りては木爪のやうにうちへ入りたるにて四くなきを云

甲香は和名抄に螺屬也可合衆香燒之皆使益芳獨燒則臭とありカイカウと訓むべし

たるに、妻戸を今すこしあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。跡まで見る人ありとへ、いかでか知らん。かやうの事へ、たゞ朝夕の心づかひによるべし。其人、程なく失せにけりと聞き侍りし。

(卅三)今の内裏造り出されて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難なしとて、既に遷幸の日近くなりけるに、玄輝門院御覽じて、閑院殿の櫛形のあなへ、圓く緣(ふち)もなくてぞ有りしと仰せられける、いみじかりけり。是へえふの入りて、木にてふちをまたりければ、あやまりにて、なほされにけり。

(卅四)甲香(かいかう)へ、ほら貝のやうなるが、ちひさくて、口の程の、細長にしていでたる貝のふたなり。武藏の國金澤といふ浦にありしを、所の者は、へなたりと申し侍るとぞいひし。

金澤は金澤文庫など有し地なり

仕丁は召使の下部なりさて下部あらば一人かし給へといひ來りし也

さもあるべき事也兼好の評言にて男女の中に限らず朋友の間も心はへかくうらなくあらまほしとの意也

ともある時ハふとして何事ぞある折ふしの意なり此段親しき中に禮を忘れず又疎き人には和を貴ぶ意なり

名利につかはれては名の爲利の爲に心勞するをいふ

(卅五)手のわろき人の、はゞからず、ふみ書きちらすハよし。見ぐるしとて、人にかゝするハうるさし。

(卅六)久しく音づれぬころ、いかばかり恨むらんと、わがれこたり思ひ知られて、ことばなき心地するに、女の方より仕丁やある、一人、などいひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよきと、申しはべりし、さも有るべきことなり。

(卅七)朝夕隔てなく馴たる人の、ともある時、我に心おき、引つくろへるさまに見ゆるこそ、今更かくやハなど、いふ人も有べけれど、猶げにくしく、よき人かなとぞおぼゆる。疎き人の、打解けたる事などいひたる、又よしと思ひつきぬべし。

(卅八)名利につかはれて、靜なる暇なく、一生を苦しむるこそ

たから多ければ云々文選に多財爲患害とも又不懷寶以買害分不飾表以招累ともあり

身の後には云々白氏文集に身後堆金拄北斗不如生前一樽酒とあり

ナなる車云々范曾公の詩に肥馬衣輕裘揚々過閭里雖得市魚橋還爲識者鄙とあり

金は山に捨て云々文選東都賦に捐金於山沉珠於淵とあり

家に生れは賞き家筋に生れぬればとの意也

いみじかりし賢人聖人云々文選嵇康が與山巨源絶交書に老子莊周吾之師也規居賤職柳下惠東方朔達人也安乎卑位吾豈敢短之哉とある詞どもによりてかけるなるべし

れろかなれ。たから多ければ、身をまもるにまどし。害をかひ、わづらひを招くなかだちなり。身の後にハ、金をして北斗をさゝふとも。人の爲にぞわづらはるべき。愚なる人の、目を悅ばしむるたのしみ、又あぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉の飾も、心あらん人ハ、うたておろかなりとぞ見るべき。金ハ山に捨て、玉ハ淵になぐべし。利に惑ふハ、すぐれて愚なる人なり。埋もれぬ名を、長き世に殘さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高く、やんごとなきをしも、優れたる人とやハいふべき。愚に拙き人も、家に生れ、時にあへば、高き位に昇り、奢りを極むるもあり。いみじかりし賢人、聖人、みづから卑しき位に居り、時にあはずしてやみぬる、また多し。ひとへに高きつかさ位を望むも、次に愚なり。智惠と心とこそ、世にすぐれたる譽も殘

人のきゝは名聞にて人がその名を聞き傳ふる事をいふ

譽は又毀のもとなり韓愈送李愿序に與其有譽於前孰若無毀於其後とあり

身の後の名晉書に張翰曰使我有身後名不如即時一盃酒とあり

智惠出ては云々老子に大道廢有仁義智恵出有大僞とあり

可不可は一條なり莊子齊物論に方可方不可方不可方可とあり

まことの人云々莊子木宗師論に有眞人而後有眞物また逍遙遊に至人無巳神人無功聖人無名など見ゆ

萬事は非なり新詠に萬事皆非燈火涙一生半暮月前悔とあり

さまほしきを、つらく思へば、譽を愛するハ、人のきゝを喜ぶなり。譽むる人、毀る人、共に世にとゞまらず。傳へ聞かん人、またく速に去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。譽ハ又毀のもとなり。身の後の名、殘りてさらに益なし。これを願ふも、次に愚なり。たゞ強て智を求め、賢を願ふ人の爲にいはゞ、智惠出てハ僞あり。才能ハ煩惱の增長せるなり。傳へて聞き學びて知るハ、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。可不可ハ一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人ハ、智もなく、德もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰か傳へん。これ德をかくし、愚をまもるにハあらず。もとより賢愚得失の境に居らざればなり。迷の心をもちて、名利の要を求むるに、かくのごとし。萬事ハみな非なり。いふにたらず。願ふにたらず。

法然上人源空と號す漆間氏にして美作國稻岡の人なり始めて淨土專念宗を唱へたりくはしくは元亨釋書に見ゆ

目の覺めたらんほどは目のさめてあらん間の意なり

レひおりは此女を得たきよしを無にいひ入るゝなり

おやゆるさざりけり此段入道をほめて書けりとも貶しめたりとも二說あれど皆雅好が心にハあらざるべし唯うち聞きたる事をかけるなるべし

(卅九)ある人、法然上人に、念佛の時、眠に侵されて、行をおこたり侍る事、いかゞして、この障をやめ侍らんと申しければ、目の覺めたらんほど、念佛し給へと答へられたりける、いと尊かりけり。又往生ハ、一定と思へば一定、不定と思へば不定なりといはれけり。是も尊し。又疑ひながらも、念佛すれば往生すともいはれけり。是も又尊し。

(四十)因幡の國に、何の入道とかやいふものゝむすめ、容貌よしと聞きて、人數多いひわたりけれども、此むすめ、たゞ栗をのみ喰ひて、更によねの類を喰はざりければ、かゝることやうのもの、人に見ゆべきにあらずとて、親ゆるさざりけり。

(四十一)五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に、雜

賀茂のくらべ馬其儀式は雅中抄公事根源にくはし

棟は俗に云せんだんの木にて紫の花さくものなり

ついまては踞居にて俗に云つくばり居る事なり

あざみはあきるゝ意也

我心に云々兼好の心にふと思ひ浮びたるまゝにいひ出しと也

所をさりては場所をよけてとの意なり

人立隔てゝ見にさりしかば、おのゝおりて、搦の際によりたれど、殊に人多く立こみて、分け入りぬべきやうもなし。かゝる折に、むかひなる棟の木に、法師の登りて、木のまたについねて、物見るあり。取つきながら、いたう睡りて、落ちぬべき時に、目をさます事度々なり。是を見る人、あざけりあざみて、世のまれ者かな、かく危ふき枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ、といふに、我心にふと思ひしまゝに、我らが生死の到來、たゞ今にもやあらん、それを忘れて、物見て日を暮す、愚なる事ハ、猶まさりたるものをといひたれば、前なる人ども、まことにこそ候ひけれ、もともおろかに候ふといひて、皆うしろを見かへりて、爰へ入らせ給へとて、所をさりてよび入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かハ思ひよらざらん。なれども、折からの

人木石にあらねば云々文選鮑照詩に人非木石豈無感とあり

唐橋中將參議中將源雅清なり

教相眞言宗に行をするを事相といひ經論聲教を學ぶを教相といへり

氣のあがるは上氣する病をいふ

二の舞の面安摩とてをかしき舞の次に舞ふを二の舞と云ふ其舞に用ふる面にて色赤くしておそろしき面なり其圖集古十種に出たり

春の暮つ方云々此段文章いと幽艶にしておかも慎獨の教にかなへる段なり

思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにしもあらず。

（四十二）唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧有けり。氣のあがる病ありて、年のやうくたくるほどに、鼻の中塞がりて、息も出でがたければ、さまぐにつくろひけれど、わづらはしくなりて、目眉額なども、腫れまどひて、打おほひければ、物も見にず。二の舞の面のやうに見にけるが、たゞ恐ろしく、鬼の顔になりて、目ハいたゞきの方につき、額のほど、鼻になりなどして、後ハ、坊のうちの人にも見にず、こもりゐて、年久しく有りて、猶煩はしくなりて、死にけり。かゝる病もある事にこそ。

（四十三）春の暮つ方、長閑やかに艶なる空に、賤しからぬ家の、

庭に散り敷れたる花云々白氏文集に盈見人家花便入不論貴賤與親疎とある意なり

あやしの云々此段又文章いとめでたし

狩衣色は定れる掟なし袖く、りあり桃花蘂葉に狩衣の時は必烏帽子を用ふとあり

こき指貫濃紫の指貫也和名抄に奴袴佐師奴岐乃波加萬西宮記に指貫王者已下衆人共所用也古時有制臣下不用近代五位已上昇殿六位用之とあり狩衣の時は勿論衣冠の時に夏冬ともに用ふ

奥ふかく、木立物ふりて、庭に散り萎れたる花、見すぐしがたきを、さし入りて見れば、南面の格子、みなおろして、さびしげなるに、東にむきて、妻戸のよきほどにあきたる御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年二十ばかりにて、打とけたれど、心にくゝのどやかなるさまして、机の上に、文をくりひろげて見ゐたり。いかなる人なりけん、尋ね聞かまほし。

(四十四)あやしの竹の編戸のうちより、いとわかき男の、月かげに、色あひさだかならねど、艶やかなる狩衣に、こき指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、遙なる田の中の細道を、稲葉の露にそぼちつゝ、わけ行くほど、笛をいならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしくて、見おくりつゝ行

見おくりつゝゆけば兼好のゆかしく思ひて跡をとめ行きしなり

惣門のある内寺の大門の内なり

楣和名抄に楣之知床也とあり車の轅をすゑておく楽なり

廊廊下にて長くたてたるをいふ古くわたどのとよめり又堂の内陣の左右にもうといふ所もあり

かごとがましく不足をいふやうになくさま也

都の空よりは云々といとかすかにとぢめられたる殊にめでたき辭法なり

公世閑院の末流従三位實俊の子にて洞院實雄の子となられし人なりせうと兄人にてせひとの音便なり

けば、笛を吹きやみて、山の際に、惣門のある内に入りぬ。楊にたてたる車の見ゆるも、都よりハ、目とまる心地して、下人に問へば、志かゞの宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにやといふ。御堂の方に、法師ども参りたり、夜寒の風にさそはれ來る空焼物の匂も、身に志むこゝちす。寝殿より、御堂の廊に通ふ女房の追風よういなど、人目なき山里ともいはず、心づかひしたり。心のまゝに繁れる秋の野らハ、おきあまる露に埋れて、虫のねかごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりハ、雲のゆきゝも早き心地して、月の晴れ曇る事定めがたし。

(四十五)公世の二位のせうとに、良覺僧正ときこえしハ、極て腹あしき人なりけり。坊の傍に大なる榎木ありければ、人に

僧正僧の極官にて推古天皇の時始て任じ給ふ大僧正は聖武天皇天平七年に置かれたり

きりくひは切株なり

清水河海抄に寶龜十一年初建延暦廿四年官符界四至以田村丸私宅寄附とあり

はなひは啞にてくさめするをいふ

やしなひ君わが養育せし君にて此尼乳母にてありしなり

の木の僧正とぞいひける、此名まかるべからずとて、かの木を伐られにけり。其根のありければ、きりくひの僧正といひけり。いよ〳〵腹立ちて、切くひを掘捨てられたりければ、其跡大なる堀にてありければ、堀池の僧正とぞいひける。

(四十六)柳原の邊に、强盜法印と號する僧有りけり。度々强盜にあひたるゆゑに、此名をつけにけるとぞ。

(四十七)或人清水へ參りけるに、老たる尼の行きつれたりけるが、道すがら、くさめ〳〵といひもて行きければ、尼御前、何事をかくへのたまふぞと問ひけれども、いらへもせず、猶いひやまざりけるを、度々とはれて、うち腹立ちて、やゝ、はなひたる時、かくまじなはねば、死ぬるなりと申せば、やしなひ君の、比叡の山に、兒にておはしますが、たゞ今もやはなひ給はんと思へ

光親卿按察使權中納言正二位光親堀川の中納言と號す永久七年十二月駿河國にて北條氏の爲に殺さる東鑑に委し

院は後鳥羽院なり

衝重今の三方に同じき物にて四方に穴のあきたるをいふ

有職のふるまひ云々故實を知りたる擧動の意也そはわがあづかる奉行を專一にして其外の感覺をつくろはざりしを感じ給へりとの意なり

老來りて云々粟山頌に莫待老來方學道古墳多是少年人とある句を取用ひたるなり

ば、かく申すぞかしといひけり。ありがたき心ざしなりけんかし。

(四十八)光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へめされて、供御をいだされて、くはせられけり。さてくひちらしたる衝重を、御簾の中へさし入て、まかり出にけり。女房、あなきたな、誰にとれとてか、など、申しあはれければ、有職のふるまひ、やんごとなき事なりと、かへすゞ感ぜさせ給ひけるとぞ。

(四十九)老來たりて、はじめて道を行ぜんと待つ事なかれ。古き塚、おほくへ是少年の人なり。ばからざるに病をうけて、たちまちに此世をさらんとする時にこそ、はじめて過ぬるかたの、誤まれる事へ知らるなれ。あやまりといふへ、他の事にあ

速にすべき事は發心修行をいひて無常を待つわざなり

ゆるくすべき事は無益の世のいとなみをいふつかのま束の間にて暫時のあひだをいふ

此世の濁は濁世の人欲をいふ

自他の要事自分の上にても他人の上にても必告ぐべき肝要の事なり

禪林は寺號にて東山永觀堂をいふ十因は彼永觀律師の著はせる往生十因といふ書にて一巻あり

心戒發心集に見えて平宗盛公の子阿波守宗親出家して心戒といへりうづくまりて云々三界六道には心安くおりさしすゑて居るべき所なしとて跪居せるなり

らず。速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべき事をいそぎて、過にし事の悔しきなり。其時悔ゆともかひあらんや。人へたゞ無常の身にせまりぬる事を、心にひしとかけて、つかのまも怠るまじきなり。さらばなどか、此世のにごりもうすく、佛道をつとむる心も、まめやかならざらん。昔あるひじりへ、人の來りて自他の要事をいふ時、答へていはく、今火急の事ありて、朝夕にせまれりとて、耳をふたぎて念佛して、つひに往生をとげけりと、禪林の十因に侍り。心戒といひけるひじりへ、あまりに此世のかりそめなる事を思ひて、靜についゐける事だになく、常へうづくまりてのみぞ有ける。

(五十)應長のころ、伊勢の國より、女の鬼になりたるを、ゐて上りたりといふ事ありて、其頃廿日ばかり、日毎に京白川の人、鬼

應長花園天皇の年號也西園寺北條家にゑたしみありて威勢おはしければ諸家の中にまゴ書出たるなるべし

院の御さじき昔は一條大路に賀茂の祭の物見の爲に御棧敷設けありしなり

はやくもとよりの意也かく諸人の立てみ騒ぐは跡なき虚説にはあらざるべしと兼好の思へる心をいへるなり

此ゑるしを示すは病氣の流行する前兆に顯はれたるなるべしと也此段虚言の流行するを惡みて書けるなり

見にとて出まどふ。昨日へ西園寺に參りたりし、今日へ院へ參るべし、たゞ今へそこ〳〵になどいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、空言といふ人もなし。上下たゞ鬼の事をのみいひやまず。其頃東山より、安居院の邊へまかり侍りしに、四條よりかみざまの人、皆北をさして走る。一條室町に鬼ありと、のゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御さじきのあたり、更にとほりうべうもあらずたちこみたり。はやく跡なき事にへあらざめりとて、人をやりて見するに、大かた逢へるものなし。くるゝまで、かく立騒ぎて、はてへ鬪諍おこりて、あさましき事どもありけり。其頃おしなべて、二三日人のわづらふ事侍りしをぞ、彼鬼の空言へ、此ゑるしを示すなりけりといふ人も侍りし。

龜山殿 嵯峨天皇離宮の龜山の麓に山莊を立て給ひ御隱居あらせられし殿の名なり此殿をかしく作りなし給へる事枕冊に見えたるべし

あし錢を足といふは錢神論に無足而走といふ語より出たるなるべし

宇治の里人云々 宇治は水車の名所にて歌にもよめり

此段萬の事其道の人を用ふべしとの意なり

仁和寺 徳平法皇の御庵室なれば俗に御室ともいへり

石清水自淵元年九月宇佐の宮より男山の峯に遷し奉れるなり

極樂寺は八幡宮護國寺の別當安宗の建立なり

高良上下ありて共に紀氏の祖を祀れりといへどたしかなからず極樂寺高良共に男山の麓にある末社末寺なり

かばかり山上に本社のあるを知らず麓のみを拜みてこればかりと思ひてと也

此段も前段をうけて我意にまかすれば必過ある事をいへり

なごりとて有髮の限の別といひてとの意也

足かなへ 鼎にて三足兩耳のなへなり

かなでいうたひつゝ 舞ふ事にて奏の字をよめり

（五十一）龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くのあしを給ひて、數日にいとなみ出して、かけたりけるに、大かためぐらざりければ、とかく直しけれども、つひにまはらで、いたづらにたてりけり。さて宇治の里人をめして、こしらへさせられければ、やすらかにゆひて參らせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水を汲みいるゝことめでたかりけり。よろづに其道を知れるものゝ、やんごとなきものなり。

（五十二）仁和寺にある法師、年よるまで、石清水拜をがまざりければ、心うくれぼにて、ある時思ひたちて、たゞ一人、かちより參りけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て、歸りにけり。さてかたへの人にあひて、年ごろ思ひつる事、はたし侍りぬ。聞きしにもすぎて、尊とくこそおはしけれ。そも參りたる人どもに、山へのぼりしゝ、何事か有りけん、ゆかしかりしかど、神へ參ることそ本意なれと思ひて、山までゝ見ずとぞいひける。すこしの事にも、先達ゝあらまほしき事なり。

（五十三）是も仁和寺の法師、わらはの法師にならんとするなごりとて、各あそぶ事ありけるに、醉ひて興に入るあまり、かたはらなる足がなへを取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、はなをおしひらめて、顏をさし入れて、舞ひ出でたるに、滿座興に入る事かぎりなし。をばしかなでゝ後、ぬかんとするに、大かたぬかれず。酒宴ことさめて、いかゝゝせんとまどひけり。とかくすれば、首のまはりかけて、血たり、たゞはれにはれみちて、息もつまりければ、打わらんとすれど、たやすくわ

三足なる角の上には鼎を被りたるがその三足の角のやうにたてればかくいへるなり

かゝる事は云々かやうなる事は醫書にも見にず師傳もなければ療治し難しと醫者のいふ詞なり

かけうげは缺穿にてうげゝほれ入りたる意なり此段座興過ぎたる失をかけるにてあまりに洒落すぎたる事を戒めたるなり

れず、ひゞきてたへがたかりければ、叶はですべきやうなくて、三足なる角の上に、かたびらを打かけて、手をひき、杖をつかせて、京なる醫師のがり、ゐて行きけるに、道すがら、人のあやしみ見る事かぎりなし。くすしのもとにさしいりて、むかひゐたりけん有さま、さこそことやうなりけめ。物をいふもくゞもりこゑにひゞきて聞えず。かゝる事ハ、文にも見にず、傳へたるをしへもなしといへば、又仁和寺へ歸りて、ましたしきもの、老たる母など、まくらがみによりゐて、なきかなしめども、きくらんとも覺えず。かゝるほどに、ある者のいふやう、たとへ耳鼻こそきにれうすとも、命ばかりハ、などかいきざらん。たゞ力をたてゝひき給へとて、藁のしべを、まはりにさし入て、かねをへだてゝ、首もちぎるゝばかりひきたるに、耳鼻かけうげながら、ぬけ

御室仁和寺なり

能あるあそび法師藝ありて琴笛琵琶などよく奏する法師を云ふ

破籠破子とも書けり和名抄に割子今俗所云破子是也以餉送人也とあり今の辨當なり

ならびの岡仁和寺近き名所なり

御所御室の御所をいふ

紅葉をたかんは白氏文集に林間煖酒燒紅葉とあるをとりて酒あたゝめてふるまへかしとの意なり

ちるしあらん僧驚騒奇特のある僧となり

印ことぐし〻結ひは印象を仰々し〻結ぶ也いらなくはことの外にの意なり

つゆ〻は一切頓となどいふ意なり

にけり。からき命まうけて、久しくやみゐたりけり。

（五十四）御室に、いみじき兒のありけるを、いかでさそひ出して、あそばんとたくむ法師どもありて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流の破籠やうの物、ねんごろにいとなみ出て、箱風情の物にまたゝめ入れて、ならびの岡の便よき所に、埋みおきて、紅葉ちらしかけなど、思ひよらぬさまにして、御所へ參りて、兒をそゝのかし出にけり。嬉しく思ひて、こゝかしてあそびめぐり、有つる苔の莚になみゐて、いたうこそこうじにたれ、あはれ紅葉をたかん人もがな、ましるしあらん僧だち、いのりこゝろみられよなど、いひじろひて、埋みつる木のもとにむきて、數珠ねしすり、印ことぐし〻くむすびいでなどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つゆ〻物も

あべなきは無興に張合なき意なり此結局上の段とこの段とにかけて見るべし

てまかなるいこまゝくしたるの意なり

やり戸は今横にやり開く戸をいひ部は上下にあぐるをいふ

天井井筒の形をまなびて上にあぐればおか名付けたるなるべし

造作は云々毋屋蔵などは必其用に用ふれば其外の事には用ひ難し何となく作りおく所は折々の用にもたちて面白しと也

見にず。所のたがひたるにか、とて、ほらぬ所もなく、山をあされども、なかりけり。埋みけるを、人の見れきて、御所へ參りたる間に、ぬすめるなりけり。法師ども詞なくて、きゝにくゝいさかひ、腹だちて歸りにけり。あまりに興あらんとする事ハ、必あへなきものなり。

(五十五)家の造りやうハ、夏をむねとすべし。冬ハいかなる所にも住まる。暑き頃わろきすまひハ、堪へがたきことなり。深き水ハ涼しげなし。淺くて流れたる、遙にすゞし。こまかなる物を見るに、やり戸ハ部の間よりもあかし。天井の高きハ、冬さむく燈くらし。造作ハ、用なき所をつくりたる、見るもれもしろく、萬の用にもたちてよしとぞ、人のさだめあひ侍りし。

(五十六)久しくへだゝりて逢ひたる人の、我かたに有つる事、か

久しく云々此段人に逢ひ物語する品を論じ人のたしなみを教へたり

けうありつる事は興ある面白き事の意なりけう一本に今日に作れりさてもよくきこゆべし

ちうがはしは亂がはしの字音の音便なり

其事など云々才學ある人は其人の才學の上につきてよしあしを定め合へるに才なき人は人の上を已が身にかけていふにきゝもわびしとなり

人の語り出たる云々此段ハわが知らざる道の事を語るべからずとの意なり

ずくに、殘りなく語りつゞくるこそあいなけれ。へだてなくなれぬる人も、程經て見るハ、はづかしからぬかハ。つぎざまの人ハ、あからさまに立出ても、けう有つる事とて、息もつぎあへず、語り興ずるぞかし。よき人の物語するハ、人あまたあれど、ひとりにむきていふを、れのづから人もきくにこそあれ。よからぬ人ハ、誰ともなく、あまたの中にうち出て、見る事のやうに語りなせば、皆同じくわらひのゝしる、いとらうがはし。をかしき事をいひても、いたく興ぜぬと、興なき事をいひても、よく笑ふにぞ、品のほどハはかられぬべき。人のみざまのよしあし、ざにある人ハ、その事などさだめあへるに、れのが身にひきかけて、いひ出たるいとわびし。

(五十七)人の語りいでたる歌物語の、歌のわろきこそ、本意なけ

道心あらば云々此段は道心を勸めて道心あらば世を離れて身を閑にせよとの意なり

家にありは俗家に居てとの意なり

生死を出んは六道の生死界を出離する事也

いさましからんは心に進み勇まんやと也

心は緣に引れて云々君に仕ふれば治國忠節に心ひかれ家を顧れば妻子を養ひ生業を營む心のみにて後世の事は傍になりぬべければ閑居ならでは佛道の修行はとげがたしとなり

そのうつは物下根の今の世の人の器量にと也

さばかりならば云々それほど猶衣食をも貪るやうの事ならば何故に世をば捨しぞといふ意なり

紙の衾麻の衣桑門の風をふせぐよすがなり

一鉢のまうけ鉢は佛弟子食を受くる器なり

あかざのあつもの白氏文集に布衾不周体藜羹纔充腹とあり粗末なる食物をいふこれ飢を助くる用意なり

形にはづるは圓頓戒衣の姿に自ら耻かしと思ふべければとなり

さへいへどは彼飢寒の故に世を貪るに似たる事ありといへどもの意なり

ひとへに云々家にあり人に交りて勢ある人のありさまをいふ

菩提は梵語にて道之極者稱曰菩提といへり

大事を云々人間一生の一大事にて前段の生死を出んと思ひ菩提に赴

れ。すこし其道知らん人へ、いみじと思ひてへ語らじ。すべていとも知らぬ道のものがたりまたる、かたはらいたくにくし。

(五十八)道心あらば、住む所にしもよらじ。家にあり、人にまじはるとも、後世を願はんに、かたかるべきかへといふへ、更に後世知らぬ人なり。げにへ此世をはかなみ、かならず生死を出んと思はんに、何の興ありてか、朝夕君につかへ、家をかへりみるいとなみのいさましからん。心へ緣にひかれてうつる物なれば、靜ならでへ、道へ行じがたし。其うつはもの、昔の人に及ばず。山林に入りても、飢をたすけ、嵐をふせぐよすがなくてへ、あられぬわざなれば、れのづから、世をむさぼるに似たる事も、たよりにふれば、などかなからん。さればとて、そむけるかひなし、さばかりならば、なじかへ捨てしなどいはへ、無下の事なり。さすがに一たび道に入りて、世を厭はん人、たとひのぞみありとも、いきほひある人の、貪欲れほきに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、あかざのあつもの、いくばくか人の費をなさん。求むる所へやすく、其心早く足りぬべし。形にはづる所もあれば、さへいへど、惡にへうとく、善には近づく人のみぞおほき。人と生れたらんまるしにへ、いかにもして、世を遁れん事こそ、あらまほしけれ。ひとへに貪ぼる事をつとめて、菩提に赴かざらんへ、よろづの畜類に、かはる所あるまじくや。

(五十九)大事を思ひたゝん人へ、さりがたく心にかゝらん事の本意をとげずして、さながら捨つべきなり。まばし此事はてゝ、同じくへ彼事さたし置きて、まかぐの事、人のあざけりやあ

〜べしと思ひたつ事をいふ

あばし云々これよりさり難き本意をとげて後世を捨んとする人の有様をいへり

行末難なく云々後來人に嘲けられぬやうによく用意してと也

年ごろも云々年來憂世を捨ずしてあれどもあられぬにもあらず且其用意せん間多くの隙もあるまじければとなりえさらぬ事のみはのつびきならぬ事ばかりとなり

此あらましにてぞ云々堀河百首師頼の歌にはかなさを思ひ知らずハなけれどもあらましにのみ日を暮すかな

あばしとやいふ近き火の燒けこんに暫時の間待ちてといふ人のあるべきかは何事をおきてもまづ身を助くるものなりと也

らん、行末難なくあたゝめまうけて、年頃もあればこそあれ、其事またんほどあらじ、物騒がしからぬ様になど思はんにハ、えさらぬ事のみ、いとゞかさなりて、事のつくるかぎりもなく、思ひたつ日もあるべからず。おほやう人を見るに、すこし心あるきはゝ、皆此あらましにてぞ、一期ハ過ぐめる。近き火などに逃る人ハ、あばしとやいふ。身を助けんとすれば、恥をもかへりみず、財をもすてゝ、遁れ去るぞかし。命ハ人をまつ物かは。無常の來る事ハ、水火のせむるよりもすみやかに、遁れがたき物を、其時、老たる親、いとけなき子、君の恩、人の情、すてがたしとて、捨てざらんや。

(六十)眞乘院に、盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。芋がしらといふ物を好みて、多く食ひけり。談義の坐にても、大

無常の來る事ハ云々止觀七に若覺無常過於晝水猛風聚電山海空市無逃避處とあり

眞乘院仁和寺の院下にて御室にあるなり

芋がしら芋魁にて親芋の事なり

文をもは經論聖教をもなり

三万疋銭を疋といふ事は昔銭十文を一疋として十文毎に駒引銭を一つ宛入れたる故とぞ

ともしからずハ經る時なくの意なり

おろうるり諸抄にさまくゝの說あれどいづれも信じがたし唯こは元來なき名をつけてもしあらばこれに似てんと

きなる鉢に、うつだかくもりて、膝もとにれきつゝ、くひながら文をもよみけり。わづらふ事あるにハ、七日二七日など、療治とてこもりぬて、思ふやうに、よき芋頭を撰びて、殊に多くくひて、万の病をいやしけり。人にくはする事なし。たゞ一人のみぞくひける。きはめて貧しかりけるに、師匠死ざまに、錢二百貫と、坊ひとつを讓りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三万疋を、いもがしらのあしと定めて、京なる人に預け置きて、十貫つゞ取よせて、いもがしらを、ともしからずめしけるほどに、又こと用にもちふる事なくて、其あし、皆になりにけり。三百貫の物を、貧しき身にまうけて、かくはからひける、誠に有がたき道心者なりとぞ、人申しける。此僧都、ある法師を見て、おろうるりといふ名を付けたり。とハ何物ぞと、人の

たはぶれいへるなるべしといふ說穩當なるが如し又美濃の人のいへるにうるりとて長捫川などにをる魚ありいと愚なる魚なればそをかの僧の知りおていへるかといへりこもいとよき說といふべし

宗の法燈一宗の棟梁などいふに同じ

とき非時毘羅三昧經に佛爲法慧菩薩說四食時一旦時爲天食二午時爲法食時また僧祇律に午時日影過一瓔一瞬即是非時とあり

德の至れりけるにや此段德だにあれば人も免せるなりもし無德ならば必狂人の例に入るべきを戒めたるなり

問ひければ、さる物を、我も知らず。もしあらましかば、此僧の顏に似てんとぞいひける。此僧都みめよく、力つよく、大食にて、能書、學匠、辯說、人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にも、重く思はれたりけれども、世を輕く思ひたるくせ者にて、よろづ自由にして、大かた人にあたがふといふ事なく、出仕して、饗膳などにつく時も、皆人の前、据ゑ渡すをまたず、わが前にすゑぬれば、やがてひとり打くひて、かへりたければ、ひとりつい立て行きけり。とき非時も、人にひとしく定めてくはず。我くひたき時へ、夜中にも、曉にもくひて、睡たければ、晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふ事きゝいれず。目さめぬれば、幾夜もいねぞ。心をすまして、うそぶきありきなど、世の常ならぬさまなれども、人に厭はれず、よろづゆるされけり。

御產の時云々皇子の御誕生時の事なり是は古き例にはあらねど平家物語に后御產の時甑おとしたる事見えたれば稍早く行はれしわざなるべし

甑和名抄に和名古之岐炊飯器也とあり腰氣に通はして難產のまじなひ也といへり

寶藏の繪古き寶藏に納めおきたる繪卷物なり

宝藏は宇治の寶藏東大寺の御藏などの類にて寶物書籍などを納むる藏也

延政門院御嵯峨天皇の皇女梶子なり

ふたつもじ云々此歌假字遣ひたれど幼き姫君のすさびなればさる事いふべきにあらずいとあはれにをかしうなん

德のいたれりけるにや。

(六十一)御產の時、甑(こしき)をとす事へ、定まれる事にはあらず。御胞衣とゞこほる時のまじなひなり。とゞこほらせ給はねば、この事なし。下ざまより事れこりて、させる本說なし。大原の里のこしきを召すなり。ふるき寶藏の繪に、賤しき人の子うみたる所に、こしきおとしたるをかきたり。

(六十二)延政門院いときなくれはしましける時、院へ參る人に、御ことづてとて、申させたまひける御歌に、

二つもじ牛の角もじすぐなもじ曲(ゆが)みもじとぞ君へ覺ゆる

戀しく思ひ參らせたまふとなり。

(六十三)後七日の阿闍梨、武者をあつむる事、いつとかや、盜人にあひにけるより、宿直人とて、かくことぐしく成にけり。一

後七日の阿闍梨後七日ハ正月八日より七日間真言院にて御修法行はせらるゝにそを務むる僧なり

武者をあつむるハ甲冑を帯したる武者を集めて四門を警固せしむるをいふ

一年の相一年中の吉凶の相なり

車の五緒車の簾の飾也或説に世俗に御所車をいふは五緒車を誤れるにやといへり

きは〻る官位は諸家は殿白清華は一の上を先途〻する類にて羽林名家も是に准ずべし

此頃の冠は云々物毎にみえを飾る事多し冠の高くなりたるも其一なりと也

岡本關白近衛關白家平公なり

此殿鳥柴の故實を云り

鳥つくるすべは花に鳥を付る作法を知らずと也ずべは手立といふに同じ

かゝ乃木竹にあらずはす切に切て其裏をきりそぐをかへし刀といへり

火打羽鳥の羽先に長き羽あり形火打に似たりそれをいふ

枝を肩にかけ云々他家に鳥を進ずる作法を武勝がいふ詞なり

大砌廣庭のかたはらの畔石をいふ

雨覆の毛雉の尾のさきにある箋のやうなる毛をいふ

二棟の御所攝家大臣家などにて棟二つあるやうに造りなせるなり

かなぐる揚きなぐる也

年の相ハ、此修中の有さまにこそ見ゆなれば、兵をもちひん事、れだやかならぬ事なり。

(六十四)車の五緒ハ、かならず人によらず。ほどにつけて、極むるつかさ位にいたりぬれば、乘るものなりとぞ、ある人仰せられし。

(六十五)このごろの冠ハ、昔よりハ、遥に高くなりたるなりとぞ、ある人仰せられし。古代の冠桶をもちたる人ハ、はたをつぎて、今ハ用ふるなり。

(六十六)岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥二双を添へて、此枝につけて參らすべきよし、御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、花に鳥つくるすべ、知りさぶらはず。一枝に二つ付くる事も、存じ候はず、と申しければ、膳部に尋ねられ、人々にとはせ給ひて、又武勝に、さらばれのれが思はんやうに、付けて參らせよと、仰せられたりければ、花もなき梅の枝に、一つを付けて參らせけり。武勝が申し侍りしハ、柴の枝、梅の枝、蕾みたるとにつく。五葉松などにもつく。枝の長さ七尺、あるひハ六尺、かへし刀五分に切り、枝の半に鳥をつく。つくる枝、ふまする枝あり。志じら藤の、割らぬにて、二所付くべし。藤のさきハ、火打羽のたけに、くらべて切て、牛の角のやうにたわむべし。初雪の朝、枝を肩にかけて、中門よりふるまひ參る。大砌(おほみぎり)の石をつたひて、雪に跡をつけず。雨覆の毛を、すこしかなぐりちらして、二棟の御所の、かう欄に寄せかく。祿を出さるれば、肩にかけて、拜して退く。初雪といへども、沓のはなの、隱れぬほどの雪にハ參らず。あまれほひの毛をちらす事

花に鳥つけず云々以下一本になし是は兼好の勘考を書きたるなり
君が爲にと云々我たのむ君が爲にと折る花は時しもわかぬ物にぞ有けるとと伊勢物語に見はて業平梅の作枝に雉をつけて忠仁公に奉りしよしなりされどそれはまことの花ならねば雉をつくる事苦しからぬにやといぶかしみいへるなり
業平平城天皇の御孫阿保親王の五男左近衛中將在原業平元慶四年卒す
實方は一條左大臣師尹の孫侍從定時の子右近中將藤原實方後貶せられて陸奥守となり任所に卒す
御手洗神山より出て片岡の森などを過て流れゆく川也されどこゝに

は、鷹は弱腰をとる事なれば、御鷹の取たるよしなるべしと申しき。花に鳥つけずとは、いかなるゆゑにか有けん。長月ばかりに、梅のつくり枝に、雉をつけて、君がためにとをる花は時しもわかぬといへること、伊勢物語に見えたり。つくり花は、苦しからぬにや。

(六十七)賀茂の岩本橋本は、業平實方なり。人の常にいひまがへ侍れば、一年參りたりしに、老たる宮司の過しを、よびとめて尋ね侍りしに、實方は、御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本や、猶水の近ければと覺え侍る。吉水の和尚、

月をめで花をながめしいにしへの優しき人はこゝに在原と
よみたまひけるは、岩本の社とこそ、うけ玉はりおきはべれ
ど、おのれらよりは、なかなか御存じなどもこそさふらはめ

限らずすべて神前を流るゝ水をいふ
吉水和尚慈鎮なり法性寺關白忠通公の子東山吉水に居す故にいふ吉水は今の丸山なり
今出川院の近衛院は鳥羽山院の后常盤井相國實氏公の孫中宮嬉子近衛の局は大炊御門正二位伊平卿の女にて綾古今より五代の集に歌あまた入たり
筑紫西海九國の惣名也押領使一任四年にて交番する國司にはあらで二郡三郡など代々治めおる者にて地侍などいふ類なり
此段直解に舘は我朋なり敵は病なり二人の兵は二つの大根の功能なりそれをとぼけて不思議にいひなしたるがおもしろきなりとありこも一つの說をざまといふべし

と、いとうやしくくいひたりしこそ、いみじくれぼにしか。今出川院の近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時、つねに百首の歌をよみて、彼二つの社の御前の水にて、かきて手むけられけり。誠にやんごとなきほまれありて、人の口にある歌おほし。作文詩序など、いみじくかく人なり。

(六十八)筑紫に、何がしの押領使などいふやうなるものゝ有けるが、土大根を、よろづにいみじき藥とて、朝ごとに二つづゝ、燒きて食ける事、年久しくなりぬ。ある時舘のうちに、人もなかりける隙をばかりて、敵おそひ來りて、圍み責めけるに、舘のうちに兵二人出きて、命を惜まずたゝかひて、みな追ひかへしてけり。いと不思議にれぼにて、日ごろこゝにものしたまふとも見ぬ人々の、たゞかひしたまふは、いかなる人ぞと問ひ

書寫の上人播磨國書寫山の僧性空一條院の頃の人也元亨釋書に委し
六根淨六根清淨になる事法華經功德品に說けり上人其經意にかなひて六根明なる人なりしとなり
うとからぬ云々豆の煮ゆる音のあかいへる也豆がらハ豆と同根なればなり
おのれらは箕をさしていふしもは助辭なり世說に魏文帝曹令東阿王曹植七步作詩不成者行大法應槃爲詩云煮豆持作羹漉菽以爲汁箕在釜下然豆在釜中泣本自同根生相煎何太急帝深有慙色とあるに似たりもどつきて書るなるべし
元應後醍醐天皇の年號
清涼殿大極殿八省院の十二堂の一にして大守會の時御神樂ある所也
菊亭のおとゝ左大臣兼季公なり
玄上牧馬共に琵琶の名にて希代の寶器なり
きぬかづき節會などに官女ならねど物見る女身の衣を被きてあまたあるをいふ
名を聞くより云々此段一切の事推量ハ必違ひある事をいへり
人も今見る人の中に云々昔物語にある人も今現在生きてをる人の中にて誰に似たりかれの如き人ならんと心に思ひくらべらるゝ事ハ世間の人もさやうの事あるにや又兼好のみさやうに思はるゝにやとなり

ければ、年ごろ賴みて、朝な〳〵めしつる土大根らにさぶらふといひて、失せにけり。深く信をいたしぬれば、かゝる德も有けるにこそ。

(六十九)書寫の上人ハ、法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なりけり。旅の假屋に立入られけるに、豆のからをたきて、豆を煑ける音の、つぶ〳〵となるをきゝ給ひければ、踈からぬれのれらしも、うらめしく我をば煑て、からきめを見する物かなといひけり。焚かるゝ豆がらの、ばら〳〵となる音ハ、わが心よりする事かハ、燒かるゝハ、いかばかり堪へがたけれども、力なき事なり。かくな恨み給ひそとぞ聞にける。

(七十)元應の清暑堂の御遊に、玄上ハうせにし頃、菊亭の大臣、牧馬を彈じ給ひけるに、坐につきて、先柱をさぐられたりければ、一つれちにけり。御ふところに、そくひをもち給ひたるにて、つけられにければ、神供の參るほどに、よく乾て、ことゆゑなかりけり。いかなる意趣か有けん、物見けるきぬかづきの、よりて放ちて、もとのやうに置きたりけるとぞ。

(七十一)名を聞くより、やがて面影ハ、れしはからるゝ心地するを、見る時ハ、又かねて、思ひつるまゝの顏もたる人こそなけれ。昔物語をきゝても、此頃の人の家の、そこほどにてぞ有けんとれぼに、人も、今見る人の中に、思ひよそへらるゝハ、誰もかくおぼゆるにや。又いかなる折ぞ、たゞ今人のいふ事も、目に見ゆる物も、わが心のうちも、かゝる事の、いつぞや有しかとれぼにて、いつとハ思ひいでねども、まさしく有し心地のするハ、われば、かりかく思ふにや。

佛の多きわが願ふ佛一体にて諸佛に通ずべしいたづらに數多きハふくつけげにて賤しとなり。

願文云々願くは二世安樂になど佛菩薩に申す文章をいふ作善は願文に或は佛像を供養し或は經典を書寫する事などを書きつらぬるなり本朝文粹に見ゆたり

塵塚の塵こと所の塵をよく清めて其あるべき所に掃きよせしなれバ多きも見苦しからずとなり

筆にも書きとゞめぬれバ違退之の文に不唯舉之口而亦能之於書とあるによりて書けるにや

かつあらはるゝ片一方よりやがて露顯するとの意なり

（七十二）賤しげなるもの、ゐたるあたりに調度の多き、硯に筆のおほき、持佛堂に佛のおほき、前栽に石草木の多き、家のうちに子孫の多き、人にあひて詞の多き、願文に作善おほく書載せたる。多くて見ぐるしからぬハ、文車の文、塵塚のちり。

（七十三）世に語り傳ふること、誠ハあいなきにや。多くハみな虛言なり。あるにも過て、人ハ物をいひなすに、まして年月すぎ、境もへだゝりぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとゞめぬれば、やがて定まりぬ。道々の物の上手の、いみじき事など、かたくなる人の、其道知らぬハ、そゞろに神の如くにいへども、道知れる人ハ、さらに信もおこさず。音にきくと、見る時とハ、何事もかはるものなり、かつあらはるゝもかへりみず。口にまかせていひちらすハ、やがてうきたる事と

鼻のほとをとめきて鼻のあたりをひくゝ動かし語る事にておろかなるさまをいふ

うちおぼめきあちはにいいはでたしかならぬさまにいふなり

とにもかくにも云々是より前の段々世に僞多き事をとけるを結びてさてはかられざる覺悟すべきよしをいへり

權者高僧智識也佛神などのかりに人間にあらハれたる人をいふ

聞ゆ。又我もまことしからずハ思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどをでめきていふハ、其人の虛言にハあらず。げにくしく、所々うちおぼめき、よく知らぬよしをして、さりながら、つまぐ〳〵あはせて語るそらごとハ、恐ろしき事なり。わがため、面目あるやうにいはれぬるそらごとハ、人いたくあらがはず。皆人の興ずる虛ごとをハ、一人、さもなかりし物をといはんも詮なくて、きゝゐたるほどに、證人にさへなされて、いとゞ定まりぬべし。とにもかくにも、虛言ハほき世なり。たゞ常にある珍らしからぬ事のまゝに、心得たらん、よろづ違ふべからず。下ざまの人の物がたりハ、耳驚く事のみあり。よき人ハ、あやしき事を語らず。かくハいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。是ハ世俗のそらごとを、ね

蟻の如くにあつまりハ交遊に蟻同さあり又柳子厚の文に蟻附蟻合などあるによりてかけり此段利欲をわざとして一生を徒に苦しみ商なる世の樂をも知らず死の來る事を待つ間も知らぬ愚さを戒めいへり

念々の間彼を思ひこれを當む暫時の間もとゞまらで遂に老死に至るとなり

變化の理有ハ無に歸し生ハ死に歸すこれ物の變化なり

んごろに信じたるもをこがましく、よもあらじなどいふも詮なければ、大かたハまことしくあひしらひて、ひと〳〵に信ぜず、又うたがひあざけるべからず。

(七十四)蟻の如くにあつまりて、東西にいそぎ、南北に走る。たかきあり。いやしきあり。老たるあり。若きあり。行く所あり。歸る家あり。夕にいねて、朝におく。いとなむ所何事ぞや。生をむさぼり、利を求めて、やむ時なし。身を養ひて何事をか待つ。期する所、たゞ老と死とにあり。そのきたる事すみやかにして、念々の間にとゞまらず。これをまつ間、何のたのしびかあらん。まどへる者ハ、これを恐れず。名利にまどはれて先途の近き事を顧みねばなり。わろかなる人ハ、又是をかなしぶ。常住ならん事を思ひて、變化の理を知らねばなり。

つれ〴〵わぶる人は云々これ前段の余論にいそがはしき世事を離れ閑寂にあちまはしき事をいへり

よそのきゝに從ひて兼好の歌に世中にあたがふ人の言の葉は思へどいはず思はねどいふとよめりわがいひたき事も人の耳に逆らはんと思へばいはずいはまほしからぬ事も人の樣嫌によりていふとの意なり

誠の道ハ佛道をいふ

生活云々止觀第四に祿務有四一生活二人事三伎能四學問とあり摩訶止觀佛書の名なり陳隋二代の帝に師祖となりし天台大師といひし僧の法華經を釋せし書なり

(七十五)つれ〴〵わぶる人ハ、いかなる心ならん。まぎる〻方なく、唯ひとりあるのみこそよけれ。世に從へば、心、外の塵に奪はれて、まどひやすく、人に交はれば、詞、よそのきゝにまたがひて、さながら心にあらず。人に戲ぶれ、物にあらそひ、一度ハうらみ、一度ハよろこぶ。其事定まれる事なし。分別みだりに起りて、得失やむ時なし。まどひの上に醉へり。醉の中に夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたる事、人皆かくのごとし。いまだ誠の道を知らずとも、緣を離れて、身を閑にし、事にあづからずして、心をやすくせんこそ、しばらく樂しぶともいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸緣をやめよとこそ、摩訶止觀にも侍れ。

(七十六)世のわぼは花やかなるあたりに、なげきもよろこびも

なげきもよろこびもハ死離悲歎のなげき又出世婚禮などのよろこびをいふ

もてあつかひぐさ其時々の世評流行の類をいふ

いろふ取扱ふ事關係あるなどの意なり今にても西國には常にいふ詞なり

わが如く云々我身の上に係る事のやうにねほり葉ほり尋ね聞くとなり

世にことふりたるまで云々今樣の流行語の人ハいひ出してはや腐るほどまで知らでゐる人ハ奥ゆかしと也

今更の人初めてあへる人などなり

ありて、人おほくゆきとぶらふ中に、ひじり法師のまじりて、いひ入れたゝずみたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべき故ありとも、法師ハ、人に疎くてありなん。

(七十七)世の中に、其頃、人のもてあつかひぐさに、いひあへる事、いらふべきにハあらぬ人の、よく案内知りて、人にも語りきかせ、とひきゝたるこそうけられね。殊にかたほとりなる聖法師などぞ、世の人の上ハ、わが如く尋ね聞き、いかで、かばかりハ知りけんとおぼゆるまでぞ、いひちらすめる。

(七十八)今やうの事どもの珍らしきを、いひひろめもてなすこそ、又うけられね。世にことふりたるまで知らぬ人ハ、心にくし。今更の人などのある時、こゝもとにいひつけたることぐさ、物の名など、心得たるどち、かたはらいひかはし、目見あはせ、笑

心知らぬ人前の今更の人などをさしていへり

入たゝぬ深く知らぬ意なり

世にはづかしき都人などの中にさし出て万事心得たる顔するほどの田舍人なれば京耻かしきほどよく其事を知りて奥ゆかしき方もあれどさの意なり

えびすこゝは田舍の武士をさしていへり

おろかなるおのれが道不得手なる我家の道よりも猶我道ならぬわざハ人にあなどらるゝ也

ひなどして、心知らぬ人に、心えず思はする事、よなれず、よからぬ人の、必ある事なり。

(七十九)何事も、入たゝぬさましたるぞよき。よき人ハ、知りたる事とて、さのみ知りがほにやハいふ。片田舍よりさし出たる人こそ、萬の道に、心得たるよしの、さしいらへハすなれ。されば、世にはづかしき方もあれど、みづからも、いみじと思へる氣色、かたくななり。よくわきまへたる道にハ、必くちおもく、とはぬかぎりハ、いはぬこそいみじけれ。

(八十)人ごとに、我身に疎き事をのみぞ好める。法師ハつはものゝ道をたて、えびすハ弓ひくすべ知らず、佛法ぞ知りたるきそくし、連歌し、管絃をたしなみあへり。されどおろかなるおのれが道より、なほ人に思ひあなづられぬべし。法師のみにもあ

上達部殿上人上達部は三位以上の公卿殿上人は五位以上の昇殿をゆるされたるをいふ

禽獸に近き鳥獸は友を害し生物を食ても心にいたむ事なし武士のわざハ互に相害する事それに近しとなり

かたゝなは見苦しき意なり

おはゆるなりは思はるゝものゝそとなり

らず、上達部、殿上人、かみざまなどまで、おしなべて、武を好む人多かり。百たび戰ひて、百たび勝つとも、いまだ武勇の名を定めがたし。其ゆゑハ、運に乘じて敵をくだく時、勇者にあらずといふ人なし。兵盡き矢きはまりて、つひに敵にくだらず、死をやすくして後、はじめて名をあらはすべき道なり。いけらんほどハ、武に誇るべからず。人倫に遠く、禽獸に近きふるまひ、其家にあらずハ、好みて益なき事なり。

(八十一)屏風障子などの、繪も、文字も、かたくなる筆樣してかきたるが見にくきよりも、宿のあるじの、つたなくおぼゆるなり。大方もてる調度にても、心おとりせらるゝ事ハ有ぬべし。さのみよき物を、持つべしとにもあらず。損ぜざらん爲とて、品なく見にくきさまにもなし、珍らしからんとて、用なき事ど

うすもの、表紙卷物などの躾にて作れる表紙なるべし

頓阿兼好同時代にて此頃和歌四天王の隨一也二條爲世卿の門人にて草庵集又井蛙抄など世に聞えたり

はつれハほつれにて糸のほつる、をいふ

螺鈿は卷物の軸に貝をすり入れたるをいふ

弘融とも兼好同時代の歌人にて權少僧都なり貞和三年伊賀國佛姓寺遍昭院に居住せり

内裏造らるゝにも云々後世もさびのひさしといふ所をゝのこしてありけりとそ

もゝそへ、わづらはしく好みなせるをいふなり。ふるめかしきやうにて、いたくこと〴〵しからず、費もなくて、物がらのよきがよきなり。

(八十二)うすものゝ表紙ハ、とく損ずるがわびしきと、人のいひしに、頓阿が、うす物ハかみもゝはつれ、螺鈿の軸ハ、貝落て後こそいみじけれと申し侍りしこそ、心まさりて覺にしか。一部とある草子などの、同じやうにもあらぬを、見にくしといへど、弘融僧都が、物をかならず一具にとゝのへんとするハ、拙なき者のする事なり。不具なるこそよけれといひしも、いみじく覺にしなり。すべて何もみな、事のとゝのほりたるハ、あしき事なり。もゝのこしたるを、さて打おきたるハれもしろく、息のぶるわざなり。内裏造らるゝにも、かならずつくりはてぬ

内外の文佛經を内典といひ儒書百家を外典といふ

竹林院入道は西園寺左大臣公衡公なり

一上左大臣をいふ

洞院左大臣西園寺左大臣公經公の息實雄公也

相國太政大臣の唐名也

亢龍周易乾卦上九亢龍有悔象に亢龍有悔盈不可久也とあり

法顯法は晋陽平陽武陽の人也晋安帝隆安三年に渡天せり三藏は經律論の三を修め得たる人をいふ

漢は天竺より法顯の故郷をいへるなり

此段法師とても無情の木石の如くなるものにあらず情あらまほしとの意なり

所を、殘す事なりと、ある人申し侍りしなり。先賢の作れる内外の文にも、章段の闕けたる事のみこそ侍れ。

(八十三)竹林院入道左大臣殿、太政大臣にあがり給はんに、何のとゞこほりかおはせん。なれども、珍らしげなし、一の上にてやみなんとて、出家し給ひにけり。洞院左大臣殿、此事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。亢龍の悔ありとかいふ事侍るなり。月みちては欠け、物盛にしては衰ふ。よろづの事、さきのつまりたるは、やぶれに近き道なり。

(八十四)法顯三藏の、天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲しび、病にふしては、漢の食を願ひたまひける事をきゝて、さばかりの人の、無下にこそ心弱きけしきを、人の國にて見に給ひけれ、と、人のいひしに、弘融僧都、いうになさけありける三藏かな、

いたりて愚なる人は云々至愚の人の賢人を見てそしりなすをいふ

大きなる利を云々賢人の無欲なるは却て小利を辭して大利を得んが爲なり又身の行を僞り飾りて世に名を得る者なりといひてそしるとなり

おのれが心云々是より衆好の心にて至愚の人を戒むる詞なり

下愚の性云々論語の陽貨篇に上智與下愚不移とあり

といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくゝ覺にしか。

(八十五)人の心すなほならぬば、僞なきにしもあらず。されどおのづから、正直の人、などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見てうらやむは、世の常なり。いたりて愚なる人は、たまくゝ賢なる人を見て、これを憎む。おほきなる利を得んが爲に、少しきの利を受けず。いつはりかざりて、名を立てんとすとぞ知る。おのれが心にたがへるによりて、此あざけりをなすにて知りぬ。此人は、下愚の性うつるべからず。いつはりて小利をも辭すべからず。假にも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて、大路を走らば、則狂人なり。惡人のまねとて、人を殺さば惡人なり。驥をまなぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても、賢をまなばんを、賢といふべし。

惟繼西園寺高兼卿の息にして建武頃の人なり
陳進魚鳥を食はぬいさる事にて其外萬の事をつゝしむ意なり
寺法師寺といふハ三井寺の事なり
四伊伊平大納言の孫にて風雅以下四代集の作者なり
ほうしハ法師に火盛しをかけたるなり
秀句秀逸の詩歌又ハいひかけをいへどこゝは誹諧の洒落言をいへり

一ど土器に三度入五度入といふ事あり一どは一盃といふ事なり一説に一土なるへしと云りよゝとのむ源氏物語なとには沈壁にいへれどこゝは酒のむ喉の音也俗にドク〳〵などいへるが如し

(八十六)惟繼中納言ハ、風月の才に富める人なり。一生精進にて、讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と、仝宿して侍りけるに、文保に、三井寺やかれし時、坊主にあひて、御坊をば、寺法師とこそ申しつれど、寺ハなけれハ、今よりは、ほうしとこそ申さめといはれけり。いみじき秀句なりけり。

(八十七)下部に酒のますること事ハ、心すべきことなり。宇治にすみけるをのこ、京に、具覺房とて、なまめきたる遁世の僧を、こじうとなりければ、常に申しむつびけり。ある時、むかへに馬をつかはしたりければ、はるかなるほどなり、口つきのをのこに、まづ一どせさせよとて、酒をいだしたれば、さしうけく、よゝとのみぬ。太刀うちはきて、かひ〴〵しげなれば、たのもしく覺えて、召具して行くほどに、木幡(こはた)のほとりにて、奈良法

とまり候へ具覺坊にいふ詞とも兵士にいふ詞とも二説あれど兵士にいふといへる方よろしかるべし
うつし心なく現心なき意にてゐひしれて夢中なるよしなり

ひた切俗にいふメツタギリの意なり
山たち山賊をいふ

師の、兵士あまたぐしてあひたるに、此男立むかひて、日暮にたる山中に、あやしきぞ、とまり候へといひて、太刀を引ぬきければ、人もみな、太刀ぬき、矢はげなどしけるを、具覺房手を摺りて、うつし心なく、酔ひたるものに候ふ、まげてゆるし給はらん、といひければ、おの〳〵あざけりて過ぎぬ。此男、具覺房にあひて、御坊ハ、口をしき事し給ひつる物かな、れのれ酔ひたる事侍らず、高名仕らんとするを、ぬける太刀、空しくなし給ひつる事と、怒りて、ひた切にきりれとしつ。さて山だちありとのゝしりければ、里人おこりて出あへば、われこそ山だちよといひて、はしりかゝりつゝ、きりまはりけるを、あまたして、手ほせうちふせて、志ばりけり。馬ハ血つきて、宇治大路の家に走り入たり。あさましくて、男どもあまた走らかした

くちなし原 倔子花の多き所にて木幡山の邊にあり

によひい呻吟にてうめくをいふ

小野道風 參議峰守の孫太宰大貳葛絃の子從四位上木工頭孫平五年に生れ村上帝康保三年卒うける事浮虛の實なき事の意なり

四條大納言 朝白朝忠公の男正二位權大納言公任卿康保三年に生れ長元二年薨すされは公任卿誕生は道風卒去の年なり

猫また 金花猫とて黃なる猫也化けて婦女を犯して煩をなすよし經耳談月令廣義に見えたりこれらいこの近邊の意なり

何阿彌陀佛 盧阿彌陀佛などいふ名と同じく何

れば、具覺坊い、くちなし原にによひ臥したるを、求め出て、舁きもて來つ。からき命生きたれど、腰斬り損ぜられて、かたわになりにけり。

(八十八)ある者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて、もちたりけるを、ある人、御相傳、うける事にい侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを、道風書かん事、時代や違ひ侍らん、れぼつかなくこそといひければ、さ候へばこそ、世にありがたき物にい侍りけれとて、いよ〳〵秘藏しけり。

(八十九)奥山に猫またといふ物ありて、人をくらふなると、人のいひけるに、山ならねども、これらにも、猫のへあがりて、ねこまたになりて、人取る事いあなる物をと、いふもの有けるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺の邊に有けるが

いたしかならねばいへりさてかやうの名は時宗に多くありて陀佛を畧して何あみとよむが口傳なりとぞ後には多く何あみとのみいへり

行願寺 小川の草堂の寺號なり昔は一條の北の小川にありしなり

松ども 松明どもをともしてと也

連歌のかけ物 此頃世にあまねく行はれし事なり我落はせる歌の栞連歌の條に委しくのせたるを見て知りてよ

きゝて、ひとりありかん身い、心すべき事にこそと、思ひける頃しも、ある所にて、夜ふくるまで連歌して、たゞひとり歸りけるに、小河のはたにて、れとにきゝしねこまた、あやまたず足もとへ、ふとよりきて、やかでかきつくまゝに、頸のほどを食はんとす。きも心もうせて、ふせがんとするに力もなく、足もたゝず、小川へころび入りて、たすけよやねこまた、よやく〳〵とさけべば、家々より、松どもともして、はしりよりて見れば、此わたりに見知れる僧なり。こいいかにとて、河の中よりいだきれこしたれば、連歌のかけ物とりて、扇小箱など、ふところに持ちたりけるも、水にいりぬ。希有にしてたすかりたるさまにて、はふ〳〵家に入にけり。かひける犬の、くらけれど、主を知りて、飛つきたりけるとぞ。

大納言法印誰ともわき難し大納言は僧の名也名に官名をつくる事ある古き世に宇多天皇御落飾の時公卿多く髪をそりけるより始れりといへりもと大納言なりしを大納言入道といひ中將なりしを中將入道などいふ類なり

袖かき合せては掛かしばめる体なるべし此段惡人の体をあらはして書けるなり

赤舌日は赤口日の事にて過書大全に赤口日忌會客論事賣買又云主口舌宜爭とあり又清明が簠簋にに委し簠簋は陰陽家の秘書なれは兼好見ざりしなるべし

(九十)大納言法印の召つかひし乙鶴丸、やすら殿といふものを知りて、つねに行通ひしに、ある時出て歸り來たるを、法印、いづくへ行きつるぞ、と問ひしかば、やすら殿のがり、まかりて候といふ。そのやすら殿へ、男か、法師かと、又とはれて、袖かきあはせて、いかゞ候ふらん、頭をば見候はずと、こたへ申しき。などか頭ばかりの見えざりけん。

(九十一)赤舌日といふ事、陰陽道にへ、さたなき事なり。昔の人、是を忌まず。この頃何ものゝいひ出て、忌みはじめけるにか。此日ある事未とほらずといひて、其日いひたりし事未たりし事かなはず。得たりし物へうしなひつ。企たりし事成らずといふ。れろかなり。吉日を撰びてなしたるわざの、未とほらぬを數へて見んも、又ひとしかるべし。其ゆゑへ、無常變易の

たばらくも住するへ暫時もとゞまりある事なしとの意なり

もろ矢一手とて二筋の矢を手挟み持つをいふ

さかひ、有と見るものも存せず。始ある事も終なし。心ざしへとげず。望へたにず。人の心不定なり。物みな幻化なり。何事かたばらくも住する。此理を知らざるなり。吉日に惡をなすに、必凶なり。惡日に善をれてなふに、かならず吉なりといへり。吉凶へ人によりて、日によらず。

(九十二)ある人、弓射る事をならふに、もろ矢をたばさみて、的に向ふ。師のいはく、初心の人、二つの矢をもつ事なかれ、後の矢をたのみて、初の矢に、なほざりの心あり、毎度たゞ得失なく、此一箭に定むべしと思へといふ。わづかに二の矢、師の前にて、一つをれろそかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師是を知る。此いましめ、萬事にわたるべし。道を學する人、夕にへ朝あらん事を思ひ、朝にへ夕あらん事を

一刹那極めて少き時間をいふ名義集に毘曇翻爲一念とありたゞ一念の間を刹那といふ又一念中有九十刹那ともいへり

とらんは我方に引とらんと也

かたへなる者兼好みづからをおかいへるなるべし

牛のぬしハ牛の持ぬし也

思ひて、重ねてねんごろに、修せん事を期せり。いはんや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心ある事を知らんや。なんぞたゞ今の一念にれいて、たゞちにする事の、はなはだ難ぎ。

(九十三)牛をうる者あり。かふ人、明日その値をやりて、牛をとらんといふ。夜のまに牛死ぬ。買はんとする人に利あり。賣らんとする人に損ありと、かたる人あり。是をきゝて、かたへなる者のいはく、牛のぬし、まことに損ありといへども、又大なる利あり。其ゆゑハ、生あるもの、死の近き事を知らざること、牛すでにまさかなり。人又れなじ。はからざるに牛ハ死し、はからざるに主ハ存せり。一日の命、万金よりもれもし。牛のあたひ、鵝毛よりもかろし。萬金を得て、一錢を失はん人、損ありといふべからずといふに、みな人あざけりて、其理ハ、牛のぬし

又いはく是れより又かのかたへなる者の答なり

このたからハ命をいひ他のたからハ金錢などをいへり

此理あるべからずは命は萬金より重しといふ事は牛の主に限らず誰も同じといひながら生を樂しまずして死に臨み恐れば牛の主に限らずといふ理ハ立べからずとなり

生死の相大乘實相の法門にて生死の境を離れたる所なり

常磐井の相國西園寺從一位太政大臣實氏公也北面上北面下北面あり上北面は諸大夫下北面

に限るべからずといふ。又いはく、されば人死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々にたのしまざらんや。愚なる人、此たのしびを忘れて、いたづかはしく、外の樂を求め、此たからをわすれて、あやふく他のたからを貪るにハ、志満つ事なし。生ける間、生をたのしまずして、死に臨んで、死をれそれば、此理有べからず。人みな生を樂しまざるハ、死を恐れざるゆゑなり。死をれそれざるにハあらず。死の近き事を忘るゝなり。もし又、生死の相にあづからずといはば、實の理を得たりといふべしといふに、人いよ〳〵あざける。

(九十四)常磐井の相國、出仕し玉ひけるに、勅書をもちたる北面、逢ひ奉りて、馬よりれりたりけるを、相國、後に北面何がしは、勅書を持ながら、下馬し侍りし者なり、かほどの者、いかで

は五位醍代の侍にて院付の武官なり白河院の時始めて蓋かれたり

か君につかうまつり候ふべきと申されければ、北面をはなたれにけり。勅書を、馬の上ながら、さゝげて見せ奉るべし。れるべからずとぞ。

箱のくりかたの手箱文箱の類の蓋を半間にくりたる處をいふ

軸表紙軸は左表紙は右なり昔の文箱は巻物などのやうに一方に付て緒は一節にて左右の環を引通して一方に一結び結ぶ也

(九十五)箱のくりかたに、緒をつくる事、いづかたにつけ侍るべきぞと、ある有識の人に、たづね申し侍りしかば、軸につけ、表紙につくる事、兩説なれば、いづれも難なし。文のはこへ、おほくへ右につく。手箱にへ、軸につくるも、つねの事なりと仰せられき。

めなもみ本草に地松卽天名精其實也主蠱蛇螫毒接博之とあり俗にいのしり草といふ物也又同書に蒼耳治蝮蛇とある蒼耳なりともいへり

くちばみ蝮蛇にてまむしの事なり

(九十六)めなもみといふ草あり。くちばみにさゝれたる人、かの草をもみて付けぬれば、すなはちいゆとなん。相知りてれぐべし。

(九十七)その物につきて、そのものをつひやしそこのふもの、

小人に賊あり小人は財を貪りて害をかふ故也君子に仁義あり比干紂を諫めて死し夷齊首陽に餓ふたる類なり

僧に法あり智識上人も法の爲に遠島にさすらへ安樂法師の斬られたる類なるへし

一言芳談抜行にありかれこれの辭を一句つゝ書藏せたる物なり雲の詞本書に違ひたるあり兼好空に覺るなるべしゑやせまし云々爲やうか爲まいかと我心に決定し兼ぬる程の事いせぬがよしとなり

糀味瓶俗にいふ糀味噌の瓶をいふ

上薦下薦は上位下位といはんが如し

數を知らずあり。身に虱あり。家にねずみあり。國にぬすびとあり。小人に財あり。君子に仁義あり。僧に法あり。

(九十八)たふとき聖の、いひおきける事を、書きつけて、一言芳談とかや、名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひて覺にし事ども、

一ゑやせまし、せずやあらましと思ふ事へ、おほやうへ、せぬへよきなり。

一後世を思はん者へ、糀味瓶一つも、持まじき事なり。持經本尊に至るまで、よき物をもつ、よしなき事なり。

一遁世者へ、なきに事かけぬやうを、はからひてすぐる、最上のやうにてあるなり。

一上薦へ下薦になり、智者へ愚者になり、德人へ貧になり、能

徳人は富者をいふ徳は得に通じ用ふ

堀河相國岩倉内大臣具實公の一男久我太政大臣基具公なり

美男の樂しき人美麗を樂しくする義にてたのしきは樂しむ意なり今の詞に快活などいふにひとし

過差ハ奢ることをいふ

大理檢非違使別當の唐名なり

廳務を云々檢非違使の政を行ふ所をいふ

唐櫃訴狀文書など入れおく物なるべし

古弊をもて云々古くやぶれたるを以て却て手本とすとの意なり

ある人ハ、無能になるべきなり。

一佛道をねがふといふハ別の事なし。いとまある身になりて、世の事を心にかけぬを、第一の道とす。

此外も、有し事どもおぼえぞ。

(九十九)堀川相國ハ、美男のたのしき人にて、その事となく、過差をこのみたまひけり。御子基俊卿を、大理になして、廳務を行はれけるに、廳屋の唐櫃見ぐるしとて、めでたく造り改められけるに、此唐櫃ハ、上古より傳はりて、其始を知らず、數百年を經たり。累代の公物、古弊をもつて規模とす。たやすく改められがたき由、故實の諸官等申しければ、その事やみにけり。

(百)久我相國ハ、殿上にて水をめしけるに、主殿司、土器を奉りければ、まがりを參らせよとて、まがりしてぞめしける。

久我相國太政大臣源雅實公なり

土器どきと音にて訓べし土を燒たる飲器なるべしかはらけにハあらざるべし

まがり貝にて作りたる器ともゑ也とも扨なりとも又鮑盤にて椀の事ともいへり

内辨諸の節會の時内辨外辨とて閤門の内外を分ちて掌る故にいふ

内記は詔勅宣命を草する事を掌る官なり

宣命は其人を大臣に任ずるよしの宣命なり

尹大納言は源光忠彈正尹にて大納言を兼ねたり六條内大臣有房公の男にて千種中將忠顯卿の父なり

上卿追儺の奉行なり

洞院左大臣太政大臣公守公の男實泰公なり

次第を云々其次第の作法を問はれしなり

(百一)ある人、任大臣の節會の、内辨をつとめられけるに、内記のもちたる宣命をとらずして、堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、立かへり取るべきにもあらず。思ひわづらはれけるに、六位外記康綱、きぬかづきの女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、忍びやかに奉らせけり。いみじかりけり。

(百二)尹大納言光忠入道、追儺の上卿をつとめられけるに、洞院右大臣殿に、次第を申しうけられければ、又五郎男を師とするより外の、才覺候はじとぞ宣ひける。かの又五郎ハ、老たる衛士の、よく公事に馴れたる者にてぞ有ける。近衛殿着陣し給ひける時、ひざつきを恪れて、外記を召されければ、火たきて候ひけるが、先ひざつきを、召さるべくや候らんと、忍びやか

近衛殿誰ともわき難し
ひざつき小半蛭の薄綿を膝突といふ
大覺寺殿後宇多天皇を申す
なぞ〳〵謎の事なり
くすし忠守丹家の後にて正四位下典藥頭にて歌人なり
公明卿正親町三條の庶流大納言實仲卿の息也
我朝のものとも見えぬ唐なり忠守を平氏忠盛に通はせて瓶子にとりなして唐瓶子と解しなり
あれたる宿の云々此段源氏などの筆法をうつして風流幽艶のさまをかけるなり
もてしめづたる云々物ふとやかなるやうすの女房の若き聲してといふ意なり

につぶやきける、いとねたかしかりけり。

(百三)大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞ〳〵をつくりて、とかれける處へ、くすし忠守參りたりけるに、侍從大納言公明卿、我朝のものとも見えぬ忠守かなと、なぞ〳〵にせられけるを、唐瓶子とときて、笑ひあはれければ、腹だちて退り出にけり。

(百四)あれたる宿の人めなきに、女のはゞかる事ある比にて、つれ〴〵とてもりゐたるを、ある人訪らひたまはんとて、夕月夜のおぼつかなきほどに、まのびて尋ねおはしたるに、犬のこと〴〵しく咎むれば、下す女の出て、いづくよりぞといふに、やがて案内せさせて、入り給ひぬ。心ぼそげなる有樣、いかで過すらんと、いと心ぐるし。あやしき板敷に、まばし立ち給へるを、もてまづめたるけはひの、若やかなるして、こなたへといふ人あれば、たてあけ所せげなる遣戸よりぞ、入り給ひぬる。

内のさまは云々外のあれたるにハ似もやうで内の樣子ハをかしう奥ゆかしとの意也
俄にしもあらぬ匂ハ急に焚いたる香のかざにハあらで平生に用意したる薰物の匂となり
門よくさしてよ女房などの下々へいひつゝる詞なり
こよひぞ云々荒たる宿なれば日頃は用心きびしけれども今宵は客の來居れば心安く寢らるべしと女の下部どものさゝやく詞なり
夜深くいそぐべき云々人目なき所なればなりひま白くハ戸の透間の明くなれるをいふ
桂の木の云々此宿れりし人其あたりを通る毎

内のさまは、いたくすさまじからず。心にくゝ、火ハあなたにほのかなれど、物のきらなど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう住みなしたり。門よくさしてよ、雨もぞふる、御車ハ門の下に、御供の人ハそこ〳〵にといへば、今宵ぞ安きいハぬべかめると、うちさゞめくも、忍びたれど、程なければほの聞ゆ。さて此程の事ども、こまやかに聞え給ふに、夜ふかき鷄もなきぬ。こしかた行末かけて、まめやかなる御物語に、此たびハ、鷄も花やかなる聲にうちしきれば、明けはなるゝにやと聞き給へど、夜深くいそぐべき、所のさまにもあらねば、すこしたゆみ給へるに、ひま白くなれば、忘れがたき事などいひて、立出で給ふに、梢も庭もめづらしく、あをみわたりたる、卯

に思ひ出て其宿の桂の木のあるをふりかへり見るとなり

とぞゝ人の上をいふ時に用ふるてにをはなり北の屋かげ云々又前段の体に同し

さやかなれども隈なくゝあらぬ春の月のさま寫し出て巧なりといふべし

長押下の長押にて敷居を高くしたるやうの所なり枕草紙に三尺と二尺ばかりの高さのなげしとあり

かぶし女の打傾ふける形にて傾伏なり

けはひなど云々物語の詞のかすかにきこゆるけぶらひのよく聞かまほしきやうなりとなり

證空上人傳記詳ならず

月ばかりのあけぼの、えんにをかしかりしを、おぼに出て、かつらの木の大きなるが、隱るゝまで、今も見おくり給ふとぞ。

(百五)北のやかげに、消え殘こりたる雪の、いたうこほりたるに、さしよせたる車のながえも、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、くまなくゝあらぬに、人ばなれなる、御堂の廊に、なみ〳〵にゝあらぬと見ゆる男、女と、長押に志りかけて、物がたりするさまこそ、何事にかあらん、つきすまじけれ。かぶしかたちなど、いとよしと見にて、にもいはぬにほひの、さと薫りたるこそをかしけれ。けはひなど、はづれ〳〵、聞えたるもをかし。

(百六)高野の證空上人、京へのぼりけるに、ほそ道にて、馬に乘たる女の、行きあひたりけるが、口引ける男、あしく引きて、聖

四部の弟子四衆ともいひて釋迦の弟子を比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四部に分てるなりさて二百五十戒を持つ僧を比丘といひ五百戒を持つ尼を比丘尼といひ在家にありながら五戒を持つ信士男を優婆夷といふなり

ゝよなのよなゝ歎息の詞なり

非修非學ゝ道をも修めず學問をもせぬをいふ

たふとがりきるいさかひは愛着の念もなく誠に殊勝なるいひあひならんとなり

ものれたるゝしゝさの誤にてざれたるなるべし

の馬を、堀へれとしてけり。聖、いと腹あしくとがめて、こゝ希有の狼籍かな、四部の弟子ゝよな、比丘よりゝ、比丘尼ゝおとり、比丘尼より、優婆塞ゝおとり、うばそくより、優婆夷ゝおとれり。かくの如きのうばいなどの身にて、比丘を、ほりにけいれさする、未曾有の惡行なりといはれければ、口引の男、いかに、仰せらるゝやらん、にこそ聞き知らねといふに、上人なほいきまきて、何といふぞ、非修非學の男ど、あらゝかにいひて、きはまりなき放言しつと、思ひける氣色にて、馬引かへしてにげうせにけり。たふとがりけるいさかひなるべし。

(百七)女の物いひかけたる返事、とりあへず、よきほどにする男は、有がたき物ぞとて、龜山院の御時、志れたる女房ども、若き男たちの參らるゝごとに、時鳥や聞き給へるととひて、心見

堀河内大臣基具公の息具守公也

淨土寺前關白報恩院關白忠教公の息九條攝政師教公又巴心院と號す安喜門院後堀河天皇の女御淨土寺太政大臣公房公の女有子なり

山階左大臣前に洞院左大臣殿とありしと同人實雄公なり

女のなき世なりせば右に記す歴々の人すら女に耻ち給へばまして下々にハ女故に萬事のたしなみもありとの評詞也かゝいひて次にいひおとさんとての抑揚の文法なり

られけるに、なにがしの大納言とかやハ、數ならぬ身ハ、え聞き候はぬ と答へられけり。堀川内大臣殿ハ、いはくらにて、きゝ候ひしやらんと仰せられたりけるを、是ハ難なし。數ならぬ身、むつかしなど定めあはれけり。すべてをのこをば、女に笑はれぬやうに、れほしたつべしとぞ。淨土寺前關白殿は、をさなくて、安喜門院のよく教へ參らさせ給ひける故に、御詞などのよきぞと、人の仰せられたるとかや。山階左大臣殿ハ、あやしの下女の見奉るも、いと耻しく、心づかひせらるゝとこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠も、いかにもあれ、引つくろふ人も侍らじ。かく人に耻らるゝ女、いかばかりいみじき物ぞ と思ふに、女の性ハ、皆ひがめり。人我の相ふかく、貪欲はなはだしく、物の理を知らず。たゞまよひの方に、心

人我の相人ハ人我ハわれと張て思ひて人を輕くし我を重くする心をいへり

心うかるべしつらくいやな事ならんと也

すさまじかりなん女らしくなく腎女ぶりて奥床しき事なかるべしと也

これよく知れるか云々理を知りて惜まざるか又は愚なる故に何とも思はで惜まざるかとの意にて此段世の無益の事をなして解怠ずる人に問ひかけおどろかしたるなり

もはやくうつり、ことばもたくみに、くるしからぬ事をも、問ふ時ハいはず。用意あるかと見れば、又あさましきことまで、とはずがたりにいひ出す。深くたばかりかざれる事ハ、男の智慧にも、まさりたるかと思へば、その事、あとより顯るゝを知らず。すなほならずして、つたなき者ハ女なり。其心に隨ひて、よく思はれんことハ、心うかるべし。されば何かハ、女のはづかしからん。もし賢女あらば、それも物うとく、すさまじかりなん。たゞ迷をあるじとして、かれに從ふ時、やさしくもれもしろくも、れほゆべき事なり。

(百八)寸陰をしむ人なし。これよく知れるか。愚なるか。愚にして怠る人の爲にいはゞ、一錢かろしといへども、是をかさぬれば、貧しき人を、富める人となす。されば商人の、一錢ををしむ

道人は道を修むる人をいふ

謝靈運南史に見えたる宗元嘉頃の人にて文章に巧なる人なり

筆受述語を唐に通事するを翻譯といひそを唐字に書き寫すを筆受といふ

風雲の思名山名水に遊して風雲の景色に詩賦を歌して樂めりしをいふ

心切なり。刹那覺ずといへども、是をはこびてやまざれば、命を終る期、たちまちに至る。されば道人は、とほく日月を惜むべからず。たゞ今の一念、空しく過る事ををしむべし。もし人來りて、我命、明日は必失なはるべしと、告げ知らせたらんに、今日のくるゝ間、何事をか賴み、何事をかいとなまん。我らが生ける今日の日、なんぞ其時節に異ならん。一日のうちに、飲食(おんじき)便利、睡眠、言語(ごんご)、行歩(ぎやうぶ)、やむことを得ずして、多くの時を失なふ。其あまりのいとま、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、むやくの事をいひ、無益の事を思惟して、時をうつすのみならず、日を消し、月をわたりて、一生を送る、尤愚なり。謝靈運は、法華の筆授なりしかども、心常に、風雲の思ひを觀ぜしかば、惠遠(えをん)白蓮(びやくれん)のまじはりをゆるさざりき。しばらくも是なき

惠遠晉の僧也蓮社として西方の淨業の人を集へて社をたてたる人也

白蓮白蓮社として惠遠が院の名なり其院へ佛道熱心の人々を集へて交りしをいふ

やまん人はやみは止觀の意にて世間を止て無爲寂然として一向に諸緣を放下するなり

下臈元來位卑き人の事なれどこゝにては下賤の者をいふ

學人の誡易緊辭に君子安而不忘危存而不忘亡治而不忘亂是以身安國家可保也とあり

時は、死人におなじ。光陰何の爲にか惜むとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まむ人はやみ、修せん人は修せよとなり。

(百九)高名の木のぼりといひしをのこ、人をおきてゝ、高き木にのぼせて、梢をきらせしに、いと危ふく見えし程は、いふ事もなくて、おるゝ時に、軒だけばかりになりて、あやまちすな、心してくだれよと、詞をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛おるゝともおりなん、いかにかくいふぞと申し侍りしかば、其事に候ふ、めくるめき、枝あやふきほどは、れのれがれそれ侍れば申さじ、あやまちは、やすき所になりて、必仕る事に候ふといふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすく思へば、かならず落ると侍

鞠は用明天皇の時唐よりわたせりとぞ

雙六唐にていとふるくよりありと見にたり天曜年中我國に渡りきたれり

勝んとうつべからずは勝んと思ふは我を頼みて敵を侮るなり敵を侮れば自然と油斷あるべし負けじと思へば敵を恐れて油斷せず我手まへを慎しむ故なり

隋書博物志に堯造圍碁以教子丹朱或云舜以子南均惡故作圍碁以教之其法非智不能也とあり

四重五逆四重は五戒の内飲酒を除きて殺生偸盜邪婬妄語をいひ五逆は殺父殺母殺阿羅漢破和合僧出佛身血の五をいふ

明日は遠國へ云々老人病者遁世者等の僧の一生を世事にかゝりて道を修する事を忘る油斷

るやらん。

(百十)雙六の上手といひし人に、其てだてをとひ侍りしかば、勝たんとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手かとく負けぬべきと案じて、其手をつかはゞして、一目なりとも、おそく負くべき手につくべしといふ。道を知れるをしへ、身ををさめ、國をたもたん道も、又まかなり。

(百十一)圍碁雙六好んで、明し暮す人は、四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふと、ある聖の申しゝこと、耳にとゞまりて、いみじくおぼえ侍る。

(百十二)明日は、遠國へおもぶくべしときかん人に、心靜になすべからんわざをば、人いひかけてんや。俄の大事をもいとなみ、切になげく事もある人は、他の事聞き入れず。人の愁喜を

を戒めたるなり

是に同じかるべしは病にまつわられたる人と同じく死期已に目前にありとなり

日暮れ途とほし是諸上智人訣白居易傳に日暮而途遠吾生已蹉跎とあり句會に蹉跎失時也と見えたり

四十にも云々似合ず見苦しき事を過て老人をつよく戒めたり

いかゞはせんよしといふにはあらねど人情なれば此は是非におよばずとの意なり

もとはぞ。問はずとて、などやと、恨む人もなし。されば年もやうくたけ、病にもまつわられ、いはんや世をものがれたらん人、又是に同じかるべし。人間の儀式、いづれの事かさりがたからぬ。世俗のもだし難きに從がひて、是をかならずとせば、ねがひも多く、身もくるしく、心のいとまもなく、一生は、雜事の小節にさへられて、空しく暮れなん。日暮れ道とほし。吾生すでに蹉跎たり。諸緣を放下すべき時なり。信をもまもらじ。禮義をも思はじ。此心をえざらん人は、物狂ともいへ。うつゝなし情なしとも思へ。そしるとも苦しまじ。譽むとも聞いれじ。

(百十三)四十にもあまりぬる人の、色めきたる方、おのづから忍びてあらんは、いかゞはせん。言にうち出て、男女のこと、人の上をも、いひたはぶるゝこそ、にげなく見ぐるしけれ。大か

今出川のおほい殿菊亭兼季公なり

有巣川太秦より法輪へゆく道にある小川なり

齋王丸は牛飼にて爲則は隨身なり

童牛飼い老たる者も頭い童子のやうに結べば童といへるなるべし

太秦殿醍醐左大臣信隆公の男内大臣信清公なり又防門ともいふさてそこに召使はるゝ男にて其召料の牛飼也となり

た聞きにくゝ、見ぐるしき事、老人の若き人にまじはりて、興あらんと物いひゐたる。數ならぬ身にて、世の覺えある人を、隔なきさまにいひたる。貧しき所に、酒宴このみ、客人に饗應せんときらめきたる。

(百十四)今出川のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、有巣川のわたりに、水の流れたる所にて、齋王丸、御牛を追うたりければ、あがきの水、前板まで、さゝとかゝりけるを、爲則、御車のもとに候ひけるが、希有の童かな、かゝる所にて、御牛をば追ふものかといひたりければ、おほい殿、御氣色あしくなりて、おの れ車やらん事、さい王丸にまさりては知らじ、希有の男なりとて、御車に、頭を打あてられにけり。此高名の齋王丸へ、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。此うづまさ殿に侍りける女房の名

女房の名ども云々膝幸狩紐胞腹乙牛岩牛のときをいふ詞にて信清公牛を好み給ふ故に女房の名をも牛によせてもか名つけたるなるへし

宿河原蓮津國なり

ぼろ〳〵暮蹈ともかきて遊僧ともうまひじりともいふ職人歌合に見えたり

九品念佛九品は西方彌陀の淨土の名なれゞ彌陀念佛といふ事也念佛ハ阿彌陀に限らず釋迦念佛藥師念佛等あればかゝいへるなり

道場いづくをも佛事を修する所をいふ

わきざしたち左右侍座の者をいふ諸詞の字にあたれり

みつぎ給よなハ何方をも助太刀し給ふなと也

ども、一人ハひざゝち、一人ハことつち、一人ハはうばら、一人ハおとうしと付けられけり。

(百十五)宿河原といふ所にて、ぼろ〳〵多く集りて、九品の念佛を申しけるに、外より入來るぼろ〳〵の、もし此中に、いろをし坊と申すぼろや、おはしますと尋ねければ、其中より、いろをしこゝに候ふ、かくのたまふハ誰そと答ふれば、志ら梵字と申す者なり、れのれが師、何がしと申す人、東國にて、いろをしと申すぼろに、殺されけりと承りしかバ、其人にあひ奉りて、恨み申さばやと思ひて、尋ね申すなりといふ。いろをし、ゆゝしくも尋ねれはしたり、さる事侍りき、こゝにて對面し奉らば、道場を汚し侍るべし、前の河原へ參りあはん、あなかしこ、わきざしだち、いづかたをも、みつぎ給ふな、あまたの煩にならし

ほろ〳〵といふもの此より雅好の判地さてかくいあれど明恩上人の密藏より出しぼろ〳〵の草紙には虚空坊阿彌陀坊といひし者暮露の始地とありいづれか是ならん

我執わが執着の心なり

死を輕くして云々二人の所爲無慚なる物から蛾を重んし敵を恐れず命を輕くすること潔白なりとなり

さらぬハ其他のといふに同じ

ば、佛事の妨に侍るべしといひ立て、二人河原へ出あひて、心行くばかりに、貫ぬき あひて、ともに死にゝけり。ぼろ〳〵といふもの、昔ハなかりけるにや。近き世に、ぼろんじ、梵字、漢字などいひける者、其初なりけるとかや。世を捨てたるに似て、我執ふかく、佛道をねがふに似て、鬪諍を事とす。放逸無慚の有樣なれども、死を輕くして、少もなづまざる方の、いさぎよく覺えて、人の語りしまゝに、かきつけ侍るなり。

(百十六)寺院の號。さらぬよろづの物にも、名をつくる事、昔の人ハ、すてしも求めず。たゞ有のまゝに、やすく付けけるなり。この頃ハ、深く案じ、さいがくを顯さんとしたるやうに聞ゆる、いとむつかし。人の名も、目なれぬ文字をつかんとする、益なき事なり。何事も、めづらしき事を求め、異說を好むハ、淺才の人

高くやんごとなき人こを友とすれば必諂ふ心出來ればなり

若き人老人のわかき人に交るハ見苦しければなり

病なく身つよき人過食行歩其人にハつきあひがたければなり

發そゝけず此事本草に見えず諺にいひ傳へしなるべしそゝけずハ俗にソゝケルといふに同じくばらつく事なり

膠魚を膠にねるを鰾といふ

御湯殿こゝハ浴室をいふにあらで料理の間などなり

中宮後深草院の中宮東二條院と申す

北山入道常磐井相國實

の、必ある事なりとぞ。

(百十七)友とするにわろき者、七つ有り。一にハ、高くやんごとなき人。二にハ、わかき人。三にハ、病なく身つよき人。四にハ、酒を好む人。五にハ、猛くいさめるつはもの。六にハ、虛言する人。七にハ、欲深き人。よき友三あり。一には、物くるゝ友。二にハ、醫師。三にハ、智慧ある友。

(百十八)鯉のあつもの 喰ひたる日ハ、髮そゝけず となん。膠にも作くるものなれば、ねばりたる物にてそ。鯉ばかりてそ、御前にてもきらるゝ物なれば、やんごとなき魚なれ。鳥にハ雉、左右なきものなり。雉松茸などハ、御湯殿の上に、懸りたるも苦しからず。其外ハ、心憂き事なり。中宮の御方の、御湯殿の上のくろみ棚に、雁の見えつるを、北山入道殿の御覽じて、歸ら

氏公にて中宮の御父也

くろみ柳料理の間の棚の畑に黒くふすぶりたるなり

はかゞしき人たかとしたる故實など知れる人をいふ

せ給ひて、やがて御文にて、かやうの物、さながら其姿にて、御棚にゐて候ひしこと、見ならはず、さまあしき事なり。はかくしき人、さぶらはぬ故にこそなど申されたり。

(百十九)鎌倉の海に、かつをといふ魚ハ、彼さかひにハ、左右なき物にて、此比もてなす物なり。それも、鎌倉の年寄の申し侍りしハ、此魚、おのれら若かりし世までハ、はかばかしき人の前へ、出ること侍らざりき。頭ハ下部もくはず。きりて捨て侍りし物なりと申しき。かやうの物も、世の末になれば、上ざまへも、入りたつわざにこそ侍れ。

(百二十)唐の物ハ、藥の外ハ、なくとも事かくまじ。書どもハ、此國に多くひろまりぬれば、かきも寫してん。もろこし舟の、たやすからぬ道に、無用の物どものみとりつみて、所せく渡し

遠き物を寶とせずとも

云々尚書旅獒に不寶遠物則遠人格また老子に不貴難得之貨使民不爲盜とあり

繫ぎ苦しむるこそ云々

事林廣記に牛糞之以耕馬糞之以厩尤有國有家者之所不可緩也また莊子秋水篇郭象註に人可不服牛乘馬乎服牛乘馬可不穿給之乎牛馬不辭象給者天命之固當也とあり

犬ハ守りふせぐ東坡云畜犬以防盜不可無盜而蓄不吠之犬

走るけだものハ檻にこめ云々居家名用に箱鳥纎獸爲其聲狀悅吾耳目爲我觀樂令被憂愁又何不仁也放之山林使得自在何異脫囚一身自戒一家不殺一家不殺一邦効之とあり

桀紂夏の桀王殷の紂王共に無道の君なり

もてくる、いとれろかなり。遠き物を寶とせずとも、又得がたき寶をたふとまずともと、文にも侍るとかや。

(百二十一)やしなひかふ物にハ、馬、牛、繫ぎ苦しむるこそいたましけれど、なくてハかなはぬ物なれば、いかゞハせん。犬ハ守りふせぐつとめ、人にもまさりたれば、必あるべし。されど、家毎に有る物なれば、こと更に求め飼はずともありなん。其外の鳥獸、すべて用なき物なり。走るけだものハ、檻にこめ、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥ハ翅をきり、籠に入られて、雲を戀ひ、野山を思ふうれへ、止む時なし。其思ひ、我身にあたりて忍びがたくば、心あらん人、これを樂しまんや。生を苦しめて目をよろこばしむるハ、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林に樂しぶを見て、逍遙の友とせしき。捕へ苦しめたるにあらず。凡珍しき禽、

玉子餡晉人王羲之の子常に竹を愛し植ゑて名付て此君といふ詠集章孝標竹詩に院繞瀟湘塢人歩月子猷看処鳥棲烟とあり

凡珍しき畜云々尚書旅獒に珍物奇獣不育于國とあり

六藝周禮の註に禮樂射御書所謂之六藝とあり射ハ弓いる事御ハ馬に乘る藝なり

食ハ人の天なり書經帝範務に夫食爲人天とあるにてかきたる也

細工小刀の細工なるべし是までハ人のさしあたり學ぶべき事ども也

幽玄の道幽微玄妙の道なりとなり

君臣これを重くす詩歌管絃ハ人の心を感ぜしめて善に勸め世の道を

あやしき獸、國にやしなはずとこそ、文にも侍るなれ。

(百廿二)人の才能ハ、文明らかにして、聖の敎を知れるを第一とす。次にハ手かく事、むねとする事ハなくとも、是を習ふべし。學問にたよりあらん爲なり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ、人をたすけ、忠孝のつとめも、醫にあらずハ有るべからず。次に弓射、馬に乘る事、六藝に出せり。かならず是をうかがふべし。文武醫の道、誠に缺けてハ有べからず。是を學ばんをば、いたづらなる人といふべからず。次に、食ハ、人の天なり。よく味を調へ知れる人、大なる德とすべし。次に細工、よろづの要多し。此外の事ども、多能ハ君子の恥る所なり。詩歌にたくみに、糸竹にたへなるハ、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世にハ、これをもちて、世を治むる事、やうやくおろそ

正して國を治むるものなればなり

無益の事云々前段の多能ハ君子の恥る所といふをうけて藝能のみに限らず日用の物の上にも衣食住藥の四の者乏しからずは事足れり其外を求めんは奢ならんとの意をのべたり

四の事儉約ならば云々よく儉約して求め得たらばいかでそを足らずとせんとなり

なるに似たり。金ハすぐれたれども、くろがねの益多きにまかざるが如し。

(百廿三)無益の事をなして、時をうつすを、愚なる人とも、僻事する人ともいふべし。國のため、君のために、止む事を得ずして、なすべき事多し。其餘のいとま、いくばくならず思ふべし。人の身に、やむ事を得ずして いとなむ所、第一に食物、第二に着たる物、第三に居所なり。人間の大事、此三にハ過ぎず。飢ゑず、さむからず、風雨に犯されずして、まづかにすぐすを樂とす。たゞし人皆病あり。病に犯されぬれば、そのうれへ忍びがたし。醫療を恣るべからず。藥を加へて、四の事求め得ざるを貧しとす。此四缺けざるを富めりとす。此四の外を、求め營むを奢とす。四の事、儉約ならば、誰の人かたらずとせん。

是法法師傳記詳ならず新千載後拾遺の作者にて作者部類に念阿の眞弟なりとあり

浄土に耻ぢず浄土一宗の學に耻る事なき也

學匠をたてず學を以て人の師とならざる也

導師ハ釋氏要覽に十住斷結經曰號導師者令衆生類示其正道故稱首經云能爲人說無生死道故名道師とあり

唐の狗導師の面の犬に似たりし故なるべし

さる導師云々兼好の判なり愚昧の人ハかゝる事多く說法の沙汰をすべきに無用なる形の餘議をなせればなり

又人に云々是もかの唐の狗といひたるものゝ其ついでにいひたる事なるべし又一本に此より別段となせるもあり

(百廿四)是法々師ハ、浄土宗に耻ぢずといへども、學匠をたてず。たゞあけくれ念佛して、やすらかに世を過くす有樣、いとあらまほし。

(百廿五)人におくれて、四十九日の佛事に、ある聖を請じ侍りしに、說法いみじくして、皆人涙を流しけり。導師かへりて後、聽聞の人ども、いつよりも特に、今日ハたゞふとく覺え侍りつると、感じあへりし、返事に、ある者のいはく、何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなん上ハと、いひたりしに、哀もさめてをかしかりけり。さる道師のほめやうやハ有るべき。又人に酒すゝむるとて、おのれまづたべて、人に强ひ奉らんとするハ、劍にて、人を斬らんとするに似たる事なり。二方に刃つきたる物なれば、もたぐる時、まづ我頭を斬る故に、人をばこ斬らぬなり。

逢ひてハ相手といふ說あれどわろし

雅房大納言太政大臣源定實公の男後土御門と號す

院後宇多院なるべしたゞ今云々近習の人雅房卿を妬み讒奏する詞なり

おのれまづ醉ひてふしなば、人もよもめさじと申しき。劍にてきりこゝろみたりけるにや。いとをかしかりき。

(百廿六)ばくちのまけ極りて、殘なくうちいれんとせんに逢ひていうつべからず。立かへりて、つゞけて勝つべき時の、到れると知るべし。其時を知るを、よきばくちといふなりと、ある者申しき。

(百卅七)改めて益なき事ハ、改めぬをよしとするなり。

(百廿八)雅房大納言ハ、才かしこく、よき人にて、大將にもなさばやとおぼしける頃、院の近習なる人、たゞ今あざましき事を、見侍りつと申されければ、何事ぞと問はせ給ひけるに、雅房卿、鷹にかはんとて、生たる犬の、足をきり侍りつるを、中垣のあなより、見侍りつと申されけるに、うとましく、にくゝれぼしめ

さばかりいそれほど才かしこくよき人の也
跡なきハあと方もなき虚言なりと也
かゝる事を云々讒言を信じ給ひしいかゞなれどもあさましきふるまひときかせ給ひて嫉み給へる君愚鳥獣に及べるいたふとしと也
いためたゝかはしめハ闘鶏闘狗の類をいふ
畜生殘害ハ鳥獣虫魚の互にそこなひくひあふ事をいふ

顔回顔淵にて孔子の高弟世に亞聖といふ

して、日ごろの御氣色もたがひ、昇進もし給はざりき。さばかりの人、鷹をもたれたりけるハ思はずなれど、犬の足ハ、跡なき事なり。虚言ハ不便なれども、かゝる事を聞かせ給ひて、惡ませ給ひける君の御心ハ、いとたふとき事なり。大かた生ける物を殺し、いためたゝかはしめて、遊びたのしまん人ハ、畜生殘害のたぐひなり。よろづの鳥けだもの、ちひさき虫までも、心をとめて、有様を見るに、子を思ひ、親をなつかしくし、夫婦を伴ひ、ねたみいかり、欲多く、身を愛し、命を惜める事、ひとへに愚痴なる故に、人よりも優りて甚し。彼に苦しみを與へ、命を奪はんこと、いかでかいたましからざらん。すべて一切の有情を見て、慈悲の心なからんハ、人倫にあらず。

(百廿九)顔回ハ、こゝろざし人に勞を施さじとなり。すべて人

人に勞を施さじ論語公冶長に子曰盍各言爾志顔淵曰願無伐善無施勞とあり
いやしき民の云々論語に匹夫不可奪志とあり
おとなしきハ大人しきにて大人の心をいふ

虚妄なれども云々喜怒哀樂苦むなしき妄念也凡世間万の事根本を尋ぬる時ハ苦無なれども其を實有とするが世の中の人の情なりと也

凌雲の額三國史に魏明帝立凌雲觀陳先針榜乃以額盛草蹇蹄轢引上書之去地二十五丈既下藁髮皆然還語子勞直絕此法とあり

を苦しめ、物をまひたぐる事、賤しき民の心ざしをも奪ふべからず。又幼なき子を、賺しおどし、いひ辱しめて、興ずる事あり。おとなしき人ハ、まことならねば、事にもあらずと思へど、幼き心にハ、身にまみて恐しく、耻かしく、浅ましき思ひ、まことに切なるべし。是を惱して興ずる事、慈悲の心にあらず。れとなしき人の、喜び、怒り、哀しび、樂しぶも、皆虚空なれども、誰か實有の相に着せざる。身をやぶるよりも、心を傷ましむるハ、人をそこなふ事、猶甚し。病をうくる事も、多くハ心よりうく。外より來る病ハ少し。藥をのみて汗を求むるにハ、驗なき事あれども、一旦耻ぢ懼るゝ事あれば、かならず汗を流すハ、心のまわざなりといふ事を知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりし例なきにあらず。

物に爭はず云々此段世人に交はる禮儀の心を知りてみづから謙退する事を教へまたハ又學問をして善にはこらず己が一分を恕くすべき本意を顯はせり

晴ましき中云々今もよくある事なり心すべし

人にかたん事を思はゞまことに明言といひつべし

(百三十)物に爭はず、おのれを抂げて人に從ひ、わが身を後にして、人を先にするにハ若かず。よろづのあそびにも、勝負を好む人ハ、勝ちて興あらん爲なり。おのれが藝の、優りたる事をよろこぶ。されば負けて興なくおぼゆべき事、又知られたり。わが負けて、人を喜ばしめんと思はゞ、更にあそびの興なかるべし。人にほいなく思はせて、わが心を慰めんこと、德に背けり。むつまじき中に戲ぶるゝも、人をはかり欺きて、おのれが智のまさりたる事を興とす。是又禮にあらず。されば始めはじめ興宴より起りて、長き怨を結ぶたぐひ多し。是皆爭を好む失なり。人に勝たん事を思はゞ、たゞ學問して、其智を、人に優さらんと思ふべし。道を學ぶとならば、善にほこらず、輩に爭ふべからずといふ事を、知るべき故なり。大なる職をも辭し、利を

貧しき者ハ云々曲禮に貧者不以貨爲禮考者不以筋力爲禮とあり此段世上己が分に過ぎたる事をすれば禍なりと思ふが誤なるよしをいひたり

ゆるさゞらんハ貧者に財を出させ老者に奔走せさするなり

鳥羽殿白河院應德三年に建給へる仙洞御所也元良親王陽成院の皇子元日奏賀元朝辰の時天皇大極殿に行幸し群臣門に入て再拜す此時奏賀舞瑞とて二人の者庭上に立並びて祝ひ申す也是ハ去年國々より奏せし吉祥どもを舞樂めて今日奏し申すなり李部王記式部卿重明親王の記錄なり

も捨るハ、只學問の力なり。

(百三十一)貧しき者ハ、財を持ちて禮とし、老たる者ハ、力をもつて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時ハ、速に止むを、智といふべし。ゆるさゞらんハ、人のあやまりなり。分を知らずして、强てはげむハ、已があやまりなり。貧しくて、分を知らざれば盜み、力衰へて、分を知らざれば、病を受く。

(百三十二)鳥羽のつくり道ハ、鳥羽殿建てられて後の號にハあらず。昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲ハ、甚殊勝にして、大極殿より、鳥羽のつくり道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。

(百三十三)夜のねとゞハ、東御枕なり。大かた東を枕として、陽氣をうくべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿のまつらひ、或ハ

白河院は北首に云々院佛法を信仰し給ひしかば釋迦涅槃の姿にならひ給ひて北首に御寢なりしなるべしされど忌む事なりとなり

三昧僧ハ法華三昧を行ふ僧にて法華經のみを讀誦して他念なく勤むるをいふ
律師僧官にて五位に准ずるなり

我を知らずして云々我定木直からずしてハ他の物の曲直ハはかり難しとの意なり

南枕常の事なり。白川院ハ、北首に御寢なりけり。北ハ忌むことなり。又伊勢ハ南なり。大神宮の御方を、御跡にせさせ給ふ事、いかゞと人申しけり。但太神宮の遥拜ハ、巽に向はせ給ふ。南にハあらず。

(百卅四)高倉院の、法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふ者、ある時鏡を取りて、かほをつくゞと見て、我かたちの、みにくゝあさましき事を、あまりに心うく覺にて、鏡さへうとましき心地しければ、其後長く鏡をおそれて、手にだにとらず。更に人に交る事なし。御堂のつとめばかりにあひて、こもり居たりと聞き侍しとそ、ありがたく覺にしか。かしこげなる人も、人の上をのみはかりて、おのれをば知らざるなり。我を知らずして、外を知るといふことわり有るべからず。さればおのれを知るを、物知れる人といふべし。貌みにくけれども知らず。心の愚なるをも知らず。藝の拙きをも知らず。身の數ならぬをも知らず。年の老ぬるをも知らず。病の冒すをも知らず。死の近き事をも知らず。おこなふ道の至らざるをも知らず。身の上の非を知らねば、まして外の毀を知らず。たゞし貌ハ鏡に見ゆ。年ハ數へて知る。わが身の事知らぬにハあらねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりとぞいはまし。貌をあらため、齡を若くせよとにハあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老ぬと知らば、何ぞ閑に身を安くせざる。行愚なりと知らば、なんぞこれを思ふ事、是にあらざる。すべて人に愛樂せられずして、衆に交るハ耻なり。かたちみにくゝ、心おくれにして出て仕へ、無智にして大才にまじはり、不堪の藝をもちて、

たゞし貌は云々以下身の上の非を知らざいかでか律師の如く退ざるとの意を自問自答にて述べたり

これを思ふこと云々尚書大禹謨に念茲在茲とある詞を用ひたり愛樂は世人に愛し好まる、意なり

雪の頭老て白髪なるをいふ

資季大納言入道中將資家の息正二位楊梅と號す入道して念心と云り
具氏宰相中將三位中將通氏の息從三位中院と號す
わぬし吾主といふ意にて親しむ詞なり
さらば云々資季の詞也
はかゞしき云々具氏の詞なり
そゞろごとゞつまらぬ事の意なり

堪能の座に列なり、雪の頭を戴きて、さかりなる人にならび、いはんや及ばざる事を望み、かなはぬ事をうれへ、來らざる事を待ち、人におそれ、人に媚ぶるハ、人の與ふる耻にあらず。むさぼる心にひかれて、みづから身を辱かしむるなり。むさぼる事のやまざるハ、命を終ふる大事、今こゝに來れりと、たしかに知らざればなり。

(百卅五)資季大納言入道とかや聞けける人、具氏宰相中將にあひて、わぬしの問はれんほどの事、何事なりとも、答へ申さゞらんやといはれければ、具氏、いかゞ侍らんと申されけるを、さらばあらがひ給へといはれて、はかばかしき事ハ、かたはしもまねび知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそゞろ事の中に、れぼつかなき事をこそ、問ひ奉らめと申されけり。

まして云々又資季の詞なり
こゝもとハ日本をさしていへり
あらがひあらそひといふに同じ

馬のきつりやう云々古來よりいひ來りたる世話語なるべし語意は知りがたし或說に遠國などにて馬の煩ひたる時の禁厭にいふ詞なりといへどいかゞあらん

所課貧けわざの振舞にて前にいひ契りたる供御なり
故法皇花園院なり

まして〻もとの淺き事ハ、何事なりとも、明らめ申さんといはれければ、近習の人々、女房なども、興あるあらがひなり。同じくハ、御前にて爭はるべし。負けたらん人ハ、供御を設けらるべしと定めて、御前にて召し合せられたりけるに、具氏、幼くより聞きならひ侍れど、その心知らぬ事侍り。馬のきつりやうきつにのをかなかくぼれいりくれんとう、と申す事ハ、いかなる心にか侍らん、うけたまはらんと申されけるに、大納言入道はたとつまりて、是ハそゞろごとなれば、いふにもたらずといはれけるを、もとより深き道ハ知り侍らず、そゞろ事を尋ね奉らんと、定め申しつと申されけれゞ、大納言入道負けになりて、所課いかめしくせられたりとぞ。

(百卅六)くすしあつまげ、故法皇の御前にさぶらひて、供御の

功能食性をいふ

六條故内府從一位内大臣有房公にて和漢の才人能書なり

土偏に候ふ盛とかくハ俗字にて正字は盛なりきよみとよみと訓むなりこゝは一座大に笑ひとよみたるなり

花は盛に云々此段の大意情をもとゝしてよろづ閑に覩ずる所を飽とかけり文章の奇態きはまりなく古來稱英の段なり六家集の中家隆世中を思ひつゞけて見る時ハちるこそ花の盛なりけれ西行中々に時々

まゐりけるに、今まゐり侍る供御のいろ〳〵を、文字も功能もたづね下されて、そらに申し侍らば、本草に御覽じ合せられ侍れかし、一つも申しあやまり侍らじと、申しける時しも、六條故内府まゐり給ひて、有房、ついでに物ならひ侍らんとて、まづ志ほといふ文字ハ、いづれの偏にか侍らんと、問はれたりける に、土偏に候ふと申したりければ、才のほど既に顯れたり、今ハさばかりにて候へ、ゆかしき所なしと申されけるに、とよみになりて、退り出でにけり。

(百卅七)花ハ盛に、月ハ隈なきをのみ、見る物かは。雨に對ひて月を戀ひ、たれこめて、春の行方知らぬも、猶あはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ、見所ほかれ。歌の詞書にも、花見にまかれりけるに、はやく散り過にければ

雲のかゝるこそ月をもてなすけしきなりけれなどある意なるべし

雨に對ひて云々閑詠に對雨懷月序あり古今集に藤原因香朝臣たれこめて春の行方も知らぬまに待し櫻もうつろひにけりとあり

かたくなゝる人ハ頑固なる人の意なり

遠き雲井を云々遠境に隔たりたる中をいふ

淺茅が宿淺茅の生ひて荒れたる宿をいふ

千里の外まで云々古詩に三五夜中新月色二千里外故人心また唐李嬌百詠三五二八夜千里與君同などあり

いと心深うこれにて句を切るべし下の又なく哀なりといふ詞をこめたるなり

濡れたるやうなる葉のつやありて映るさまをいふなり

ども、さはる事ありてまからでなども書けるハ、花を見てといへるに、劣れる事かハ。花のちり、月の傾くを慕ふならひハさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、此枝かの枝散にけり、今ハ見所なしなどいふめる。萬の事も、始終こそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢見るをばいふ物かハ。逢はでやみにしうさを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとり明し、遠き雲井を思ひやり、淺茅が宿に昔を忍ぶこそ、色好むといはめ。望月の隈なきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて、待ち出たるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、打志ぐれたるむら雲がくれのほど、又なく哀なり。椎柴白樫などの、濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都戀ひし

さのみ目にて見る物かは莊子駢拇篇に吾所謂聰者非謂其聞彼也自聞而已矣吾所謂明者非謂其見彼也自見而已矣また遵生八牋に水樂洞雨後崎泉我蓮豈無耳哉更不以耳聽以心聽などあり此節月花を合せ論じて目にて見んよりも心に觀ずるが面白き事をいへり

思へるこそ花やさくらん月や出らんと思ひやるがをかしとの意なり

色濃くといふ俗にいふシッコクといふ意なり

あからめもせずわき目もふらず見つめゐる也

泉にハ云々李白山殺風景花上照觀淸泉濯足とあり

觀事いとおそし通る物の甚おそしとなり

人を置きたれば見物わたらぐ告よとてなり

うおぼゆれ。すべて月花をば、さのみ目にて見る物かハ。春ハ家を立さらでも、月の夜ハ、閨のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。よき人ハ、ひとへに好けるさまにも見ゆず。興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色濃く、よろづハもて興ずれ。花のもとにハ、ねぢより立より、あからめもせずまもりて、酒飲み連歌して、はてハ大きなる枝、心なく折り採りぬ。泉にハ、手足さしひたして、雪にハ、おりたちて跡つけなど、萬の物、よそながら見る事なし。さやうの人の、祭見しさま、いと珍らかなりき。觀事いと遲し、其程ハ桟敷不用なりとて、奥なる屋にて、酒飲み物喰ひ、圍碁双六などあそびて、桟敷にハ人を置きたれば、渡りさぶらふといふ時に、おの〳〵肝潰るゝやうに、爭ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで、簾はりいでゝ、おしあひつゝ、一事も見もらさじとまもりて、とありかゝりと、物ごとにいひて、渡り過ぎぬれば、又渡らんまでといひておりぬ。唯物をのみ、見んとするなるべし。都の人のゆゑしげなるハ、唾りていとも見ず。若くするぐなるハ、宮づかへにたちぬ、人のうしろにさぶらふハ、さまあしくもおよびかゝらず。わりなく見んとする人もなし。何となく、葵かけわたして、なまめかしきに、明はなれぬ程、忍びて寄する車どものゆかしきを、それかかれかなど思ひよすれば、牛かひ下部などの、見知れるもあり。をかしくもきらくしくも、さまぐに行かふ見るも、つれぐならず。暮るゝほどにハ、たてならべつる車ども、所なく並み居つる人も、いづ方へ行きつらん、程なく稀になりて、車どもの、らうがはしさもすみぬれば、簾・疊もとり拂ひ、目の前に、寂しげに

簾はりいでゝハ桟敷にかけたる簾を爭ひ見んとておよび出てつき張るなり

とありかゝりとハかやうにありきこのやうにありきとわたりし物を批判するなり

又渡らんまでと祭の見物の一はなゝわたるを又他の見物わたらんまでハ奥の屋にて桟敷より下るゝなり

ゆゑしげなるこゝにてハほめたる詞にて俗に云エラサウナルの意也

さまあしくも云々下人女房など見樣わろく前の人におしかゝりおよび出て無理に見んともせず後なるハ後ながら靜に物見るさ也

葵かけわたしハ賀茂祭に葵を人もかざし車などにもかくるなりさてそれかこれか其人の來るにかかの人にかなど思ふなり

簾巻も云々掃敷の道具なり

世のためし世の盛衰人の榮落無常の理などをいふなるべし

大路見たるこそ云々たゞ大路のさまを見たるが即祭を見たるといふものよとて物を磁ずるといふ事をいはん便におきたりこれ決前生後の詞なり

こゝら幾許とも字をあてゝ多くの意なり

大きなる器物に云々後漢書王符傳に山林不能給野火江海不能實溝巨とあり

鳥部野前に註せり舟岡山城にある地名にて弾送の所なり

棺をひさぐ云々淮南子に甕棺者欲民之疾病註云甕棺也和名抄に棺和名比止岐所以盛屍也とあり棺を作る者作りてうちおく間もなく疫れ

なり行くこそ、世のためしも、思ひ知られて哀なれ。大路見たるこそ、祭見たるにてハあれ。かの棧敷の前を、こゝら行きかふ人の、見知れるがあまた有るにて知りぬ。世の人數も、さのみハ多からぬにこそ。此人皆失せなん後、我身死ぬべきに定りたりとも、程なく待ちつけぬべし。大きなる器物に、水を入れて、細きあなをあけたらんに、滴る事少なしといふとも、怠るまなく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日ハ有るべからず。一日に一人二人のみならんや。鳥部野、舟岡、あらぬ野山にも、送る數多かる日ハあれど、おくらぬ日ハなし。されば棺をひさぐ者、造りてうちれくほどなし。若きにもよらず。強きにもよらず。思ひかけぬハ死期なり。今日までのがれ來にけるハ、あり難きふしぎなり。志ばし世をのどかに思ひなんや。まゝ子

ゆくゝとなり人の死ぬ事多きをいふ

まゝ子だて黒白の石を雜へならべて數へて十にあたる石を次々除くゝ遊戯なり

逝れざるに似たりまゝ子だての石のつひにめぐり來て取らるゝ如く世人のおくれさきだちて死を逝れずと也

これをよそにきくゝハ彼軍兵の軍に出て死に近く危ふきありさまを外事と思ふハはかなしとの意なり

閑なる山の奥云々世を逝れ山にあらば其戰場の騒がしく敵兵のよする事こそハなけれ無常の敵は閑なる山中にも來らぬ事ハなければ後世の資忘るべからずとなり

周防内侍周防守平棟仲の女にて後冷泉院の女房なり

だてといふ物を、双六の石にてつくりて、たてならべたるほどハ、とられん事、いづれの石とも知らねども、數へあてゝ、一つを取りぬれば、其外ハ遁れぬと見れど、また〳〵數ふれば、かれこれ間ぬき行く程に、いづれも遁れざるに似たり。兵のいくさに出るハ、死に近きことを知りて、家をも恪れ、身をも恪る。世に背ける草の庵にハ、閑に水石をもてあそびて、これをよそにきくと思へるハ、いとはかなし。閑なる山の奥、無常の敵、きほひ來らざらんや。その死に臨める事、軍の陣に進めるにおなじ。

(百卅八)祭過ぎぬれば、後の葵ふようなりとて、ある人の、み簾なるを、皆取らせられ侍りしが、色もなく覺え侍りしを、よき人のもとへ給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防内侍が、かくれどもかひなき物ハ諸共にみすの葵のかればなりけり。

かくれども云々諸共に見ばこそかひもあらめ思ふ人とも見ねばみすの奚の枯葉もかひなしと也みすに見ずをかけてよめり

母屋おもやにて本屋をいふなり

古き歌の詞書に新古今にはやう物申しける女に枯れたる葵をみあれの日遣しける賀方云々此外にかゝる類多したてならべつる物見の車どもなり

鴨長明ハ後鳥羽院の時和歌所の寄人となり後出家して蓮胤といふ四季物語無名抄方丈記道の記海道記などの作者なり

おのれと枯るゝ云々自然と枯るゝさへ惜しき物をとの意なり

菊にとりかへらるゝ枕草紙に節ハといふ段に

とよめるも、母屋のみすに、葵のかゝりたる枯葉をよめるよし、家の集にかけり。古き歌の詞書に、枯れたる葵にさして、つかはしけるとも侍り。枕草紙にも、來し方戀しき物、枯れたる葵とかけるこそ、いみじくなつかしう思ひよりたれ。鴨長明が四季物語にも、玉だれに後の葵ハとまりけりとぞかける。れのれと枯るゝだにこそあるを、浪殘なく、いかゞ取り捨つべき。御帳にかゝれる藥玉も、九月九日、菊に取かへらるゝといへば、さうぶハ、菊のをりまでも有るべきにこそ。枇杷皇太后かくれ給ひてのち、ふるき御帳のうちに、さうぶ藥玉などの、枯れたるが侍りけるを見て、をりならぬねを猶ぞかけつると、辨のめのとのいへるかへりごとに、あやめの草ハありながらども、江の侍從がよみしぞかし。

悉しく見えたり

枇杷皇太后宮三條天皇の皇后御堂關白の女也をりならぬねを云々千載集哀傷にあやめ草涙の玉にぬきかへて折ならぬねを猶ぞかけつる。かへし、玉ぬきし菖蒲の草ハありながらよどのハあれん物とやハ見しとあり

辨のめのと前加賀守顯時の女陽明門院の御乳母なり

江侍從大江匡房の女にて母ハ赤染衛門なり

左近の櫻拾芥抄に南殿前庭櫻樹者本是梅也桓武天皇遷都之日所被植也而及永和年中枯失仍仁明天皇被改樹也とあり

おぼえおとりハ勢劣る意なり

京極入道中納言藤原定

(百卅九)家にありたき木ハ、松、櫻、松ハ五葉もよし。花ハ一重なるよし。八重櫻ハ、奈良の都にのみ有りけるを、此頃ぞ、世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆一重にてこそあれ。八重櫻ハ、ことやうの物なり。いとこちたくねぢけたり。植ゑずともありなん。遲櫻またすさまじ。虫のつきたるもむつかし。梅ハ、白き、薄紅梅、一重なるが、疾く咲きたるも、重りたる紅梅の、匂めでたきも皆をかし。遲き梅ハ、櫻に咲きあひて、れぼえおとりけれされて、枝に萎みつきたる心うし。一重なるが、まづ咲きてちりたるハ、心とくをかしとて、京極入道中納言ハ、猶一重梅をなん、軒近く植ゑられたりける。京極の家の南向に、今も二本侍るめり。柳又をかし。卯月ばかりの若楓、すべて萬の花紅葉にもまさりて、めでたき物なり。橘、桂、いづれも木ハ

家貞永元年出家して法名明静といへり
きちかうハ桔梗なり
ゐをにハ紫苑なり
われもかうハ木香なり
りんだうハ龍膽なり

身死して云々前漢書に韋賢及子玄成俱以明經至相諺曰遺子黄金滿籯不如教子一經とあり古の人賢なる者ハ宮めるもの少く家に儲石のたくはへなきを美談とすよき物は云々よき道具にハ執着もやしたりけんとなり

我こそえめ後の人の財を爭ふさまなり

物ふり大きなるよし。草ハ、山吹、藤、燕子花、瞿麥、池にハ蓮、秋の草ハ、萩、薄、きちかう、萩、女郎花、藤袴、ゐをに、われもかう、苅萱、りんだう、菊、黄菊も、蔦、葛、朝顔、いづれもいとたかゝらずさゞやかなるが、垣にゐげからぬよし。此外の、世に稀なる物、唐めきたる名の聞にくゝ、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。大かた何も、珍らしくありがたきものハ、よからぬ人のもて興ずる物なり。さやうの物なくてありなん。

(百四十)身死して財殘る事ハ、智者のせざるところなり。よからぬ物、貯へれきたるつたなく、よき物ハ心をとめけんとはかなし。こちたく多かる、ましてくちをし。我こそ得めなどいふ者どもありて、あとに爭ひたるさまあし。後ハ誰にと、こゝろざす物あらば、生けらんうちにぞ讓るべき。朝夕なくてかなは

後ハ誰にと云々死後ハ此物ハ誰に遣ちんと思ふものあらば生前に分けつかはすべしと也
悲田院延喜京職式に凡京中路邊病者孤子仰九箇條令其所見所遇醫使必令拾送施藥院及東西悲田院とあり
堯蓮上人傳記詳ならず三浦のなにがし伊豆國の侍なりしなるべし
ことうけハ言承にて返辭よく挨拶する也

けやけくハツキリとさはだつ意にてこゝは斷然などいはんが如し
乏しくハ貧乏なり

はじめより云々なるまじき事は最初より斷然否といひきると也
賑ひゆたかなればハ富み盛なるなり此頃朝庭

ざらん物こそあらめ。其外ハ、何も持たでぞあらまほしき。

(百四十一)悲田院堯蓮上人ハ、俗姓ハ三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。古郷の人の來りて物語すとて、あづまの人こそ、いひつることハたのまるれ、都の人ハ、ことうけのみよくて、實なしといひしを、聖、それハさこそ思すらめども、れのれハ、都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとハ思ひ侍らず、なべて心やはらかに、情あるゆゑに、人のいふほどの事、けやけく辭びがたくて、萬に言ひはなたず。心弱くこうけしつ、僞りせんとハ思ハねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、れのづから本意とほらぬ事多かるべし、あづま人ハ、我方なれど、げにハ心の色なく、情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、はじめより、否といひてやみぬ、賑ひゆたかな

ハ年々におとろへ武家は盛なりし頃なれどなり

聲打ゆがみハなまりてたみたる聲をいふ

聖教佛道の經論をいふ

多かる中にハ法師は世に多くある中に悲田院の住持とせるなりと也

あらえびす東國のむくつけき武士などをいへるなるべし

かたへの人傍輩をいふ

子故にこそ云々人の親の心ハやみにあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかなといふ歌もあり

恩愛の道子を思ふうつくしむ心をいふ

か、るものハあらねばすをさしていへり

子を持てこそ云々最明寺殿の歌に子を思ふ親ほど親を思ひなば世にありがたき人といはれん古語に養子方知父母恩ともあり

れば、人にハ頼るゝぞかしと、ことわられ侍りしこそ、この聖、聲うちゆがみ、あらく〳〵しくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやと思ひしに、此一ことばの後、心にくゝなりて、れほかる中に、寺をも住持せらるゝハ、かくやはらぎたるところありて、その益もあるにこそと、れぼえ侍りしか。

(百四十二)心なしと見ゆるものも、よき一言ハいふものなり。あるあらえびすの恐ろしげなるが、かたへの人にあひて、御子ハれはすやと問ひしに、一人も持ち侍らずと答へしかば、さてハ、物の哀ハ知り給はじ。情なき御心にぞ、物し給ふらんと、いとれそろし。子故にこそ、よろづの哀ハ思ひ知らるれといひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでハ、かゝるものゝ心に、慈悲ありなんや。孝養の心なきものも、子もちてこそ、親

するすみハ四夫にて無一物の獨身なるを云白氏文集に匹如身後有何事祇向人間無所求とあり

かなしからん親云々愛しうつくしみ思ふ親妻子のためにハとなり

耻をも忘れ云々前漢書に飢寒至身不顧厥耻とあり

人恒の產なき時ハ云々孟子梁惠王上篇に無恒產而有恒心者惟士爲能若民則無恒產因無恒心苟無恒心放辟邪侈無不爲已及陷於罪然後從而刑之是罔民也焉有仁人在位罔民而可爲也註に恒常也產生業也恒產可常生業也恒心人所常有之善心也とあり

人窮りてぬすみす孔氏家語に飢寒則攫鳥窮則盜人窮則詐とあり

衣食世の常なる上に云々これ奢を戒むる詞に

のこゝろざしハ、思ひ知るなれ。世を捨てたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだしおほかる人の、萬にへつらひ、望深きを見て、無下に思ひくたすハ、ひがことなり。其人の心になりて思へば、まことにかなしからん親のため、妻子のためにハ、耻をも忘れ、盜もまつべき事なり。されば盜人をいましめ、ひがことをのみ罪せんよりハ、世の人の、飢ゑず、寒からぬやうに、世をゞ行はまほしきなり。人恒の產なき時ハ、恒の心なし。人窮りてぬすみす。世治らずして、凍餒の苦あらば、科の者絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはん事、不便のわざなり。さていかゞして、人を惠むべきとならば、上の奢り費す所をやめ、民を捨て、農を勸めば、下に利あらん事、うたがひあるべからず。衣食世の常なる上に、ひがことせ

て上下に通じていへるなるべし。

人の終焉臨終の事なり

あやしく異なる相云々奇特の瑞相ありしなどかたりつくるなり

いひし詞も云々其死にたる人の詞も行跡も也此大事臨終の時をいふ

權化の人佛菩薩などの衆生濟度の爲に權に此界に生れ來るをいふ

定むべからず測るべからずいわきより見ていわき博士の臨終も測り定めがたし唯其死ぬる人の心次第なるべしとの意なり

栂尾上人釋高辯明恵上人と稱す傳い元亨釋書に詳なり

あしく馬の爪を洗ふ時足をあげよといふ詞なり

宿執開發云々前生にて修めたる功德の開發して今阿字を唱ふるよと

ん人をぞ、まことの盗人といいふべき。

(百四十三)人の終焉の有さまの、いみじかりし事など、人のかたるを聞くに、唯まづかにして亂れずといはゞ、心にくかるべきを、おろかなる人い、あやしく異なる相を語りつけ、いひし詞もふるまひも、おのれが好む方に譽めなすこそ、其人の、日頃の本意にもあらずやと覺ゆれ。此大事い、權化の人も定むべからぞ。博學の士も測るべからぞ。おのれ違ふ所なくゞ、人の見聞くにいよるべからず。

(百四十四)栂尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふをのこ、あしくといひければ、上人立どまりて、あなたふとや、宿執開發の人かな、阿字〳〵と唱ふるぞや、いかなる人の御馬ぞ、あまりにたふとくれぼゆるいと、たづね給ひければ、府生

の意なり

府生殿近衛々門兵衛にある官なり

阿字本不生大日經に有情及非情阿字第一命また阿字門一切諸法本不生と智證大師阿字秘釋に始從妙法終至而去無非阿字本不生とあり阿の字は眞言秘密の觀法なり本不生とは諸法本來空の義なりさて上人あしくを阿字と聞き府生を不生と聞きなしたるなり

北面は院の侍にて既にいへり重躬信願傳記共に知れず

もゝじり桃尾にて鞍の上に尻のすわらぬを云

沛艾交選籍田賦に龍驤騰騫而沛艾註に馬行貌とあり古訓にいさめるともをどりあがるともよめり

明雲座主久我太政大臣雅實公の孫顯通の子山

殿の御馬に候ふと答へけり。こゝめでたき事かな、阿字本不生にこそあなれ、うれしき結緣をもまつるかなとて、感涙をのごはれけるとぞ。

(百四十五)御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を、落馬の相ある人なり。よく〳〵愼み給へといひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願、馬より落て死にけり。道に長じぬる一言、神の如しと人思へり。さていかなる相ぞと、人の問ひければ、極めてもゝじりにして、沛艾の馬を好みしかば、此相おほせ侍りき。いつかゝ申しあやまりたるとぞいひける。

(百四十六)明雲座主、相者に逢ひ給ひて、おのれもし兵仗の難やあると、尋ね給ひければ、相者、まことに其相おはしますと申す。いかなる相ぞと尋ね給ひければ、傷害の懼れはしますまじ

門座主となれり義仲の亂の時射殺されたり
兵仗刀劍弓箭の類を云傷害の懼云々座主の身なればさる懼ハなき筈なるをもし有らんかと思ひよるハ懼あるべき事のあればなりとの意也
格式弘仁格弘仁式貞觀格貞觀式延喜格延喜式これを三代格式といふ
三里明堂灸經に男子三十已上不可不灸三里三里所以下氣也とあり或云在膝眼三寸
鹿茸頂産條に鹿茸切不可就鼻聞薫有蝨虫とあり
能をつかんとする人此段藝能を嗜む人の修行の心づかひをかけりうち〳〵ハ俗に内々といふに同し
堅固かたは堅固は未熟の意かたはハかたはしにてまほならぬ意也

き御身にて、假にもかく思しよりて尋ね給ふ、是既に其あやぶみの兆なりと申しけり。果して矢にあたりて、失せ給ひにけり。

(百四十七)灸治あまた所になりぬれば、神事に穢ありといふ事、近く人のいひ出せるなり。格式等にも見えずとぞ。

(百四十八)四十以後の人、身に灸を加へて、三里をやかざれば、上氣の事あり。かならず灸すべし。

(百四十九)鹿茸を、鼻にあてゝ嗅ぐべからず。ちひさき虫ありて、鼻より入りて、腦を喰むといへり。

(百五十)能をつかんとする人、よくせざらんほどハ、なまじひに人に知られじ。うち〳〵より習ひて、さし出たらんこそ、いと心にくからめと、常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得る事なし。いまだ堅固かたはなるより、上手の中にまじりて、

天性その骨なけれどもハ生れつきの器用ハなくともの意なり
堪能の嗜まざるより云々ハ器用の人の藝を嗜み勤めぬよりハ却て上手になるとなり
放埒せざればハみだりにせざる意なり
年五十になるまで云々論語子罕篇に後世可畏焉知來者之不若今也四十五十而無聞焉斯亦不足畏也已また大戴禮修身篇に曾子曰年三十四十之間而無藝則無藝矣五十而不以善聞則不聞矣云々とあり
ゆかしくおぼえん事云々其藝をゆかしく思ふならばとの意也
其おもぶきを云々大方其道の樣子を知りなば一向知らぬにもあらじなればよきほどにして

誇り笑はるゝにも耻ぢず、つれなく過ぎて、たしなむ人、天性其骨なけれども、堪能の嗜まざるよりハ、遂に上手の位に至り、徳たけ人にゆるされて、さうなき名を得る事なり。天下の物の上手といへども、始ハ不堪の聞ゆも有り、無下の瑕瑾も有りき。されども其人、道のおきてただしく、是を重くして放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となる事、諸道かはるべからず。

(百五十一)或人のいはく、年五十になるまで、上手に至らざらん藝をバ、捨つべきなり。勵み習ふべき行末もなし。老人の事をバ、人もえ笑はず。欲に交りたるも、あへなく見ぐるし。大方萬のまゐざハやめて、いとまあるこそ、めやすくあらまほしけれ。世俗の事にたづさはりて、生涯を暮すハ、下愚の人なり。ゆかしくおぼえん事ハ、學び聞くとも、其おもぶきを知りなば、お

やむべしと也されど此段ハ佛道の方よりいへばかくてこそよかるべけれど專門の道を學ぶ人の爲にハよき敎といひ難からん歟

西大寺拾芥抄に高野天皇天平勝寶元年創之至天平神護元年十七年造畢とあり

靜然上人傳記詳ならず

西園寺內大臣左大臣公衡公の男實衡公なり又竹林院と號す

資朝卿日野俊光卿の男權中納言從三位檢非違使別當後醍醐天皇の時の人なり

老さらぼひハ老てやせおとろへたるさま也

爲兼大納言入道藤原爲家卿の孫爲敎卿の子伏見院の時隱謀の風聞ありしにより北條家より召捕て佐渡に流され後歸洛して大納言に任ぜらる毘沙門堂と號し

ぼつかならずして止むべし。もとより望む事なくしてやまんハ、第一の事なり。

(百五十三)西大寺靜然上人、腰かゞまり眉まろく、まことに德たけたるありさまにて、內裏へ參られたりけるを、西園寺內大臣殿、あなたふとのけしきやとて、信仰のきそく有りければ、資朝卿これを見て、年のよりたるに候ふと申されけり。後日にむく犬の、あさましく老さらぼひて、毛はげたるを引かせて、このけしき尊く見えて候ふとて、內府へ參られたりけるとぞ。

(百五十三)爲兼大納言入道召捕られて、武士ども打圍みて、六波羅へゐて行きければ、資朝卿、一條わたりにて、是をみて、あなうらやまし。世にあらん思ひ出、かくこそあらまほしけれとぞいはれける。

て二條冷泉二流の外に和歌の一家をなしたり

六波羅北條家一族の內二人を探題となし京都におき幾內西國の政事を掌らしめこれを兩六波羅といふ

此人日野資朝卿をいふ

東寺昔鴻臚館なりしを弘仁年中弘法大師給りて寺となせり

ずなほに珍らしきものにいとかずの一句萬のことわりにわたりて思ひみるべし歌文の趣向などいふ物も又かくの如きものとさとるべきなり

機嫌阿含經に預知機嫌とあり字書に機發也嫌疑也さてむかへる人の喜ぶけしき怒れるきざしを見てそれと大方知るを機嫌を知るといふ

(百五十四)此人、東寺の門に、雨やどりせられたりけるに、かたわものどもの、集り居たるが、手も足も、ねぢゆがみうちかへりて、いづくも不具に、異やうなるを見て、とりぐに、類なきくせものなり。もつとも愛するにたれりと思ひて、まもり居けるほどに、やがて興つきて、見にくゝいぶせく覺えければ、唯すなほに、珍しからぬ物にハ若かずと思ひて、歸りて後、此間うゑ木を好みて、ことやうに、曲折あるを求めて、目をよろこばしめつるハ、かのかたわものを愛するなりけりと、興なくおぼえければ、鉢に植ゑられける木ども、皆堀り捨てられにけり。さも有りぬべき事なり。

(百五十五)世に從はん人ハ、まづ機嫌を知るべし。ついでありき事ハ、人の耳にも逆ひ、心にも違ひて、其事ならず。さやうの

ついであしき事ハ云々韓非子說雖に有愛於主則知當而加親有憎於主則罪當而加疏故陳說之士不可不察愛憎之主而後說之矣また漢書張良傳に忠言逆於耳とあり

生住異滅生は生れ出るをいひ住は人間に居住して老身となること異は病をうけて異形となるをいひ滅は死にゆくことなりこを四相といふ

眞俗眞は出世間をいひ俗は世間をいふ

小春荆楚歲時記に小春十月異名也天時和暖似春故曰小春とあり

迎ふる氣云々下より萌し迎ふる氣をまうけし故に上の木の葉のまちとりて落る次第甚早きなりとの意なり

生老病死これ生老異滅にひとし

折ふしを心得べきなり。但病をうけ、子産み、死ぬる事のみ、機嫌をはからず、ついであしとて、止むことなし。生住異滅の移り變る、實の大事ハ、たけき河の漲り流るゝが如し。まばしもとゞこほらず、たゞちに行ひゆくものなり。されば眞俗につけて、かならずはたし遂げんと思はん事ハ、機嫌をいふへからず。とかくの用意なく、足ふみ止むまじきなり。春暮れて後夏になり、夏はてゝ秋の來るにハあらず。春ハやがて夏の氣を催ほし、夏より既に秋ハかよひ、秋ハすなはち寒くなり、十月ハ小春の天氣、草も青くなり、梅もつぼみぬ。木葉の落るも、まづ落ちてめぐむにハあらず。下より萌し出るにたへずして落るなり。迎ふる氣、下にまうけたるゆゑに、待ちとるついで、甚はやし。生老病死の移り來る事、又是に過ぎたり。四季ハ猶定れるついで

かねてうしろに迫れり今唯こゝもとにありとの意なり

大臣の大饗新任大臣の饗應也江次第に正月四日は左大臣饗五日右大臣饗是式日也而近代任大臣明年行之不行大饗大臣不向饗所云々とあり

常の事なり必さるべき所を申請ふが故實といふにあらねどさる事もまゝあるハ常の事なりとの意なるべし

宇治左大臣は頼長公也

内裏にてありけるをハ當時東三條殿は天子のおはしましけるを申請ひしかは他所へ行幸せさせ給ひきと也

させる事のよせ云々さて御一門などいふ樣故ハなくとも規摸の儀なればわりなき女院の御所などかり申さゝ故實なりとの意也

有り。死期ハついでを待たず。死ハ前よりしも來らず。かねてうしろに迫れり。人みな死ある事を知りて、待つ事ハかも急ならざるに、おほゝずして來る。沖の干潟はるかなれども。磯より潮の滿つるかごとし。

(百五十六)大臣の大饗ハ、さるべき所を申しうけて行ふ、常の事なり。宇治左大臣殿ハ、東三條殿にて行はる。内裏にて有りけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させる事のよせなけれども、女院の御所などかり申す、故實なりとぞ。

(百五十七)筆を執れば物書かれ、樂器を執れば音たてんと思ふ。盃をとれば酒を思ひ、さいをとれば攤うたん事を思ふ。心ハかならず事に觸れて來る。かりにも不善のたはぶれをなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も

錐を執れば云々陳師道思孝記に目之所視而思從之視于戈思鬪視刀鋸則思懼視廟社則思敬視節家則思安この筆法によりてかけり

擲杜甫詩に白客擲錢高浪中とありて擲註に擲錢獨人賭錢之名とあり雙六の事なり

散亂の心ながらも云々法華經方便品に若人散亂心入於塔廟中一稱南無佛皆已成佛道也と有

繩床繩をもて造りたる粗末なる床にて座禪工夫の所なり

禪定智度論に禪奏言思惟修また僧史畧に禪者卽定惡の通稱明心達理之趣也とあり

外相は外のかたち内證ハ内の心なり

凝當當は底なり

魚道下學集に魚道建殘盃也以余瀝洗盃底嚥之魚過舊道故云魚道也魚雖游泳大海終不忘舊道者是又出所未詳也とあり

みなむすび公家の表袴或は聖道の袈裟などの飾に糸を以て結びさゝるをいふ

蜷和名抄に河貝子和名美奈俗用蜷字非也殼上黑小狹長似人身者也とあり

勘解由小路二品禪門參議行忠卿世尊寺と號すひらばり平張にて庭上などに板敷をして假に張り出したる所をいふ

護摩は梵語にて燒焼の意なりされば焼くといふは正言なれば嫌ふ也

清閑寺僧正道我とて兼好と同じ時代の人なり

冬至短日の極をいふ

時正彼岸中の日を云晝夜時正き故にいふとぞ

見ゆ。卒爾にして、多年の非を悛むる事も有り。かりに今此文をひろげざらましかば、此事を知らんや。是すなはち觸るゝ所の益なり。心更に怠らずとも、佛前に有りて、珠數をとり、經をとらば、怠るうちにも、善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に座せば、おぼにずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相もし背かされば、内證かならず熟す。志ひて不信といふべからず。仰ぎてこれをたふとぶべし。

(百五十八)盃の底をすつる事ハ、いかゞ心得たると、ある人の尋ねさせ給ひしに、凝當と申し侍るハ、底に凝りたるを、すつるにや候ふらんと、申し侍りしかば、さにハあらず。魚道なり。ながれをのこして、口のつきたる所を、濯くなりとぞおほせられし。

(百五十九)みなむすびといふハ、糸を結ひかさねたるが、蜷といふ貝に似たればいふと、あるやんごとなき人仰せられき。になどいふハ誤なり。

(百六十)門に額かくるを、うつといふハ、よからぬにや。勘解由小路二品禪門ハ、額かくるとのたまひき。見物の棧敷うつも、よからぬにや。ひらばりうつなどは、常の事なり。さんじき搆ふるなどいふべし。護摩たくといふもわろし。修する、護摩するなどいふなり。行法も、法の字を清みていふわろし。濁りていふと、清閑寺僧正仰られき。常にいふことに、かゝる事のみ多し。

(百六十一)花の盛は、冬至より百五十日とも、時正の後、七日ともいへど、立春より七十五日、おほやう違はず。

遍昭寺廣澤の池の近くにある寺なり

承仕法師寺中のふれながし法事などの雜役をする法師にて名にいはずゞ

池の鳥は廣澤の池の鳥なるべし

おどろ〳〵し〳〵騷きの仰山なる意なり

所より使廳へ〻其所より撿非違使廳へ訴へたるなり

太衝九月の異名なり

もりちか入道傳未詳吉平安倍晴明の子にて主計頭陰陽博士なり

(百六十二)遍昭寺の承仕法師、池の鳥を日頃飼ひつけて、堂の内まで餌を撒きて、戸一つ開けたれば、數も知らず入こもりける後、おのれも入りて、閉ぢこめて、捕へつゝ殺しけるよそほひ、おどろ〳〵しく聞にけるを、草苅る童聞きて、人に告げければ、村のをのこども起りて、入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、打ふせ捩ぢ殺しければ、此法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺す所の鳥を、頸にかけさせて、禁獄せられにけり。基俊大納言、別當の時になん侍りける。

(百六十三)太衝の太の字、點打つ、打たずといふ事、陰陽の輩、相論の事ありけり。もりちか入道申し侍りしゝ、吉平が自筆の占文の、裏に書かれたる御記、近衛關白殿にあり。點打ちたるを書きたりと申しき。

(百六十四)世の人相遇ふ時、まばらくも默止する事なし。かならずことばあり。其言を聞くに、多くゝ無益の談なり。世間の浮說、人の是非、自他の爲に、失おほく、得すくなし。是を語る時、たがひの心に、無益の事なりといふ事を知らず。

(百六十五)あづまの人の、都の人に交り、都の人の、あづまに行きて身を立て、また本寺本山を離れぬる顯密の僧、すべて我俗にあらずして、人に交はれる見ぐるし。

(百六十六)人間のいとなみあへる業を見るに、春の日に、雪佛を作りて、其ために、金銀珠玉の飾物を營み、堂塔を建てんとするに似たり。其撊をまちて、よく安置してんや。人の命、ありと見るほども、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、營

是をかたる時云々打紛れてうつら〳〵と語りゆきて無益の事とも知らずと也されば心をつけてつゝしむべしとの意をこめたり

顯密の僧顯は密宗の僧なり顯はあらはに佛說を敎へ聞かする天台宗などをいひ密とは眞言宗秘密の法をいふ

我俗わが風俗なり一本に我屬とあり

雪佛貞和集に子元雪佛頌一雖聚出一如來六出圓々唯嘘開讃得觸破元是太摩耶宮裏不投胎とあり又雪達摩雪布袋とあるも雪にて其像を作るなり

あらぬ道の筵わがえせぬ道の筵に臨みてとの意なり

常の事俗にありうちの事といふにひとし

我智をとり出てもし我たづさはれる道にて我智を挾みてとの意也

人としては云々これよりハ人に勝れりと思ふ我慢の心を忘るべしとの意なり

品の高さにても云々踏雪抄に法界次第云自恃輕他之心云慢若恃顧姓富貴有德才能輕蔑於他即是慢也とあり

みまつこと甚多し。

(百六十七)一道にたづさはる人、あらぬ道の筵に臨みて、あはれわが道ならましかば、かくよそに見侍らじ物をといひ、心にも思へる事、常のことなれど、よにわろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨しく覺えば、あならやまし、などか習はざりけんと、いひてありなん。我智をとりいでゝ、人にあらそふハ、角ある者の、角をかたぶけ、牙あるものゝ、牙をかみ出すたぐひなり。人としてハ、善にほこらず、物と爭はざるを得とす。他にまさる事のあるハ、大なる失なり。品の高さにても、才藝の優れたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人ハ、たとひ詞に出てこそいはねども、内心にそこばくの咎あり。慎みてこれを恐るべし。をこにも見ゆ、人にもいひけたれ、わざ

其非を知るが故に云々實に其道に長じたる人ハ才藝の極なき事を知て我智の未至らざる事をよく知る故に忘滿足せずして物にほこらずとなり

此人の後にハこの人もし死にたる後にハとの意なり

老のかたうど方人にて老功の其道の人といふ意なり

さだかにハたしかに明になどいふ意なり

おさなしくもどきぬべくも云々大人しくそれハさやうにあらずなど逆ひ說くべくもあらぬ人の知らぬ事を知りがほにいひ開するハとの意なり

はひをも招くハ、たゞ此慢心なり。一道にも、まことに長じぬる人は、みづから明かに其非を知るがゆゑに、こゝろざし常にみたずして、つひに物にほこる事なし。

(百六十八)年老たる人、一事優れたる才能ありて、此人の後にハ、誰にか問はんなどいはるゝハ、老のかたうどにて、生けるもいたづらならず。さハあれど、それもすたれたる所のなきは、一生此事にて暮れにけりと、拙く見ゆ。今ハ恐れにけりと、いひて有りなん。大かたハ知りたりとも、すゞろにいひちらすハ、さばかりの才にハあらぬにやと見ゆ、れのづから誤も有りぬべし。さだかにも辨へ知らずなどいひたるハ、猶まことに、道のあるじとも覺ぬべし。まして知らぬ事、知たりがほに、れとなしくもどきぬべくもあらぬ人の、いひ聞かするを、さもあ

建禮門院の右京大夫高倉天皇の皇后安德天皇の御母建禮門院の女房にて藤原伊行の女なり うちずみ内裏住にて平家没落の後後島羽院に宮仕したるなり

さしたる事なくて往くべき程の事なくてと也

厭はしげに云々亭主も客の長居を迷惑さうに不請々々の答などせんもわろければせんかたなくあへしらひわるゝ也

心づきなき云々手前に急用などありて長談の氣に添はぬやうの時に其由をも客にいひて斷るべしさなり

同じ心に云々わがあひくちの友にて今日の徒然なれば緩りとなど亭主のいはん時の前にへる限ならねば長談も苦しからずと也

阮籍が青き眼云々阮籍の竹林七賢の一人にてあひくちの友には青眼をなしあはぬ友には白眼をなしたりとぞ晉書に詳なりさて誰も其好惡あるべき事となり

その事となきに云々このあひくちの友の事也

又交も云々用事のなくとも久しく音信れ申さねば床しさになどのみいひたるのうれしと也

貝をおほふの貝合なり

碁盤の隅に云々藝經に彈碁兩人對局白黑碁各六枚先引碁相當更先彈也其局以石爲之とあり

ひとり目古注に聖目また井目とあり井目は井田の九百畝になぞらへてなかいふといへり

らずと思ひながら聞きぬたる、いとわびし。

(百六十九)何事の式といふ事ハ、後嵯峨の御代までハ、いはざりけるを、近き程よりいふ詞なりと、人の申し侍りしに、建禮院門の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、又うちずみしたる事をいふに、世の式も、變りたる事ハなきにとも書きたり。

(百七十)さしたる事なくて、人のがり行くハ、よからぬ事なり。用ありて行きたりとも、其事はてなば、疾く歸るべし。久しく居たる、いとむつかし。人と對ひたれば、詞ねぼく、身もくたびれ、心も閑ならず。萬の事さはりて、時を移す。たがひのため益なし。厭はしげにいはんもわろし。心づきなき事あらん折ハ、中々そのよしをもいひてん。同じ心に對はまほしく思はん人の、つれ〴〵にて、今ばし、今日ハ心靜になどいはんハ、此かぎりにハあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。其事となきに、人の來りて、のどかに物がたりしてかへりぬる、いとよし。又交も、久しく聞こさせねばなどばかり、いひておこせたる、いとうれし。

(百七十一)貝をおほふ人の、我前なるをおきて、よそを見渡して、人の袖の陰、膝の下まで目を配るまに、前なるをば、人におほはれぬ。よく掩ふ人ハ、よそまでわりなく取るとハ見ねずして、近きばかり掩ふやうなれど、多くねほふなり。碁盤の隅に、石をたてゝはじくに、むかひなる石を、まもりてはじくハ中らず。わが手もとをよく見て、こゝなるひじり目を、直にはじけば、たてたる石、かならず中る。万の事、外にむきて求むべからず。只こゝもとを正しくすべし。清獻公がことばに、好事を行

外にむきて求むべからず中庸に射有似乎君子失諸正鵠反求諸其身とあり

清獻公宋の趙抃なり其座右銘に行好事莫問前程とあり

内を慎まず云々論語に遠人不服則修文德以來之既來之則安之註に內治修然後遠人服有不服則修德以來之亦不當勤兵於遠とあり

風にあたり云々本草序に其諺曰常不能慎事上若自數百阿之本而怨咎於神雖乎當風臥濕反賈他人於失覆塔抑人也とあり

禹の行きて云々書經大禹謨に帝曰咨禹惟時有苗弗率汝徂征禹乃會群后三旬苗民逆命益曰惟德動天無遠弗屆禹班師振旅帝乃誕敷文德舞干羽于兩階七旬有苗格とあり三苗は國の名なり

して、前程を問ふことなかれといへり。世を保たん道も、かくや侍らん。內を慎まず、かろくほしきまゝにしてみだりなれば、遠國かならずそむく。そむく時、始て謀を求む。風にあたり、濕に臥して、病を神靈にうたふるハ、愚なる人なりと、醫書にいへるがごとし。目の前なる人の、愁をやめ、惠をほどこし、道を正しくせば、其化遠く流れん事を知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、軍を還して、德をあきらかにハあかざりき。

(百七十二)若き時ハ、血氣うちにあまり、心物に動きて、情欲れほし。身をあやぶみて、碎けやすき事、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費やし、是をすてゝ、苔の袂にやつれ、勇める心さかりにして、物と爭ひ、心に耻ぢ羨み、好む所日々に定らず、色に耽り、情をめで、行をいさぎよくして、百年の身を

若き時云々論語に少之時血氣未定戒之在色とあり

苔の袂にやつれ隱逸の意なり

長き世がたり後世迄も語りぐさにぜらるゝをいふ

あはくおろそかにして精神淡薄にして物にかまはぬをいふ

玉造玉造小町壯衰書といふものあり群書類從に收めたり

清行三韓清行なるべし

高野大師空海にて弘法大師の事なり

承和仁明天皇の年號也

誤り、命を失へる例を願はしくして、身の全く久しからん事をば思はず。すける方に心ひきて、長き世がたりともなる。身を過つことハ、若き時のあわざなり。老ぬる人ハ、精神衰へ、あはくおろそかにして、感じ動く所なし。心れのづからあづかなれば、無益のわざをなさず。身をたすけてうれへなく、人のわづらひなからん事を思ふ。老て、智の若き時にまされる事、若くして、貌の老たるにまされるが如し。

(百七十三)小野小町が事、きはめてさだかならず。衰へたるさまハ、玉造といふ文に見えたり。此文、清行がかけりといふ說あれど、高野大師の御作の目錄に入れり。大師ハ、承和の初にかくれ給へり。小野がさかりなる事、其後の事にや。猶おぼつかなし。

小鷹ハ鶉などとるを小鷹といひ雉をとるを大鷹といふ

愚なる人といふとも云々誰も大道を味はゝ無益の小事ハ捨つべきに道に入る人の少なき事よとの意をふくめたりともあるごとにハ々かくの事のある毎にハとの意なり

人目をはかりて人の見ぬすきを謀りて埒へ離さに酒を捨んとする也うるはしき人殿正なる人をいふ

狂人となりて范登公詩に戒爾勿際酒狂奬非佳味とあり

（百七十四）小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大につき、小を捨つることわり。まことにまかなり。人事多かる中に、道を樂しぶより、氣味深きハなし。是實の大事なり。一たび道を聞きて、是にこゝろざゝん人、いづれの業かすたれざらん。何事をか營まん。おろかなる人といふとも、かしこき犬の心に劣らんや。

（百七十五）世にハ心にぬ事の多きなり。ともあるごとにハ、先酒を勸めて、强ひ飲ませたるを興とする事、いかなるゆゑともの心得ず。飲む人の顏、いと堪へがたげに、眉をひそめ、人の目をはかりて捨てんとし、逃げんとするを、とらへて引とゞめて、すゞろに飲ませつれば、うるはしき人も、たちまちに狂人となりてをこがましく、息災なる人も、目の前に大事の病者となり

祝ふべきハ元服徙移などいふ祝言の折にかく狂人となし病者となす事興さむるわざなりとなり

人の國に云々酒のまするならはしの我朝にハなくて異國にのみある事なりと聞傳へましかゞとの意なり

人の上にて云々まして我飲みてかやうならばいかに心うからんとの意をふくめたり

思ひ入りたるさまに云々用意深く思ひ入れし容体にて日頃心にくゝ奥ゆかしく見えたる人もとの意なり

紐はづしいれ紐をはづす也裝束のだらけなきさまをいふ

て、前後も知らずたふれふす。祝ふべき日などハ、淺ましかりぬべし。あくるまで、頭いたく、物くはず、によひ臥し、生をへだてたるやうにして、昨日の事覺えず。おほやけわたくしの大事を欠きて、煩となる。人をしてかゝるめを見する事、慈悲なく、禮義にも背けり。かく辛きめにあひたらん人、ねたく口をしく思はざらんや。人の國に、かゝる習ひあるなりと、これらになき人事にて、傳へ聞きたらんは、あやしく不思議に覺えぬべし。人の上にて見るだに心憂し。思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのゝしり、詞多く烏帽子ゆがみ、紐はづし、はぎ高く掲げて、よういなき氣色、日頃の人々とも覺えず。女ハ額髮はれらかに搔きやり、まばゆからず、顏うちさゝげて打笑ひ、盃もてる手に取つき、よからぬ人ハ、肴とりて、

はれちかに晴やかにてかくるゝ所なきなり

まばゆからず云々物耻もせず顔さしあげ笑ふことなり

すぢりたる一曲をかなでたるさまをいふ又肩骨などのさま也といふ説もあり

我身のいみじき事自譽をいふなり

のりあでゝ思りあひの意なり

えもいはぬ事云々嘔吐などつゝなり

いとかはゆし法師もしてかく酔ひたる愚癡さよと却て憐む意なり

口にさしあて、みづからも喰ひたるさまあし。聲のかぎり出して、れの〳〵謠ひ舞ひ、年老たる法師、召出されて、黒くきたなき身を肩ぬきて、目もあてられず、すぢりたるを、興じ見る人さへ疎ましくにくし。あるハ又、我身のいみじき事ども、かたはらいたく言ひ聞かせ、あるハ酔なきし、下ざまの人ハ、のり合ひいさかひて、あさましく、恐しく、耻がましく、心うき事のみ有りて、はてハゆるさぬ物どもれし取りて、椽より落ち、馬車よりおちて過しつ。物にも乘らぬきはハ、大路をよろぼひ行きて、築土門の下などにむきて、ねもいはぬ事どもまちらし、年老い袈裟かけたる法師の、小童の肩をれさへて、聞えぬ事どもいひつゝ、よろめきたるいとかはゆし。かゝる事をしても、此世も後の世も、益有るべきわざならば、いかゞハせん。此世にハ、

百藥の長漢書食貨志に鹽食者之將酒百藥之長とあり

萬の病ハ云々槃若論に佛告難提酒有多過一費財二多病云々とあり

愁を忘るゝ云々東方朔傳に銷憂者莫若酒と有酒をさりて云々梵網經心地法門品に若自身手過酒器與人飲酒者五百生無手何況自飲とあり

かくうとましと思ふ云々是より又酒の掛て難き事をいへり一たびおとし一たびあぐる文法なり

とり行ひたる酒肴などとり出て酒み飲む事也なれ〳〵しからぬ云々高貴の女中などなるべし

あやまち多く、財を失ひ病をまうく。百藥の長といハいへど、萬の病ハ、酒よりこそ起れ。愁を忘るといへど、酔ひたる人ぞ、過にしうさをも思ひ出て泣くめる。後の世ハ、人の智惠を失ひ、善根をやく事、火の如くして、惡を増し、よろづの戒をやぶりて、地獄に墮つべし。酒を取りて人に飲ませたる人、五百生が間、手なきものに生るゝとこそ、佛ハ説き給ふなれ。かく疎ましと思ふ物なれど、おのづから捨がたき折も有るべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して、盃出したる、よろづの興をそふるわざなり。つれ〴〵なる日、思ひの外に入り來て、とり行ひたるも、心なぐさむ。なれ〳〵しからぬあたりの、みすの内より、菓物御酒など、よきやうなるけはひして、さし出されたるいとよし。冬せばき所にて、火にて物煎りなどして、隔

いたう痛む人下戸の酒を苦痛に思ふ人なり
よき人の高貴の人なり
さいへど酒は飲むべからざる物といへどの意なり
朝いは朝寢なり
ある色の云々他所にて酔て其まゝねたるをそこの主人の朝になりて戸障子など明るをいふ
ほれたる顔寢ぼけ顔也
引きしろひて云々狩衣などもきず抱きもちてひきずりながらはぢて逃げゆくなるべし
かいどり姿下着ばかりにて帶をもせぬなり
うしろ手は後姿なり
黒戸清涼殿の北なる滝口の戸の西にあり
小松御門光孝天皇なり
だゞ人に云々遍王にて五十の歳までまし〻程

なきどちさし對ひて、多く飲みたる、いとをかし。旅の假屋、野山などにて、御肴何かなどいひて、芝の上にて、飲みたるもをかし。いたう痛む人の、强ひられて、少しのみたるもいとよし。よき人の、とりわきて、今一つ、うへすくなしなど、のたまはせたるもうれし。近づかまほしき人の、上戸にて、ひし〳〵と馴れぬる、又うれし。さいへど、上戸ハをかしく、罪ゆるさるゝものなり。酔ひくたびれて、朝いしたる所を、あるじの引きあけたるに惑ひて、ほれたる顔ながら、細きもとゞりさし出し、物も着あへず、抱き持ち、引きしろひて逃ぐる、かひどり姿のうしろ手、毛生ひたる細はぎのほど、をかしくつきゞし。

(百七十六)黒戸ハ、小松御門位に即かせ給ひて、昔たゞ人におはしまし〻時、まさな事せさせ給ひしを、忘れ給はで、常にいとなませ給ひける間なり。みかま木に煤けたれば、黒戸といふとぞ。

をいへるなり
まさな事正なき事にて料理などして聞食し給へるなるべし
みかま木御薪なり
鎌倉中書王中務卿宗尊親王なり
佐々木隠岐の入道太郎左衛門尉政義入道して心願といふ
吉田中納言万里小路中納言藤房卿なるべし
乾砂子雨後の鞠場にハ鋸屑を敷て湿をとりさて其屑を掃ひて後乾砂子を撒きてつくろふ也
この段の話は砂の用意なくて鋸屑のふゝなりしを賤しく異やうの事といへるなり
寶劍をは云々寶劍は三種の神器の内にて御神樂の行幸にハ持せられ

(百七十七)鎌倉中書王にて、御鞠ありけるに、雨降りて後、いまだ庭の燥かざりければ、いかゞせんとさた有りけるに、佐々木隠岐の入道、鋸の屑を、車に積みて、多く奉りたりければ、一庭に舗かれて、泥土のわづらひなかりけり。取りためけん用意、ありがたしと人感じあひけり。此事を、ある者の語り出たりしに、吉田中納言の、乾砂子の用意やハなかりけると、のたまひたりしかば、耻かしかりき。いみじと思ひける鋸の屑、賤しくこそやうの事なり。庭の儀を奉行する人、かわき砂子をまうくるハ、故實なりとぞ。

(百七十八)或所の侍ども、内侍所の御神樂を見て、人に語るとき

て、寶劍をば、其人ぞ持ち給へるなどいふを聞きて、内なる女房のなかに、別殿の行幸にハ、晝御座の御劔にてこそあれと、忍びやかにいひたりし、心にくかりき。その人、古き典侍なりけるとかや。

ぬを知らでおかいへりし也
別殿は内侍所をいふ
晝御座清涼殿にあり
その人は女房をいふ也
入宋支那へ渡るに唐の時なれは入唐宋の時なれは入宋といふ也
沙門釋氏要覽に能師云出家之都名也とあり
道眼上人雜好同時代の法師なり傳記詳ならず
一切經大藏經なり七千余卷あり
首楞嚴經十卷ありまた中印度那蘭陀大道場經ともいふ
那蘭陀寺天竺の寺號也
道眼歸朝して其名を假て號せり
江帥太宰權帥大江匡房なり
西域傳玄奘三藏渡天の記錄十二卷あり
法顯傳法顯三藏渡天の記錄なり

(百七十九)入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、やけ野といふ所に安置して、殊に首楞嚴經を講して、那蘭陀寺と號す。其聖の申されしハ、那蘭陀寺ハ、大門北向なりと、江帥の說とていひ傳へたれど、西域傳、法顯傳などにも見ず。更に見所なし。江帥は、いかなる才學にて申されけん。おぼつかなし。唐土の西明寺は、北向勿論なりと申しき。

(百八十)さぎちやうハ、正月に打ちたるぎちやうを。眞言院より、神泉苑へ出して、燒あぐるなり。法成就の池にこそとはやさぎちやう　蠟竹にて三毬杖三毬打左巻長などさまくに書くなり毬杖三つを立てゝ作る物なればおかいへるなり支那にては除夜元旦などに行ひしを本朝にてハ正月の中頃にする事なり後世元三に用ひたる松竹おもなはなどまて燒く事ありて其儀よく似たり
眞言院拾芥抄に在八省院北付綱人候勤御修法念誦等とあり
神泉苑拾芥抄に天子遊覽所云々とありいにしへハ内裏にありしなり
讃岐典侍堀河院の宮女にて日記二卷あり新勅撰集の作者なり
歸京醍醐寺大納言隆衛卿の男なり
かちさけ干鮭なり
鮭といふ魚云々鮭を參らぬ事ならは是非に及はじ既に參る物なれハすハ、神泉苑の池をいふなり。

(百八十一)ふれくこ雪、たんばのこ雪といふ事、よね春き節ひたるに似たれば。粉雪といふ。たまれこ雪といふべきを、誤りて、たんばのといふなり。垣や木のまたにとうたふべしと、あるもの知り申しき。昔よりいひける事にや。鳥羽院の幼くおはしまして、雨の降るにかく仰せられける由、讃岐典侍が日記に書きたり。

(百八十二)四條大納言隆親卿、からざけといふ物を、供御に參らせられたりけるを、かくあやしき物參るやうあらじと、人の申しけるを聞きて、大納言、鮭といふ魚參らぬ事にてあらんにこそあれ。さけのまらぼし、なでふ事かあらん、鮎の白干ハ、參らぬかはと申されけり。

生乾にたる何の雑あるへき鮒のもち干を參らするからは干鮭も雑あらじと隆親卿の辨解せるなり

人衝く牛をは云々律のいましめにて厩牧律に凡馬牛及犬有觸觝踢咬人而記號檢察不如法若有狂犬不殺者笞四十疏に依雑令畜産觝人者徹兩角踰人者絆足齧人者徹兩耳此爲標識絆之法とあり

相摸守時頼鎌倉執權なり最明寺と號す

守を入れ申さるゝ時頼を禪尼の亭へ請待するをいふ

城介義景秋田城介義景景盛入道覺地の子にて禪尼が兄なり

けいめい經營にて當日の諸事を世話するなり

給はりて云々陸子の細工をこなたへ下されてとの意なり

(百八十三)人衝く牛をば、角を切り人くふ馬をば、耳を切りて、其のきるしとす。きるしをつけずして、人をやぶらせぬるハ、主の咎なり。人喰ふ犬をば、養ひ飼ふべからず。是皆咎あり。律のいましめなり。

(百八十四)相摸守時頼の母ハ、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝ事ありけるに、煤けたるあかり障子のやぶればかりを、禪尼手づから、小刀して切まはしつゝ、はられければ、せうとの城介義景、其日のけいめいして候ひけるが、給はりて、なにがし男にはらせ候はん、さやうの事に、心得たる者に候ふと申されければ、其男、尼が細工に、よも優り侍らじとて、猶一間づゝはられけるを、義景、皆をはりかへ候はんハ、遙かにたやすく候ふべし、まだらに候ふも見苦しくやと、重ねて申されければ、尼も、後ハさはくとはりかへんと思へども、今日ばかりハ、わざとかくて有るべきなり。物は、破れたる所ばかりを、修理して用ふる事ぞと、若き人に見習はせて、心づけん爲なりと申されける、いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約をもとゝす。女性なれども、聖人の心にかよへり。天下を保つ程の人を、子にてもたれける、誠にたゞ人にハあらざりけるとぞ。

(百八十五)城陸奥守泰盛ハ、さうなき馬乘なりけり。馬を引出させけるに、足を揃へて、梱(しきみ)をゆらりと越ゆるを見てハ、是ハいさめる馬なりとて、鞍を置き換へさせけり。又足を伸べて、きみに蹴あてぬれば、是ハ鈍くして、あやまち有るべしとて、乘らざりけり。道を知らざらん人、かばかり恐れなんや。

(百八十六)吉田と申す馬乘の申し侍りしハ、馬毎にこはきも

物は破れたる所ばかり云々物はすべて儉約にすべき事を時頼に示さんとてかゝわざと破れたる所のみを繕ふとなり

城陸奥守景盛城介義景の三男なり

鞍を置きかへさせけり餘の馬に鞍をおかせたるなり

道を知らざらん人云々兼好批判の詞にて泰盛さうなき馬乘なればかく恐れたるなりと感じたるなり

馬毎に云々いづれの馬も人よりわ力つよければ力を以ておして乘り離き物ぞとの意也

不堪器量ならぬをいふ堪能の非家の人其道の家にいあらぬも器量の人をいふ

かならず堪る不堪なりといへども其道の人の堪るとなり

ひとへに自由なる非家の人の其業につゝしみなきをいふなり

因果は物の種の如く果は物の實に同じ前世の業因によりて現在の結果を受るといふ理也たづきたよりの意也

のなり。人の力爭ふべからずと知るべし。乘るべき馬をば、まづ善く見て、強き所、弱き所を知るべし。次に轡、鞍の具に、危き事や有ると見て、心にかゝる事あらば、其馬を走す可らず。此用意を怠れざるを、馬乘といふ申すなり。是秘藏の事なりと申しき。

(百八十七)よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人に並ぶ時、かならず優る事ハ、たゆみなく慎みて、かろ〳〵しくせぬと、ひとへに自由なるとの均しからぬなり。藝能所作のみにあらず。大かたのふるまひ、心づかひも、愚にして慎しめるは、得の本なり。巧にしてほしきまゝなるは、失の本なり。

(百八十八)ある者、子を法師になして、學問して、因果の理をも知り、說經などして、世渡るたづきともせよといひければ、教

檀那墨言故事に僧道稱施主曰檀那梵語能錄底唐言施主とあり

早歌謠物にて小歌の類なるべし今の端歌なといふたぐひなるべし

此法師のみにもあらず云々げにとおぼゆる詞なりかし

あらます事あらかじめ其事を爲んと思ひおく事をいふ

のまゝに、說教師にならんが爲に、まづ馬に乘り習ひけり。輿車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎にこせたらんに、桃尻にて落ちなんハ、心うかるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むる事あらんに、法師の無下に能なきハ、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つの業、やう〳〵さかひに入りければ、いよ〳〵善くしたくおぼえて、嗜みけるほどに、說經習ふべき隙なくて、年よりにけり。此法師のみにもあらず。世間の人、なべて此事あり。若きほどは、諸事につけて、身を立て、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらます事ども、心にハかけながら、世をのどかに思ひて、打怠りつゝ、まづさしあたりたる、目の前の事にのみまぎれて、月日を送れば、こと〳〵に成す事なくして、身

走りて坂を下る輪の如く漢書に如坂上走丸とあり

されハ云々是より一生の中に第一の事を思ひ定めて餘の事なく勤め學ぶべき事をいへり

たとへば云々これより一生の中宗とあらまほしき事多きをいづれをも捨てゝとしては却て一の大事もならずとの事を非ふ譬へていへるなり

ハ老ぬ。つひに物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども、取りかへさるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに、衰へ行く。されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、いづれかまさると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、其外は思ひ捨てゝ、一事を勵むべし。一日の中、一時のうちにも、あまたの事の來らん中に、少しも、益のまさらん事を營みて、其外をば打捨てゝ、大事をいそぐべきなり。何方をも捨てじと、心にとりもちてハ、一事も成るべからず。たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず。人にさきだちて、小を捨て、大につくが如し。それにとりて、三の石を捨てゝ、十の石に就くことハやすし。十を捨てゝ、十一に就く事ハ難し。一つなりとも、優らん方へこそ就くべきを、十までな

京に住む人云々これ又少しも優れりと思ひたる事に懈怠すべからずとの意を譬へたり

日をさゝぬは日を限らずさし定めぬ意なり

一時の懈怠云々菩薩本行經に夫懈怠者衆行之累在家懈怠則衣食不供禽獸不樂出家懈怠則不能出離生死之苦とあり

一事を必なさんと云々此一節此一段の眼目にて前にも大事を思ひ立んハさり難く心にかゝらん本意をとげずしてさながら捨つべきなりともいへる意なり

人のあまたありける云々人の嘲をも顧みず思ひたちたる事をとげたる物語なり

りぬれば、惜く覺にて、多くまさらぬ石にハ、換へにくし。是をも捨てず、かれをも取らんと思ふ心に、彼をも得ず。是をも失ふべき道なり。京に住む人、いそぎて東山に用ありて、すでに行きつきたりとも、西山に行きて、其益まさるべき事を思ひ得たらば、門より還りて、西山へ行くべきなり。こゝまで來着きぬれば、此事をばまづいひてん。日をさゝぬ事なれば、西山の事ハ、歸りて又こそ、思ひたゝめと思ふゆゑに、一時の懈怠、すなはち一生の懈怠となる。是を恐るべし。一事をかならず成さんと思はゞ、他の事の、破るゝをもいたむべからず。人の嘲をも耻づべからず。萬事にかへずしてハ、一の大事成るべからず。人のあまた有りける中にて、ある者、ますほのすゝき、まそほのすゝきなどいふことあり。渡の邊の聖、この事を傳へ知りたり

すはの濱まそほの濱すなそは同音にて同じ心なり眞緒は濱の花の赤きをいふ

渡の邊の聖攝津渡邊に住める聖なるべし

登蓮法師歌人にて詞華集以下十一代集に歌多く載りたり

敏きときハ云々論語陽貨篇にある語なり

一大事の因緣妙法蓮華の經旨といふ義なり法華經方便品に諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世とあり

あらぬいそぎ其事にもあらぬ意外のいそがはしき事なり

たのめぬ人約束せぬ人なり

と語りけるを、登蓮法師、其座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、簑笠やある、かし給へ、彼薄の事ならひに、渡の邊の聖のがり、尋ねまからんといひけるを、あまりに物さわがし、雨やみてこそと、人のいひければ、無下の事をも仰せらるゝ物かな、人の命ハ、雨の晴間をも待つものかは、我も死に、聖も失せなば、尋ねきゝてんやとて、走り出てゆきつゝ、習ひ侍りにけりと、申し傳へたるこそ、ゆゝしくありがたうおぼゆれ。敏きときハ則功ありとぞ、論語といふ書にも侍るなる。此すゝきをいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因緣をぞ思ふべかりける。

(百八十九)今日ハ其事をなさんと思へど、あらぬいそぎ、まづ出で來てまぎれ暮し、待つ人ハさはり有りて、たのめぬ人ハ來

此段人間一生すべて不定なる事をいへり兼好集にあらましも昨日に今日は變るかな思ひ定めぬ世にし住へばとよめるもこゝの意に通ずべし

異なる事なき云々異なりしふしもなく普通の女を婦に持てばそれをしもよしと思へるにやと其男の異しく見ゆるも也是より以下心劣りせらるゝ故をいへるなり

よき女ならば云々美婦を持てば其男さこそ可愛がりて吾本尊と大事にかけて守り居るならめとなり

り、頼みたる方の事は違ひて、思ひよらぬ道ばかりハかなひぬ。煩しかりつる事ハことなくて、安かるべき事ハ、いと心ぐるし。日々に過ぎ行くさま、かねて思ひつるにハ似ず。一年のうちも、かくの如し。一生の間も、又ま、かなり。かねてのあらまし、みな違ひ行くかと思ふに、わのづから違ハぬ事もあれば、いよ〳〵物ハ定めがたし。不定と心得ぬるのみ、まことにて違はず。

(百九十)妻といふものこそ、をのこの持つまじき物なれ。いつもひとりずみにてなど聞くこそ、心にくけれ。誰がしが聟になりぬとも、又いかなる女を取りすゑて、あひ住むなど聞きつれば、無下に心劣りせらるゝわざなり。異なる事なき女を、よしと思ひ定めてこそ、添ひ居たらめと、いやしくも推量られ、よき女ならば、此男こそ、らうたくして、あが佛とまもりぬたら

まして云々是より女をやさしくもてなさんに妻と定めん事ハ奥しげなるに況や世間に染み子まで生みたるハ心うく夫に後れて尼などになりたるハ夫のなき跡まで興さむる事多しとの意なり

いかなる女なりとも云々いかに形心美よき女も常に相見ては珍しけなく又おろそかに思ふやうにもなると也妻として家の内にハ定めずして外ながら折々通ふこそめづらしけれとの意なり

物のはに映菓などの意にて物のつやひかりをいふ

ことそぎ物事簡畧にするをいふ

およすげたる姿大人めきたるはえなき姿を云さて人の身のたしなみ豊ハ簡畧なるさまにしめ、たとへば、さばかりにこそと覺えぬべし。まして家の内を、行ひ治めたる女、いと口をし。子などいできて、かしづき愛したる心うし。男なくなりて後、尼になりて、年よりたる有樣、なき跡まで淺まし。いかなる女なりとも、明暮そひ見んにハ、いと心づきなく憎かりなん。女の爲も、中空にこそならめ。よそながら、時に通ひ住んこそ、年月經ても、たえぬ中らひともならめ。あからさまに來て、とまりぬなどせんハ、珍しかりぬべし。

(百九十一)夜に入りて、物のはえなしといふ人、いと口惜し。萬の物の、綺羅かざり色ふしも、夜のみこそめでたけれ。晝ハことそぎ、およすげたる姿にても有りなん。夜ハきらゝかに、花やかなる裝束、いとよし。人のけしきも、夜の火影ぞ、よきハよく、物いひたる聲も、暗くて聞きたる、用意ある心にくし。句も物

て夜陰なと人も見ぬ折ふしをわざと心とゞむへしとの意なり

暗くて聞きたる云々闇き所にて聞くに用意し慎みたるハおくゆかしとの意なり

けはれなく姿晴なくにて姿は常なれたる時晴ハ儀式の折をいふ

ゆするし湯浴するを云すべりつゝ奥に入るをいふ

くらき人云々愚闇の人の人の智を推量りての意なり

拙き人の云々我得たる一藝を人のえせぬを見て我身を慢ずる事をいましめたり

及ばずと定めてこゝにて句を切るへし下の大なる誤といふへかゝる詞なり

のねも、たゞ夜ぞ、ひときはめでたき。さしてことなる事なき夜、うちふけてまゐれる人の、清げなるさましたる、いとよし。若きどち、心とゞめて見る人ハ、時をもわかぬ物なれば、殊に打解けぬべき折節ぞ、けはれなく、引きつくろはまほしき。よきをのこの、日くれてゆするし、女も夜ふくるほどにすべりつゝ、鏡とりて顔などつくろひて、出るこそをかしけれ。

(百九十二)神佛にも、人のまうでぬ日、夜まゐりたるよし。

(百九十三)くらき人の、人をはかりて、其智を知れりと思はん、更に當るべからず。拙き人の、碁うつ事ばかりにさとく巧なるハ、かしこき人の、此藝にれろかなるを見て、おのれが智に及ばずと定めて、よろづの道のたくみ、我道を、人の知らざるを見て、おのれすぐれたりと思はん事、大なるあやまりなるべし。

文字の法師云々文字法師は教相を習ひて座禪を知らぬなり暗證禪師は座禪工夫を專として教相に暗きなり

達人明達の人をいふ

たとへは或人の云々是より人にさまゝの性來ありてそれゝに顏にも詞にも見ゆる事をいへり

すなはにい正直になり

何としも思はで云々馬耳東風と聞ながすをいふ

おぼつかなく覺にて何となく僞らしく不審に思ひての意なり

推し出して云々僞をいふよと推し出しあはれ我智をはかるならんと思ひながらとなり

文字の法師、暗證の禪師、たがひにはかりて、れのれにまかずと思へる、ともにあたらず。れのれが境界にあらざるものをべ、爭ふべからず。是非すべからず。

(百九十四)達人の、人を見る眼い、少しも誤る所有るべからず。たとへば、或人の、よに虛言を搆へ出して、人をはかる事あらんに、ずなほにまことゝ思ひて、いふまゝにはからるゝ人有り。あまりに深く信をおこして、猶煩しく、虛言を心得そふる人あり。又何としも思はで、心をつけぬ人有り。又いさゝかおぼつかなく覺にて、賴むにあらず、賴まずもあらで、案じゐたる人有り。又誠しくい覺にねども、人のいふ事なれば、さもあらんとて、やみぬる人も有り。又さまゝに、推し心得たるよししてかしこげにうちうなづき、ほゝゑみて居たれど、つやゝ

心得たれども僞といふ事を知りてい有れどもとなり

おはつかなからぬい云々我智をはかるそと知て不審なさからは知らぬ人と同じく過るもありと也

愚者の中のたはぶれ云々虛言を搆へて人をはかるなどかく愚者の戲事にても其はかる手段を知れる人の前にてい さまゝ人の生れ得たる本性いよく知られんとの意なり

掌の上の物を云々中庸に其如示諸掌乎註に言易見也とあり

佛法までを云々佛の慈悲方便をもたゝかくの如く虛言にて人をはかるわざそと思ふべからずとの意なり

知らぬ人有り。又推し出して、あはれさるめりと思ひながら、猶あやまりもこそあれと、あやしむ人あり。又異なるやうもなかりけりと、手をうつて笑ふ人有り。又心得たれども、知れりともいはず、おぼつかからぬい、とかくの事なく、知らぬ人と、同じやうにて過る人あり。又この虛言のほいを、はじめより心得て、すこしもあざむかず、搆へ出したる人と、おなじ心になりて、力を合する人あり。愚者の中のたはぶれだに、知りたる人の前にてい、此さまゝの得たる所、詞にても顏にても、かくれなく知られぬべし。まして明かならん人の、惑へる我等を見ん事、掌の上の物を見んが如し。たゞしかやうの推量りにて、佛法までを、准へいふべきにいあらず。

(百九十五)或人、久我なはてを通りけるに、小袖に、大口着たる

久我なはて山城鳥羽の西桂河の邊なり
大口は大口袴なり又表袴ともいふ
久我内大臣殿從一位内大臣通基公堂宿と號す
尋常におはしける時云々此詞にて見れば狂氣しゐたまへるなるべし
東大寺聖武天皇の建立にて奈良七大寺の一也
神輿東大寺の鎮守八幡大菩薩の神輿なり
東寺の若宮是東寺の鎮守八幡宮也東大寺の神輿を内裏にふる時其間東寺におくを東大寺に歸し納むる時なり
源氏の公卿云々八幡は源氏の氏神なればなり此殿久我通基公なり
さきをおはれ前驅の警蹕せしなり
土御門相國從一位太政大臣定實公久我の庶流なり

人、木作の地藏を、田の中の水にひたして、懇にあらひけり。心得がたく見るほどに、狩衣の男、二三人出で來て、こゝにおはしましけりとて、此人を具していにけり。久我内大殿にてぞおはしける。尋常にはおはしましける時ハ、神妙にやんごとなき人にておはしけり。

(百九十六)東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿參られけるに、此殿大將にて、さきをおはれけるを、土御門相國、社頭にて、警蹕いかゞ侍るべからんと、申されければ、隨身のふるまひハ、兵仗の家が知る事に候ふとばかり、答へ給ひけり。さて後に仰せられけるハ、此相國、北山抄をみて、西宮の說をこそ知られざりけれ。眷屬の惡鬼惡神を恐るゝゆゑに、神社にて、殊にさきをおふべき理ありとぞ、仰せられける。

兵仗の家云々大將は武官のつかさなれば兵仗の家といへるなり
北山抄大納言藤原公任卿の記なり
西宮記左大臣源高明公の記錄なり
定額員數を定むると云女官内侍藏司書司などの女官の下にある召使なり古くは諸國に定額寺ありて其寺々の僧も定れる員數ありしに女官も定額ありとなり
延喜式延長年中藤原忠平等撰五十卷あり
揚名介名のみにて任に下らざるをいふさてそは介のみに限らず目にもある事なりとあり
政事要畧惟宗允亮撰百三十卷あり
行宣法印鳥山天皇の頃の僧なり
呂律は陰にて柔なる聲律は陽にてたちてこはき聲なり

(百九十七)諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふ事、延喜式に見にたり。すべて數さだまりたる、公人の通號にこそ。

(百九十八)揚名介にかぎらず、揚名目といふものもあり。政事要畧にあり。

(百九十九)横川の行宣法印が申し侍りしハ、唐土は呂の國なり。律の音なし。和國は單律の國にて、呂の音なしと申しき。

(二百)吳竹ハ葉細く、漢竹は葉ひろく、御溝に近きハ漢竹、仁壽殿の方によりて、うゑられたるハ吳竹なり。

(二百一)退凡下乘の卒都婆、外なるは下乘、内なるハ退凡なり。

(二百二)十月を神無月といひて、神事にはゞかるべきよしハ、記したるものなし。本文も見えず。たゞし當月、諸社の祭なきゆゑに、此名あるか。此月、萬の神たち、太神宮へあつまり給ふな

退凡下乘ハ退凡は凡人を退くるをいひ下乘は車馬より下りしむるを云下乘は山下にあり退凡は山中に有故に内也本文正しき本文をいふ

十月諸社ハ行幸寛和に花山の松尾に寛弘に一條院の北野に延久に後三條院の日吉に行幸あり し類にて花山院は翌年御落飾後三條院は又の年崩御なり し等を不吉の例と云るなるべし

勅勘天皇の御勘當を云勅矢籠にて平胡籙の類なり

五條天神少彦名命を祀る此神は醫藥の事を知り給ふ神なればなり

看督長検非違使廳の被官なり

人出入らず聰川幕府の時將軍の勅氣をうけたる人の門をさゝせて閉門いふに似たり

どいふ説あれども、その本説なし。さる事ならば、伊勢にハ、殊に祭月とすべきに、其例もなし。十月諸社の行幸、其例も多し。たゞし多くは不吉の例なり。

(二百三)勅勘の所に、鞦かくる作法、今ハたえて知れる人なし。主上の御惱、大かた世の中の騒がしき時は、五條の天神に、鞦をかけらる。鞍馬に鞦の明神といふも、鞦かけられたりける神なり。看督長の貧ひたる鞦を、其家にかけられぬれば、人出入らず。此事たえて後、今の世には、封をつくる事になりけり。

(二百四)犯人を、もとにて打つ時は、拷器によせて、結ひ付るなり。拷器の樣も、よする作法も、今は辨へ知れる人なしとぞ。

(二百五)比叡山に、大師勸請の起證といふ事ハ、慈惠僧正書き始め給ひけるなり。起證文といふ事、法曹にハ、そのさだなし。

もと笞にて罪人をうつ杖なり

大師勸請ノ起證一紙の上に佛神を勸請して書く起請文にてなかいふは慈惠大師の始めたる故なりとなり

法曹明法家をいふ律令を習ひ知りて沙汰し行ふ家なり

水火に云々神事に火を忌むことなどあるは水火にけがれあるに非ずそれを入るゝ器物の穢あるなりとなり

檢大寺右大臣殿太政大臣實基公の息太政大臣公孝公なり

大理檢非違使別當の唐名なり前に注せり

はまゆか倚子などのやうにて高欄つきたるもあり

にれ打かみて和名抄に嚙呑舐噬反出而噛牛曰齧和名倚禮加無とあり

いにしへの聖代、すべて起證文につきて、行はるゝ政事ハなきを、近代此事流布したるなり。又法令にハ、水火にけがれをたてず。入物にハけがれ有る可し。

(二百六)德大寺右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて使廳の評定行はれけるほどに、官人章兼が牛、放れて廳のうちへ入りて、大理の座の、はまゆかの上にのぼりて、にれ打かみて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへ遣すべきよし、れの〳〵申しけるを、父の相國聞き給ひて、牛に分別なし。足あれば、いづくへか上らざらん。尪弱の官人、たま〳〵出仕の微牛を、とらるべきやうなしとて、牛をば主に返して、臥したりける牛をば、更へられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。怪を見て怪まざる時ハ、怪かへりて破ぶるといへり。

怪を見て云々千金方に黄帝雜忌兒云見怪不怪其怪自壞とあり

龜山殿前に注せり弘長百首に龜のをの山の岩根の宮造うごきなき世のためしなるらんとあり

此地をあらためたる此所を占領してをるの意也

此おとゝ前段の寶荘公をいふ

王土にをらん虫云々草も木も我おほきみの國なればいづくか鬼のすみかなるべきといへる歌もあり

弘舜僧正傳詳ならず和論語に弘舜字多源氏也道樂兼才人也號華嚴院僧正とのみあり

(二百七)龜山殿建てられんとて、地をひかれけるに、大きなるくちなは、數も知らず、凝り集りたる塚ありけり。此所の神なりといひて、事のよしを申しければ、いかゞ有るべきと勅問ありけるに、古くより、此地をあらためたる物ならば、さうなく掘り捨てられがたしと、みな人申されけるに、此れとゞ一人、王土に居らん虫、皇居を建てられんに、何の祟をか爲すべき。鬼神へ邪なし。咎むべからず。只みな掘り捨つべしと、申されたりければ、塚をくづして、蛇をば、大井川に流してけり。更に祟なかりけり。

(二百八)經文などの紐をゆふに、上下よりたすきにちがへて、二筋の中より、わなの頭を、横ざまに引出す事へ、常の事なり。さやうにしたるをば、華嚴院弘舜僧正、解きてなほさせけり。是へ此頃やうの事なり。いとにくし。うるはしくへ、唯くるくると巻きて、上より下へ、わなの先を、さし挾むべしと申されけり。古き人にて、かやうの事知れる人になん侍りける。

(二百九)人の田を論ずるもの、うたへに負けて、妬さに、その田を苅りてとれとて、人を遣しけるに、まづ道すがらの田をさへ、苅りもてゆくを、これへ論じ給ふ所にあらず、いかにかくへといひければ、苅る者ども、其所とても、苅るべきことわりなければ、ひが事せんとてまかるものなれば、いづくをか苅らざらんとぞいひける。ことわりいとをかしかりけり。

(二百十)よぶこ鳥へ、春のものなりとばかりいひて、いかなる鳥とも、さだかに記せるものなし。ある眞言書の中に、呼子鳥鳴く時、招魂の法をば行ふ次第有り。是へ鵺なり。萬葉集の長

古き人にて弘舜をいふ

田を論ずる田地の爭論をずるなり

うたへに負けて訟にて訴訟に負けたる也

いかにかくへ刈りつるぞといふ意を添て心得べし

其所とても云々論に負けたる田も人の田なればとても曲事をするなれば道すがらの田をも苅るなりとなり

呼子鳥古今の三鳥とて諸說一決し難き故に兼好も一說をかきのせたるなり

鵺和名抄に鵺怪鳥也和名沼江とあり

萬葉集二十卷あり奈良朝頃の歌の集なり

霞たつ云々萬葉集一ふ霞立つ長き春日の晩にけるわつきも知らず村肝の心を痛みぬばこ鳥うらなきをれば云々とあるをいふ

怨み怒る事あり頼みてかひなき故怨み怒るなり

終ありとて云々以下頼むべからざる事を一々に挙げたり

孔子も云々史記儒林傳に孔子子七十餘君無所遇なさあり

顔回も云々論語に顔回不幸短命而死とあり

左右廣ければ云々是より心の用ひざまを説くなり

歌に、霞たつ長き春日のなどつゞけたり。鶺鳥も、喚子鳥のことざまに通ひて聞ゆ。

(二百十一)萬の事ハ頼むべからず。愚なる人ハ、深く物を頼むゆゑに、怨み怒る事あり。いきほひありとて頼むべからず。こはきものまゞ亡ぶ。財多しとて頼むべからず。時の間に失ひやすし。才ありとて頼むべからず。孔子も時に遇はず。徳ありとて頼むべからず。顔回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず。誅を受くる事すみやかなり。奴從へりとて頼むべからず。背きはしる事あり。人のこゝろざしをも頼むべからず。信有る事すくなし。身をも人をも頼まざれば、是なる時ハよろこび、非なる時ハうらみず。左右廣ければ障らず。前後遠ければ塞がらず。狹き時ハひしげくだく。心を用ふる事、すこしきにしてきびし

一毛も損せず少しも心を損耗せずとの意なり

人は天地の靈物父母惟人萬物之靈とあり

秋の月ハ云々此段時節の相應を感ずべき事をいへり

御前の火燼天子の御前の火鉢なり火燼ハ和名抄に比多岐とあり

八幡の御幸いゴれの御時の御幸にや詳ならず淨衣白張の裝束をいふ

きときハ、物に逆ひ爭ひて破る。緩くして柔なる時ハ、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地ハかぎるところなし。人の性なんぞ異ならん。寛大にして、きはまらざる時ハ、喜怒是にさはらずして。物の爲に煩はず。

(二百十二)秋の月ハ、限なくめでたきものなり。いつとても、月ハかくこそあれとて、思ひわかざらん人ハ、無下に心うかるべき事なり。

(二百十三)御前の火燼に、火を置く時ハ、火箸して挾む事なし。かはらけより、たゞちに移すべし。さればころびおちぬやうに心得て、炭をつむべきなり。八幡の御幸に、供奉の人、淨衣を着て、手にて炭をさゝれければ、ある有識の人、白き物をきたる日ハ、火箸を用ふる、苦しからずと申されけり。

想夫戀樂の名にて白氏文集祖府等に相夫憐とあるを平家物語盛衰記等に憐を戀に作れり

晉の王儉字は仲寶齊に仕へて尚書令と爲れり

廻忽勾奴にて唐の德宗の時請ひ改めて回鶻と號せりこゝは樂の名也

平の宣時北條五郎時忠後に宣時大佛陸奥守と號す

最明寺入道執權北條時頼なり

やかでと申しながら即刻參上せんと使に返事をしながらの意なり

直垂などの云々最明寺殿よりの詞なり

なゐたる者なれて委れたるさまなり

たうべんはたべんにて酒を飲む事なり

(二百十四)想夫戀といふ樂は、女男を戀ふるゆゑの名にはあらず。もとは相府蓮、文字の通へるなり。晉の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて、愛せし時の樂なり。是より大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とて、にびすのことはき國あり。その夷、漢に伏して、後に來りて、おのれが國の樂を奏せしなり。

(二百十五)平の宣時朝臣、老の後昔語に、最明寺入道、ある霄の間に、よばるゝ事ありしに、やがてと申しながら、直垂のなくて、とかくせしほどに、又つかひ來りて、直垂などのさぶらはぬにや、夜なれば、ことやうなりとも、疾くとありしかば、なにたる直垂、うちくのまゝにてまかりたりしに、銚子に、かはらけとり添へて、もて出て、此酒をひとりたうべんが、さうぐしければ申しつるなり、肴こそなけれ、人は志づまりぬらん、さ

味噌和名抄に未醬とかけり

其世には云々最明寺殿の時代にはかくの如くに儉約にありきと也

年々の餅にのみ耽りゆく今の世の誠にいとよきふる事といふべし

鶴岡相模國鎌倉八幡宮なり

足利左馬入道源義氏法名正義法樂寺と號すあるじまうけられ饗應せられたるなり

うちあはび鯉斗鮑なりかい餅俗に菱の花といふものなり

亭主夫婦昔は君を馳走に妻女も出つかへし也

隆辨僧正鶴岡別當なり年毎に給はる云々最明寺殿の詞なり

心もとなく候ふ今年給はるべくや用意の程おぼつかなしと也かく重

りぬべき物やあると、いづくまでも求め給へと有しかば、紙燭さして、くまぐを求めしほどに、臺所の棚に、こがはらけに、味噌のすこしつきたるを見出て、是ぞ求めにられさぶらふと申しゝかば、事たりなんとて、心よく數献に及びて、興に入られ侍りき。其世には、かくこそ侍しかと申されき。

(二百十六)最明寺入道、鶴岡の社參のついでに、足利左馬入道のもとへ、まづ使をつかはして、立入られたりけるに、あるじまうけられたりけるやう、一献にうちあはび、二献に海老、三献にかい餅にてやみぬ。その座には、亭主夫婦、隆辨僧正、あるじ方の人にて座せられけり。さて年毎に給はる足利の染物、心もとなく候ふと申されければ、用意しさぶらふとて、色々の染物、御前にて女房どもに、小袖にてうぜさせて、後につかはさ

々しからぬ挨拶も倹約の故なり

用意し候ふ左馬入道の詞なり

大福長者富饒の人なり名義集に長者西士之豪族也富商大賈積財鉅万蔵鞬長者とありこは唯富める人をいへり

すべからくまづまづかやうにすべきぞとの意にて後にそのすべき事をいへるなり

人間常住の思に住して人間は死なざる物と思ひつめてとの意なり

このあたりの論ずる方にことわりありていとをかし

所願心にきざす事あらば云々こゝにあまりなるをしへといふべし

れけり。其時見たる人の、近くまで侍りしが、語り侍りしなり。

(二百十七)ある大福長者のいはく、人ハ萬をさしおきて、ひたぶるに徳をつくべきなり。貧しくてハ、生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳をつかんと思はゞ、すべからくまづ、其心づかひを修行すべし。其心といふハ、他の事にあらず。人間常住の思ひに住して、假にも無常を觀ずる事なかれ。是第一の用心なり。つぎに萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて、所願無量なり。欲に隨つて、こゝろざしを遂げんと思はゞ、百萬の錢ありといふとも、まばらくも住すべからず。所願ハ止む時なし。財ハつくる期あり。限ある財をもちて、限なき願に從ふ事得べからず。所願心にきざす事あらば、我を滅すべき惡念來れりと、固く慎みおそれて、小用をもなすべから

君の如く神の如く晉の魯褒錢神論にもかゝる事見えたり

火の燥けるに就き云々易乾卦に水流濕火就燥雲從龍風從虎また孟子に猶水之就下也とあり

宴飲聲色長恨歌傳に玄宗淫耽遊宴以聲色自娛とあり酒宴音樂女色をいふ

安く樂しと申しさ此まで大福長者の詞なり

抑人は云々是より雜好の論なり

所願まれども云々後漢の馬伏波が守錢奴といへる類にて浮屠氏ハこれを有財餓鬼といへり

ず。次に錢を奴の如くして、遣ひ用ふるものと知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く、神の如く、恐れたふとび從へ用ふる事かなれ。次に耻にのぞむといふとも、怒り恨むる事なかれ。次に正直にして、約を堅くすべし。此義をまもりて利を求めん人ハ、富の來る事、火の燥けるにつき、水の下れるにまたがふ如くなるべし。錢つもりてつきざる時ハ、宴飲聲色を事とせず、居所を飾らず、所願をなさゞれども、心とこしなへに安く樂しと申しき。抑人ハ所願を成せんが爲に、たからを求む。錢をたからとする事ハ、願をかなふるがゆゑなり。所願あれどもかなへず、錢あれども用ひざらんハ、まつたく貧者と同じ。何をかたのしびとせん。此れきてハ、たゞ人間の望をたちて、貧をうれふべからずと聞こたり。欲をなしてたのしびとせんよ

癰疽を病む者云々醫學品頭疏に誰有智者澁水洗癰有少樂生執離爲樂とありこの腫物熱氣甚しき故冷なる水を以て洗へは暫時こゝろよく思ふなり

究竟は理卽にひとし天台家に六卽より理卽名字卽觀行卽相似卽分身卽究竟卽を云理卽は佛法の名字をも知らぬ凡夫地獄下の凡夫乃至畜類まで只皆佛性あるものをいひ究竟卽は妙覺の位如來地をいふ

堀河院久我の一門太政大臣基具公堀河と號す本寺の前本堂の前をいふ或は本寺野とて仁和寺の北の方にある野ともいへり

四條黃門其名詳ならず命ぜられては兼好に卽せられたるたり

龍秋樂人豐原龍秋なり短慮のいたり云々謙退

りハ、若かじ財なからんにハ、癰疽をやむ者、水にあらひて樂とせんよりハ、やまざらんにハ若かじ。こゝに至りてハ、貧富わく所なし。究竟は理卽にひとし、大欲は無欲に似たり。

(二百十八)狐ハ人に喰ひつくものなり。堀川殿にて、舍人がねたる足を、狐にくはる。仁和寺にて、夜本寺の前をとほる下法師に、狐みつとびかゝりて喰ひ付きければ、刀をぬきて是を拒ぐ間、狐二疋をつく。ひとつハつき殺しぬ。二つハにげぬ。法師ハあまた所喰はれながら、ことゆゑなかりけり。

(二百十九)四條黃門命ぜられていはく、龍秋ハ、道にとりてハ、やんごとなき者なり。先日來りていはく、短慮のいたり、きはめて荒涼の事なれども、横笛の五の穴ハ、いさゝかいぶかしき所の侍るかと、ひそかに是を存ず。其ゆゑハ、干の穴ハ平調、五の穴ハ下無調なり。其間に勝絶調をへだてたり。上の穴雙調、つぎに鳧鍾調を置きて、夕の穴黃鍾調なり。其次に鸞鏡調をおきて、中の穴盤涉調、中と六とのあはひに神仙調あり。かやうに間々に、みな一律をぬすめるに、五の穴のみ、上の間に調子をもたずして、まかも間をくばる事均しきゆゑに、其聲不快なり。されば此穴を吹く時ハ、かならず除く。のけあへぬ時ハ、物にあはず。吹きうる人難しと申しき。料簡のいたり、まことに興あり。先達後世を恐るといふこと、此事なりと侍りき。他日に景茂が申し侍りしハ、笙ハ調べおほせてもちたれば、たゞ吹くばかりなり。笛ハ吹きながら、息のうちにて、かつ調べもてゆくものなれば、穴毎に口傳の上に、性骨を加へて、心を入るゝ事、五の穴のみにかぎらず。ひとへにのくとばかりも定むべから

の制にてこれより龍秋がいふ詞也

干の穴云々横笛の穴の名にて二目を干三目を五四目を上五目を夕六目を中七目を六といふなり

一律律とハ調子の事也

かならず除くハ口を除くろ意なり吹きざまに口をとり直すをいふなるべし

先達後世を恐る論語に子曰後生可畏焉知來者之不如今也とあり

と侍りきこれまで黃門の卽せられたる詞なり景茂これも笛吹地下の樂人にて大神氏なり

笙は云々笙は管多けれども一つ〳〵よく調子を合せおけば吹くにハさのみ子細なしとなり

性骨を加へて吹き方に

口傳ある上に天性其骨を具せざるべからずとの意なり
呂律に云々調子の物に合はぬ其吹人の拙さ咎にて樂器の難にあらずとなり
天王寺攝津國にあり推古天皇の朝聖德太子建立す四天の像を安置する故に四天王寺と稱すといへはい兼好の伶人にいひたるなり
伶人菩盲故事に樂人曰伶人註に黃帝之世伶倫造音樂故稱伶人官と有太子聖德太子をいふ博士とす師範定規とする意なり
六時堂天王寺にあり昆朝日中日沒初夜中夜後夜の六時の行を務むる所なり
黃鐘調黃鐘は律の本にて中央の調子也
涅槃會二月十五日釋迦寂滅の日なり

ず。あしく吹けば、いづれの穴も心よからず。上手ハいづれをもふきあはす。呂律の物にかなはざるは、人の咎なり。器の失にあらずと申しき。

(二百廿)何事も、邊土ハいやしくかたくななれども、天王寺の舞樂のみ、都に耻ぢずといへば、天王寺の伶人の申し侍りしハ、當寺の樂ハ、よく圖を調べあはせて、物のねのめでたくとゝのほり侍る事、外よりも優れたるゆゑハ、太子の御時の圖、今に侍るを博士とす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。この聲黃鐘調のもなかなり。寒暑にまたがひて、あがりさがり有るべきゆゑに、二月の涅槃會より、聖靈會までの中間を指南とす。秘藏のことなり。此一調子をもちて、いづれの聲をも、とゝのへ侍るなりと申しき。およそ鐘の聲ハ黃鐘調なるべし。是無常の調子、祇

聖靈會二月廿一日太子の忌日にて天王寺に法事を行ふ
無常の調子平家物語に祇園精舍の鐘の聲諸行無常の響ありとあり
祇園精舍は天竺にて釋迦の說法せし寺なり
無常院西城傳に祇桓西北角日光沒所爲無常院とあり祇桓は祇園なり
西園寺太政大臣公經公の家なり
法金剛院拾芥抄に本名天安寺待賢門院御建立也とあり嵯峨の椎野にあり法の字淨に作れる本あり
建治弘安後宇多天皇の年號なり
放免檢非違使廳の雜役をつとむる者をいふつけ物の事北邊密筆に委し且圖をも出したればそを見るべし
とうじみ燈心なり
水干衣服の名なり

園精舍の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黃鍾調に鑄らるべしとて、あまたたび鑄かへられけれども、かなはざりけるを、遠國より尋ね出されけり。法金剛院の鐘の聲、又黃鍾調なり。

(二百廿一)建治弘安の比は、祭の日の放免のつけ物に、異樣なる紺の布四五端にて、馬をつくりて、尾髮にハ、とうじみをして、蛛のいかきたる水干につけて、歌の心などいひて渡りしと、常に見及び侍りしかども、興ありてしたる心地にてこそ侍りしかと、老たる道志どもの、今日も語り侍るなり。此頃は、つけ物年を逐うて、過差ことの外になりて、萬のれもき物を、多くつけて、左右の袖を人に持せて、みづからは鉾をだに持たず、息づき苦しむ有さま、いと見ぐるし。

(二百廿二)竹谷乘願房、東二條院へ參られたりけるに、亡者の

歌の心など云ふ古歌に
蜘のいに荒れたる駒の繋くとも二道かくる人の頼まじとあり
道志明法道の聖六位の時藤門志に任じて法橋の諸公事を奉行するものをいひてこゝの祭の下奉行するものをいふ
竹谷乘願房竹谷は醍醐にあり乘願房の浄土宗の名匠なり
東二條院後深草院の皇后なり
勝利多きすぐれたる利益の何事か多きと也
光明眞言寶篋印陀羅尼共に經文の名にして此眞言神咒を乞者亡魂に廻向すれば忽極樂浄土に生じて一切種智を證し位補處に至るとそ
稱名彌陀念佛の事なり
たづのおほいどの後京極攝政良經公の三男九條前内府基家公邸殿と號す又砂金大臣殿と號す

追善にハ、何事か勝利多きと、尋ねさせ給ひければ、光明眞言寶篋印陀羅尼と申されたりけるを、弟子ども、いかにかくハ申し給ひけるぞ、念佛に優る事さぶらふまじとハ、など申し給はぬぞと申しければ、我宗なれば、さこそ申さまほしかりつれども、まさしく稱名を追福に修して、巨益あるべしとかける經文を見及ばねば、何に見にたるぞと、重ねて問はせ給はゞ、いかゞ申さんと思ひて、本經の慥なるにつきて、此眞言陀羅尼を申しつるなりとぞ申されける。

(二百廿三)たづのおほいどのハ、童名たづ君なり。鶴を飼ひ給ひける故にと申すハ、ひが事なり。

(二百廿四)陰陽師有宗入道、鎌倉より上りて、尋ねまうで來りしが、まづさし入りて、此庭のいたづらにひろき事、淺ましく、

す
陰陽師有宗入道陰陽頭正三位安倍有宗にて兼好が許へ尋ね來りし也
うゝる事をつとむ論語に再穆朝樣而有天下また中庸に人道敏政地道敏樹ともあり
多久資伶人にて多ハ氏なり
通憲入道少納言藤原通憲入道して信西と號す
磯の禪師源義經の妾靜前の母なり
さうまき繒巻なり
引入れたり烏帽子を着る事なり
白拍子の根元盛衰記平家物語等にハ島の千歳若の前を其始といへり
佛神の本縁ハ神佛の本事緣起をいふ
源光行後鳥羽院の北面河内守大藏少輔光行なり
章兆後鳥羽院御願寺の

有るべからぬ事なり。道を知るものハ、植うることをつとむ。細道一つ殘して、みな畠につくり給へといさめ侍りき。まことにすこしの地をも、いたづらにれかん事は、益なきことなり。食物藥種などを植ゑおくべし。

(二百廿五)多久資が申しけるハ、通憲入道ハ舞の手の中に、興ある事どもを撰ひて、磯の禪師といひける女に、教へて舞はせけり。白き水干に、さうまきをさゝせ、烏帽子を引入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師がむすめ靜といひける、此藝を繼けり。是白拍子の根元なり。佛神の本縁をうたふ。其後源光行、多くの事を作れり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊に教へさせ給ひけるとぞ。

(二百廿六)後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古のほまれ有り

舞女なり
信濃前司行長傳記詳なりす
稽古のほまれよ〳〵古事を知れるよしの樣也
樂府の御論義白氏文集新樂府にて其樂府の中の不審を問答するを論義といふさて番とは學者をかたわけて番を定めて論義せしむるなり
七德の舞文集の新樂府の首にある舞の名にて初は破陣樂の舞といひしを後に改めたり
五德冠者冠者とハ元服せし若き人をいふ名なり
山門叡山の事にて延暦寺をいふ
九郎判官蒲冠者義經範頼にて誰も知れり
六時禮讃晝夜の六時に念佛を勸めて淨土を禮讃し罪障を消滅するわざをいふ

けるが、樂府の御論義の番に召されて、七德の舞を、二つ忘れたりければ、五德冠者と異名をつけにけるを、心うき事にして、學問を捨てゝ遁世したりけるを、慈鎭和尚、一藝あるものをば、下部までもめしおきて、不便にせさせ給ひければ、此信濃入道を扶持し給ひけり。此行長入道、平家物語を作りて、生佛といひける盲目に、教へてかたらせけり。さて山門の事を、殊にゆゝしくかけり。九郎判官の事ハ、くはしく知りて書き載せたり。蒲冠者の事は、よく知らざりけるにや、多くの事どもを記し漏せり。武士の事、弓馬のわざは、生佛東國のものにて、武士に問ひ聞きてかゝせけり。かの生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師ハ學びたるなり。

(二百廿七)六時禮讃は、法然上人の弟子、安樂といひける僧、經

太秦山城廣隆寺又太秦寺ともいふなり
ふしはかせ聲をさして其節の指南とする事也
聖明印度にては五明の第一とし支那にては梵唄といふ
法事讃上下二卷あり善導の作にて善觀房ハふしはかせつけたる也
千本の釋迦念佛千本の釋迦堂にて二月九日より十五日まで遺教經の後釋迦の名號を稱るなり
文永亀山天皇の年號也
如輪上人傳記詳ならず妙觀ハ亀嶮年中の佛師なり
いたくたゝずハ刀の目の深からぬをいふ
五條の內裏後醍醐天皇の時皇居なりしとも又後白河天皇の法住寺殿なりともいへり
藤大納言誰とも勘ふべからず

文をあつめて作りてつとめにしけり。其後太秦の善觀房といふ僧、ふしはかせを定めて、聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代より始れり。法事讃も、同じ善歡房始めたるなり。

(二百廿八)千本の釋迦念佛は、文永の頃、如輪上人はじめられけり。

(二百廿九)よき細工は、少しにぶき刀ハいたくたゝず。

(二百卅)五條の內裏にハ、ばけものありけり。藤大納言語られ侍りしハ、殿上人ども、黑戸にて碁をうちけるに、みすをかゝげて見るものあり。誰そと見むきたれば、狐、人のやうについゐて、さしのぞきたるを、あれきつねよとどよまれて、まどひ逃

未練の狐功のいちぬ狐とのなり

園の別當入道參議検非違使別當藤原基氏卿入道して法名圓空と號す。庖丁者丁氏といふものよく庖厨の事を知りて割烹せる故に庖丁といふなり

打出んは言ひ出さんも如何と所望しかねたるなり

百日の鯉物の稀古に百日行する類なるべし

北山太政入道い太政大臣西園寺公經公にて前に出てたり

大かた云々是より雅好の評言にてなべての事につきて巧に興あるより相く誠あるかよしとの意なり

げにけり。未練の狐化けそんじけるにこそ。

(二百卅一)園の別當入道は、さうなき庖丁者なり。ある人のもとにて、いみじき鯉を出したれば、皆人、別當入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすく打出でんもいかゞと、ためらひけるを、別當入道さる人にて、此ほど百日の鯉をきり侍るを、今日かき侍るべきにあらず、まげて申しうけんとてきられける、いみじくつきゞしく興ありて、人ども思へりけると、ある人北山太政入道殿に語り申されたりければ、かやうの事、おのれいよいようるさく覺ゆるなり、きりぬべき人なくい、たべ、きらんといひたらんい、猶よかりなん、なんでふ百日の鯉をきらんそとのたまひたりし、をかしく覺にしと、人の語り給ひける、いとをかし。大かたふるまひて興あるよりも、興なくてやすらかな

まれ人い客人なり

ついでをかしきやうに云々首尾をつゞろひて面白きやうになすなり

勝負のまげわざ人にやるべき物を恭敬供等の堪物にして負けて遣るやうにする事なり

史書の文い史記漢書等の類をいふなり

尊者の前にては云々小學に長者不及不議言註に議羅之言也ともありこれも年若き者のさし出がましきふるまひあるを誡めたるなり

物語平家物語なるべし

ひさゞく和名抄に杓和名比佐古斟水器也とあり俗に柄杓と書くい誤なりさて古杓の柄あちゞけつり用ひんと也

るが、優りたる事なり。まれ人の饗應なども、ついでをかしきやうに取なしたるも、誠によけれども、たゞ其事となくて、取出たるいとよし。人に物をとらせたるも、ついでなくて、これ奉らんといひたる、誠の志なり。惜むよしゝて請はれんと思ひ、勝負のまけわざに、ことつけなどしたるむつかし。

(二百卅二)すべて人い、無智無能なるべきものなり。ある人の子の、見ざまなどあしからぬが、父の前にて、人と物いふとて、史書の文を引きたりし、さかしくい聞えしかども、尊者の前にていい、さらずともと覺にしなり。又ある人のもとにて、琵琶法師の物語を聞かんとて、琵琶を召しよせたるに、ぢうの一つ落ちたりしかば、作りてつけよといふに、ある男の中に、あしからずと見ゆるが、古きひさゞくの柄ありやなどいふを見れば、爪

爪生したり中園殿の祝に尊の翠に蘇香の樂を免許されし人は大指食指中指の三つの爪を生すといへり琵琶もさる事のあるなるべし

盲法師の琵琶云々座頭の琵琶などハ音樂の儀と同列に沙汰すべき事にもあらずとの意也

ひもの木ハ檜物木にて檜物師のつかふ白木といふものなり。

人をわかず云々貴賤老少の差別なくなべて敬ひてとの意なり

なれたるさまに云々我こそと上手めかしき樣をしてあてやりたりといふやうに傍若無人にふるまふがあしとなり

知らずしもあらじと問ふ人の必知らで問ふにもあるまじとこなたに推するなり

を生したり。琵琶などひくにこそ。盲法師の琵琶、其さたにも及ばぬ事なり。道に心得たるよしにやと、かたはらいたかりき。ひさくの柄ハ、ひもの木とかやいひて、よからぬ物にとぞ、ある人仰せられし。若き人ハ、すこしの事も、よく見ヒ、わろく見ゆるなり。

(百卅三)万の咎あらじと思はゞ、何事にもまことありて、人をわかず、うやうやしく詞少からんにハ若かじ。男女老少皆さる人こそよけれども、殊に若くかたちよき人の、ことうるはしきハ、恐れ難く思ひつかるゝものなり。よろづのとがハ、なれたるさまに、上手めき、所にたるけしきして、人をないがしろにするにあり。

(二百卅四)人の物を問ひたるに、知らずしもあらじ、有のまゝ

有のまゝに云々さるを問ふまゝに有体にいはんもをこがましと答ふる人の心なり

猶さだかにと思ひていたとひ知たる事なりとも猶慥に聞かまほしとて問ふ事ありさなり

うちゝかに云々何となくのとかに耳だゝぬやうにいひなすべしとの意なり

浅ましさなどはかりハ浅ましき故をいひやらざるなり

すゞろなる人ハみだりなる人にて用もなく來ましき人などなり

にいはんハ、をこがましとにや、心まどはすやうにかへりごとしたる、よからぬ事なり。知りたる事も、猶さだかにと思ひてやとふらん。又まことに知らぬ人も、などかなからん。うちゝかに言ひ聞せたらんハ、おとなしく聞ヒなまし。人ハいまだ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまゝに、さても其人の事の浅ましさなどばかり言ひ遣りたれば、いかなる事のあるにかと、おしかへし問ひにやるこそ、心づきなけれ。世にふりぬることをも、おのづから聞漏すあたりもあれば、ねぼつかならぬやうに告げやりたらん、あしかるべき事かは。かやうの事ハ、物なれぬ人の有る事なり。

(二百卅五)主ある家にハ、すゞろなる人、心のまゝに入來る事なし。あるじなき所にハ、道行く人みだりに立入り、狐梟やうの

人げにせかれねはい人氣疎くして入りやすけれバなり

こだま木魅岡象など木石の怪にてこれらもばけ物の類なるへし

鏡にハ云々七玉集に行家卿何かそれ移らぬ影そなかりける心や登める鏡なるらん性理大全潛室嘿氏曰人心如鏡物來則應物去依舊自在云々さあり

念々の云々情欲の念々常に來りて浮ぶハ心とさしていふべき主人なき故にやとなり

丹波に出雲丹波國桑田郡亀山の北にあり大社は杵築神社にてそを隱し祀りしなり

志太聖海上人共に傳記詳ならす

いさ給へいさ來給へと誘ふ詞なり

物も人げにせかれねば、所にがほに入住み、こだまなどいふけしからぬかたちも、あらはるゝ物なり。又鏡にハ、色形なきゆゑに、よろづの影來りてうつる。鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虛空よく物を容る。我らが心に、念々のほしきまゝに來り浮ぶも、心といふものゝなきにやあらん。心にぬしあらましかば、胸の中に、そこばくの事ハ入來らざらまし。

(二百卅六)丹波に出雲といふ所あり。大社を遷してめでたく作れり。志太の何がしとかや知る所なれば、秋の頃、聖海上人、其外も人あまたさそひて、いざ給へ、出雲をがみに、かいもちひめさせんとて、具しもていきたるに、各拜みて、ゆゝしく信起したり。御前なる獅子狛犬背きてうしろざまに立たりければ、上人いみじく感じて、あなめでたや、此獅子の立ちやう、いとめ

獅子狛犬是神社に限らず禁中にもありてすべて鬼魅をさゝる爲におくものなり

都のつとに京のみやげにとの意なり

ならひある事かやうに背向に立ることは習の故實ある事ならんと神官に問ふ詞なり

さかなき産の惡きいたづらをする里の子どものせし事ぞとなり

やない箱柳箱と書く柳の枝を編みて作れる一尺四方の箱なり鎧冠或ハ追儺の時に經巻など据ゑおく箱なり

三條右大臣兼好時代の人なるべけれども三條家系國公卿補任等にも見えず誰人にや

づらし、深きゆゑあらんと、泪ぐみて、いかに殿ばら、殊勝の事ハ御覽じ咎めずや、無下なりといへば、各怪みて、まことに他に異なりけり、都のつとに語らんなどいふに、上人ゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顏したる神官をよびて、此神社の獅子の立てられやう、定てならひある事に侍らん、承らばやといはれければ、其事に候ふ、さがなき童べどもの仕りける、奇怪に候ふ事なりとて、さしよりて、据ゑなほしていにければ、上人の感涙、いだづらになりにけり。

二百卅七)やない箱に据うる物は、竪ざま横ざま、物によるべきにや。卷物などハ、竪ざまにおきて、木のあはひより、紙ひねりを通して結ひつく。硯も竪ざまに置きたる、筆ころばず、善しと、三條右大臣殿仰せられき。勘解由小路の家の能書の人々

勘解由小路世尊寺行成の子孫にて能書の家なり

御隨身近友傳記知れず そのためしは近友がさせる事なき自讃の例を取て今兼好もさせる事なき自讃七條をかきたりとなり

最勝光院高倉天皇の母后建春門院の御願なり 今一度云々兼好のつれの人にいふ詞なり

當代いまだ坊に云々當代は後醍醐天皇か又は光明院なるへし坊は春宮坊にて皇太子にれはしますをいふ

へ、かりにも堅ざまにおかるゝ事なし。かならず横ざまに据ゑられ侍りき。

(二百卅八)御隨身近友が、自讃とて、七ケ條かきとゞめたる事あり。みな馬藝、させる事なき事どもなり。そのためしを思ひて、自讃の事あり。

一人あまたつれて花見ありきしに、最勝光院の邊にて、をのこの馬を走らしむるを見て、今一度馬を馳するものならば、馬たふれて落つべし、しばし見給へとて立とまりたるに、又馬を馳す。とぐむる所にて、馬を引きたふして、乘る人、泥土の中にころび入る。其詞のあやまらざることを、人みな感ず。

一當代いまだ坊におはしましゝ頃、万里小路殿御殿なりしに、堀川大納言殿祗候し給ひし御曹子へ、用ありて參りたりし

万里小路殿里の御所にて此時東宮のおはしましゝ所なり

堀河大納言師信公なり 後醍醐天皇春宮の御時の大夫なり

御曹子局の事にて伺候の程休息し給ふ室なり

紫の朱を奪ふ論語九の卷陽貨曰に惡紫之奪朱也とある文をいふ

猶よくひき見よ春宮の堀河殿に仰せられし詞なり

秋の野の云々古今集秋部にありて在原棟梁の歌なり

に、論語の四五六の卷をくりひろげたまひて、たゞいま御所にて、紫の朱を奪ふことをにくむといふ文を、御覽ぜられたき事ありて、御本を御覽ずれども、御覽じ出されぬなり。なほよく引き見よと、おほせごとにてもとむるなりと仰せらるゝに、九の卷のそこ〳〵のほどに侍ると申したりしかば、あなうれしとて、もてまゐらせ給ひき。かほどの事へ、兒どもゝつねの事なれど、むかしの人へ、いさゝかの事をも、いみじく自讃したるなり。後鳥羽院の御歌に、袖とたもとと、一首のうちにあしかりなんやと、定家卿にたづね仰せられたるに、

秋の野の草の袂か花すゝきほに出てまねく袖と見ゆらん

と侍れば、何事か候ふべきと申されたる事も、時にあたりて

時にあたりて云々これ定家卿の記しおかれたる詞なり

九條相國前に出たり　歌狀官位など望む時の申狀也〜わどやうと讀むべきよし有職家の說なり

常在光院　相國寺の末寺にて舊跡東山にあり

在兼卿　參議左大弁正二位菅原家にて府橋氏の祖なり

行房　右京大夫世尊寺家なり一條と號す

數行もいかなるべき云々　こゝに只遠〜聞ゆる意にいふべきを數歩は不幾の意なれば〜かゝへるなり

三塔順禮　三塔とは東塔西塔横川なり三塔の諸堂を拜み廻るを三塔順禮といふなり

本歌を覺悟す、道の冥加なり、高運なりなど、ことぐく記しおかれ侍るなり。九條相國伊通卿の款狀にも、異なる事なき題目をも、書き載せて自讃せられたり。

一常在光院の撞鐘の銘は、在兼卿の草なり。行房朝臣淸書して、鑄形にうつさせんとせしに、奉行入道、かの草を取出て見せ侍りしに、花の外に夕を送れば聲百里に聞ゆといふ句あり。陽唐の韻と見ゆるに、百里あやまりかと申したりしを、よくぞ見せ奉りける、おのれが高名なりとて、筆者のもとへ言ひ遣りたるに、誤り侍りけり、數行となほさるべしと、返事侍りき。數行もいかなるべきにか。もし數歩の心か。おぼつかなし。

一人あまたともなひて、三塔順禮の事侍りしに、横川（エかは）の常行堂

欠

MISSING

〻その美しき女に對ひ居んも恥かしく思ふべしとの意なり

御垣が原大和の名所なれどこゝの禁中などをいふなるべしさて梅の花薫しき夜御垣が原の有明の空などゝそゝろありきの艶なる折ふしをいへるなり

我身さまに云々さやうの艶なる時も我身のさまに似合はで忍びありくべくもなき不風流の人〻色好まざるがよしき也

望月の云々易經卦に月盈則食とあり

其の中に云々一生涯の中の多くの所願を成就してとの意なり

我にもあらず我身を忘却して無性になりゆくまなり

此たゞひの云々人間の後世に懈怠する人〻大かた此類のみなるべしとなり

てかけぬ。心とゞめぬ人〻、一夜の中に、さまで變るさまも見ぬにやあらん。病の重るも、住するひまなくして、死期すでに近し。されども、まだ病急ならず、死に趣かざるほどは、常住平生の念にならひて、生の中に多くの事をなして、後をづかに道を修せんと思ふほどに、病をうけて死門に望む時、所願一事も成せず、いふかひなくて、年月の懈怠を悔いて、此度もし立なほりて、命またうせば、夜を日につぎて、此事彼事、怠らずなしてんと、願ひを起すらめど、やがて重りぬれば、我にもあらず、取みたしてはてぬ。此たぐひのみこそあらめ。此事まづ、人々いそぎ心得れくべし。所願を成じて後、いとまありて道に向はんとせば、所願つくべからず。如幻の生の中に、何事をかなさん。すべて所願皆妄想なり。所願心に來らば、妄心迷亂すと知りて、

此事まづハ此一大事を心に忘るべからずと也
如幻の生金剛經に如夢幻泡影とあり
妄心迷亂すと云々かの妄惑の心の我を迷はし亂すぞと覺りてその所願は一事もなすべからずとなり
放下なげ捨つる意なり
違順違ハ我心にたがふ事にて苦也順ハ我心に順ふにて樂也此苦をさけ樂につかんが爲に心身を役せらるゝなり婆娑論に心安住故不爲世違順傾動とあり
樂欲このみたもふ事也
顚倒の相佛菩薩の苦と見る事を衆生ハ樂と思ふ事なりされば我顚倒の想より樂欲する事なれば煩ひ多〳〵して所願成りぬともかひなく爭求めぬが優れりとの意なり
八になりし年云々乘好

一事をもなすべからず。直に万事を放下して、道に向ふ時、障なく所作なくて、心身長くおづかなり。

(二百四十二)とこしなへに違順に使はるゝ事は、ひとへに苦樂の爲なり。樂といふハ、このみ愛する事なり。これを、求むる事止む時なし。樂欲する所、一にハ名なり。名に二種あり。行跡と才藝とのほまれなり。二にハ色欲、三にハ味なり。よろづの願、此三にハおかず。是顚倒の相よりおこりて、そこばくのわづらひあり。求めざらんにハおかじ。

(二百四十三)八になりし年、父に問うていはく、佛ハいかなる物にか候ふらんといふ。ちゝがいはく、佛にハ人のなりたるなりと、又問ふ、人ハ何として、佛にハ成り候ふやらんと、父また、佛の教によりて成るなりと答ふ。又とふ、教へ候ひける佛をば、

校註徒然草 終

此事まづハ此一大事を心に忘るべからずと也如幻の生金剛經に如夢幻泡影とあり

妄心迷亂すと云々かの妄惑の心の我を迷はし亂すぞと覺りてその所願は一事もなすべからずとなり

放下なげ捨つる意なり

逸順違ハ我心にたがふ事にて苦也順ハ我心に順ふにて樂也此苦をさけ樂につかんが爲に心身を役せらるゝなり婆婆論に心安住故不爲世逸順傾動とあり

樂欲このみたもふ事也

顚倒の相佛菩薩の苦と見る事を衆生ハ樂と思ふ事なりされば我顚倒の想より樂欲する事なれば煩ひ多くして所願成りぬともかひなく畢竟求めぬが優れりとの意なり

八になりし年云々 樂好

一事をもなすべからず。直に万事を放下して、道に向ふ時、障なく所作なくて、心身長くまづかなり。

(二百四十二)とこしなへに違順に使はるゝ事は、ひとへに苦樂の爲なり。樂といふハ、このみ愛する事なり。これを、求むる事止む時なし。樂欲する所、一にハ名なり。名に二種あり。行跡と才藝とのほまれなり。二にハ色欲、三にハ味なり。よろづの願、此三にハまかず。是顚倒の相よりおこりて、そこばくのわづらひあり。求めざらんにハまかじ。

(二百四十三)八になりし年、父に問うていはく、佛ハいかなる物にか候ふらんといふ。ちゝがいはく、佛にハ人のなりたるなりと、又問ふ、人ハ何として、佛にハ成り候ふやらんと、父また、佛の教によりて成るなりと答ふ。又とふ、教へ候ひける佛をば、

幼くて父に問ひしなり
佛ハ云々佛說三身經曰
無邊經に文殊白佛言我
從昔聞如來說法如來何
佛開此說法佛告文殊言
過四十一重內大院來大
毘盧遮那說法文殊重白
佛言云々とある問答に
似り
空よりや云々禮記問喪
篇に禮義之經非從天降
也非從地出也人情而已
矣とある詞によりてい
へるなるへし

何か敎へ候ひけると又答ふ。それもまたさきの佛の敎へによりて、成り給ふなりと、又とふ、その敎へはじめ候ひける第一の佛へ、いかなる佛にか候ひけるといふ時、父空よ降りやりけん、土よりや湧きけんといひて笑ふ。問ひつめられて、に答へずなり侍りつと、諸人にかたりて興じき。

校註徒然草 終